

従者カップルはイチャつきたいから告らせたい

トネツピー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

色んな事があって、付き合う事ができた崇宮君と早坂さん

付き合いたてでイチャイチャしたいはずなのだが、外面的にはほとんど今までと変わりない二人（本人達基準）

それもそのはず早坂さんは自分の主が、崇宮君は主と親友が付き合っていないのに自分達がイチャつくのが何故か申し訳なく感じたので二人は自分達がイチャイチャするために今まで以上に二人を告らせるために奔走する

苦労な従者二人の物語

「二人とも、いい加減告ってください!!」

と、言うわけで、はい

あんな感じで終わるわけにいかないし、個人的にここからの方が私
が書きたい所なので続編です

駄作ですが読んでおいた方がいいと思いますので、前作を

四宮の料理人兼白銀の親友は近侍さんに告りたい

<https://syosetu.org/novel/1822>

27 /

目次

番外編くく従者二人とその出会いくく	1
本編	
設定（前作から多少変更あり）	8
崇宮誠は一緒にさせたい	12
崇宮誠は不安にさせたくない	21
従者二人は楽しみたい	29
従者二人は喜ばせたい	43
従者二人は贈らせたい	53
早坂愛は引き下がれない	67
崇宮誠は終わりたくない	76
従者二人の温泉旅行	83
愛の本音と誠の覚悟	91
早坂愛は打ち明けたい	102
従者二人は見守りたい	112
崇宮誠は相談したい	120
崇宮誠はやめさせたい	130
崇宮誠は手助けしたい	137
崇宮誠は戦わせたい	145
崇宮誠も読ませたい	152
従者二人は楽しませたい	162
従者二人♡アクアリウムpart1	170
従者二人♡アクアリウムpart2	178
従者二人は診させたくない	188

従者二人の体育祭	part 1	199
従者二人の体育祭	part 2	207
崇宮誠と石上優	side 崇宮誠	216
崇宮誠と石上優	side 石上優	219
崇宮誠は閉じさせない	part 1	223
崇宮誠は閉じさせない	part 2	229

番外編くく従者二人とその出会いくく

《とある日の四宮別邸にて》

「ねえねえ誠君、誠君」

「ん？どうかしたか？愛」

「私達が出会った日の事、覚えてる？」

「覚えてるけど？」

「じゃあさ、聞かせてみてくれない？誠君から見てどういう出会いだったのか」

「おう、別にいいけど。恥ずかしがるなよ？」

「うんうん。だから聞かせて？」

「そうだな。あれは確か4年前だな――

「誠く、四宮の集まりに行くぞく」

「わーってるよ。もう行くから玄関で待ってて」

今考えると相当荒んでたな。親から愛は感じてても、それでも、寂しかったんだろうな

でも、父さんや母さんのこれからの身の振りのためにも、我が儘は言えなかった

だから、荒んだんだろうな

「ごめんな。父さん母さん、待たせた」

「大丈夫ですから。さ、行きましょ」

「そうだな。レッツゴーだ!!」

全く、これから大事な食事会だつてのに気楽なこつて、みたいなことを思ってたよ

あの時、俺は全然楽しくなかったんだよ

折角、二人と居られると思ったら集まりかよ………つてな

まあ、そんなこんなで集まりの会場で、愛を見つけた

「かぐや様、こちらに」

「ええ、わかっています」

「っ!？」

正直、衝撃だった

こんな綺麗なかわい人が居るなんて、と思ったよ

染めた金髪とは違う、綺麗で透き通った金色の髪、美しい碧い瞳、優しきの中に気品を備えた声、全部に心惹かれた

この人に好かれない、本気でそう思った

その時だよ

「その君、さつきからあの二人を見て、どうかしました？」

「なにか、あの二人だけ、爆弾でも扱うかのようにみんな慎重だと思いまして」

「そうかしら？みんな普通に接していると思うけれど？」

「なんとなくか、感じるんですよ。あの二人の周りで話している人たちから、こう、腫れ物を扱うような雰囲気を」

俺はその時、なんでなのか本気でわからなかった

それに、話しかけてきた女の人が俺を試していたんだろうなあっていうのはなんとなくわかるよ。今はね

「じゃあ、教えてあげましょうか。あの黒髪の女の子が四宮かぐや様、四宮家の令嬢です。それで、もう一人の子が早坂愛、かぐや様の近侍です」

「なるほど……………」

あれが噂の妾の子か……………

だから皆扱いがわからないんだって、言われてわかったんだ

「でも、あの二人、寂しそうですよ。妾の子とか関係なく接してあげないとダメだと思います」

「じゃあ、あなたは仲良くしてあげられる？あの二人と」

「努力はしますよ。最初から妾の子とか、そんな理由で接されたら誰だって嫌ですからね」

「そうですか。じゃあ、仲良くしてあげてくださいね」

「言われなくとも、チャンスさえあればそうしますよ。ところであなたは……………いない」

この時は、まさか愛のお母さんと話してるなんて思ってもみなかった

で、会話の糸口を探したけど中々見つけられなくて、飯も美味しいけど、なんというか、食べてもらう人への愛よりも恐怖を感じたから、外で休んでたんだ

そしたら、糸口は向こうからやって来てくれた

「あなた、何してるんです？見ない顔ですし」

「初めまして、僕は崇宮誠です。よろしく」

「所で、何をしていたんです？会食を抜け出して」

「料理の勉強です。僕、料理好きなんです」

「そう、熱心ね」

「かぐや様、どこに……。あつ、いた」

それに、俺が本気で好きになった人も、来てくれた

「あら早坂、遅かったわね」

「急に消えないでください。心配になるでしょう。おや、あなたは」

「崇宮誠です。よろしく」

「かぐや様の近侍の早坂愛です。どうぞよろしく」

さて、挨拶も済んだしまた本でも読もうかと思った時にかぐや嬢から衝撃で、今にして言えば運命っぽいことを言われたんだよなあ

「誠、と言いましたね。私になにか作りなさい」

「……………はい？」

何を言ってるんだよ、って本気で動揺したんだよなあ……………

愛も否定してたし

「かぐや様!?!何を考えてるんですか!?!」

「早坂、黙ってなさい。私が良いと言ってるんです」

「くっ……………。わかりました。崇宮さん、かぐや様に毒でも盛ったら容赦しませんよ」

「そんなことしませんよ。でも、厨房が使えないんじゃないやどうにもなりませんよ」

まさか、作らされるなんて思わなかったよ

でも、今までで一番楽しく料理を作ったよ、それだけは確かだった

「じゃあ、作ってみてください」

「ちよ、ちよっと待てよ。ホントにいいのか？」

「何がですか？」

「あんた、腹一杯じゃねえのかよ。だって、会食食べたんだろ？」

「ああ、その事なら心配要りませんよ。食べてませんから、ほとんど」

「なんで？」つていう言葉が出るよりも早く

愛が答えてくれたよな、あのとき

「かぐや様が、この料理には何か足りないからいらないわとおっしゃってあまり食べなかつたんです」

「なるほどね」

「さ、早く何か作りなさい」

「へいへい」

そして、俺は一人で厨房に放り込まれた

そのあと、この世の暗い部分を見たけどな

「四宮が言ったから使えるようにしたが、もう食材はほとんど残ってねえよ。諦めな」

その言葉に、イラツとした

だって、目の前に雑に捌かれて食える部分が残ってる食材がおっ転がってるんだからな

「米と茶ありますか？あと、その鮭はもう使わないんですか」

「は、なに言ってる」

「早く答えろ。その鮭は捨てるのかって聞いてるんだよ」

「っ、使わねえよ!!あんな部位、出せるわけないだろ!?!相手はあの四宮だぞ!?!」

そんときの俺はどうかしてたんだろうな

あの四宮？

「だからどうした」

「は？おま、今なんて」

「相手が誰だろうが関係ねえよ。テメエはそれで逃げたいんだかなんだか知らねえが。俺は常に目の前の食材を余すことなく使うだけだ。わかつたら失せな。調理の邪魔だ」

たぶん、こんなことを言ったんだと思う

あんまり覚えてないけど、その時に料理人がビビってた顔は今でも鮮明に覚えてるけどな

「とりあえず、鮭の残りの食える部分を切り取って、焼いて、その間に緑茶を沸かして……………」

そこからは、説明は要らんだろうけど調理だなんて言っても作ったのがあれだから調理と呼べるかは微妙だけだな

「焼けた鮭を細かく切り刻んで、沸かした茶に入れて弱火で軽く……………。今だな」

で、茶から鮭を上げて、米に茶をかけて、鮭を乗せて、刻んだ海苔をふりかけて完成だ

「お待たせしました、かぐやお嬢様。鮭の茶漬けです」

「ええ、いただきます」

そうして、かぐや嬢は静かに食べ始めたんだよな

愛は、不安そうな顔してたけど

「はい。どうぞ」

「これは？」

「さっきのと全く同じ茶漬けだよ。そんなに心配ならあんたも食べれば？」

「いいんですか？」

「それはあんたが決めなよ。早坂さん。とりあえず、俺は食べるから。

いただきます」

「……………いただきます」

食べ終わるまで無言で食べたなあ……………

なんであるとき、誰も来なかつたんだろうか

もしかして、奈央さんが手を回してくれてたのか？

今となつてはわかんないけどさ

「ふう、(ちそうさまでした」

「(ちそうさまでした」

「(っそさんでした。どうだった？お二人さん」

「ええ、美味しかったです」

「はい。美味しかったです。疑ってすみませんでした」

「気にしなくていいよ。さて、そろそろ集まりも終わる頃でしょうし、帰りましょう?」

ホント、この時はちゃんと帰らなきゃなにされるかわかったもんじゃないから、早く帰りたいかったんだよ

まあ、あのときああ言ってくれなきゃ今の俺は存在すらしなかっただろうけどさ

「そうですね。さ、かぐや様、戻りますよ」

「早坂、あなたは先に戻っていなさい」

「はあ。わかりました。ですが、お早く帰ってきてくださいね」

「わかっていきます」

「それでは。崇宮さん、またいつか」

「またいつか、か。」

そういえばあのとき愛はすっげえ機嫌悪そうだったよな前にも話してたけど、俺を危険だと思ってたんだっけ?

まあ、いいけど

「それで、かぐやお嬢様? 僕になんのようで?」

「とりあえず、その僕を止めなさい。不自然です」

「あらら、それじゃ、俺でいかせてもらいますよ。で、なんですか? かぐやお嬢様」

「あなた、料理が好きと言っていましたね?」

「ん? まあ、好きですけど?」

「では、誠。あなたは今日から私の料理人にします」

「……………は?」

この時は、ホントこれにつきたな

びっくりし過ぎて思考が止まったよ

でも、愛との接点ができると気づいたたどうでもよくなったけどな

———
つてのが、馴れ初めだと思っけど?」

今、考えると面白い出会い方してんなあ……………

「あ、あわわ……………／／」プシユー

「あ、愛？大丈夫か？」

「透き通った金色の髪、美しい碧い瞳、えへ、えへへへ」

だらけきつちやって……………

だから言いたくなかったんだよ

折角、愛と一緒になのに呆けられちや、甘えられねえじゃんかよ
……………

「誠くうくん」

「……………なんだよ」

「うえへへへへ。呼んだだけ」

「はあ……………。全く……………」

まあ、こういう愛を見るのもいい経験だな
さて、動画でも録っていつか弄ってやろう

「愛く、こっちみて」ピッ

「えっへへへ、なに？スマホなんかこっちに向けて、動画録ってるの？」

「ちげーよ。記念だ記念」

「えー、なんの？」

「俺達の出会い記念だよ」

「いいよ」

「んじゃ」

「はい、チーズ」パシヤッ

神様が居るかどうかはわかんねえけど、いるのなら感謝するよ
でもそれ以上ありがとう、父さん、母さん
こんな出会いの出来る環境に俺を連れていってくれて

本編

設定（前作から多少変更あり）

崇宮誠（たかみやまこと）

かなりしまった体をしている

性格は優しい、かなり真面目、世話好き

特技 料理

好きなもの 読書、猫、ゲーム、早坂さん

嫌いなもの 騒がしいこと

崇宮家は早坂家と同じく四宮家に吸収された過去があるが本人は全く気にしていない。料理の才能があり四宮の料理人を勤めている。

一応バイクの免許も取っている

生徒会の総務、所謂「縁の下の力持ち」と呼ばれる役職にある。

本来の性格は優しいのは変わりないが自分を大事にしていないし、かなり構ってちゃんである。

昔はバレずにやんちゃして喧嘩ばかりしていたが早坂を好きになったことや自分が色々なひとに関わるうちに変わらなければいけないと認識し今の性格になった。

中等部であることをしたため高一にビビられている。本人は恥ずかしいから余り触れて欲しくないらしい。

ちよくちよく本来の性格がでる。

弱るときは極端に弱る。

大の猫好きで、家に猫を4匹飼っている。

ゲームも好きで好みは、○ンハンとメタ○アである

そして、嫌な予感がほぼ未来予知レベルで当たる

その昔、好きな人に自分をさらけだした結果「鬱陶しい、思ってたのと違うサヨナラ」と言われたのがトラウマになり自分の本来の性格を隠していたが、夏祭り以降、生徒会室では素で話すようになった
自分が本当に崇宮の当主になれるか不安で仕方がない。

成績は全国模試は5位以内だが、学校の定期テストでは110位前後と言うなんとも奇妙な成績

本人曰く「俺、学校のテストでは頭悪いんですよ。本番に弱いんでしょうね?」と言っているが手を抜いているか否かは不明

生徒会と早坂さんから見た崇宮誠

白銀御行↓頼もしい相談相手、親友が自分より早く彼女ができて少し、いやかなり焦っている、親友が告らせるのに今まで以上に協力的なのに驚いている

四宮かぐや↓早坂の次に相談している人、両片思いの従者二人が付き合ったのは嬉しいが、そこから告らせるのに二人が必死だからちよつと戸惑い気味

藤原千花↓優しく料理がめっちゃ美味しい人、早坂さんとどうして付き合いたてなのにイチャつかないのか不思議で仕方ない

石上優↓ゲームー友達、なんか最近必死になって何かしてる、尊敬する自分を救ってくれた先輩

早坂愛↓自分と同じかぐやの相談相手、大好きな彼氏、もつとイチャつきたい、でもこういう共同作業もして嬉しかったりする

崇宮誠から見た生徒会と早坂さん

白銀御行↓のろけてくる相手その1、信頼できる友達だが、イチャつきたいからさつさと告るか、告られてほしい

四宮かぐや↓のろけてくる相手その2、料理を美味しそうに食べてくれるいい主、白銀と同じようにイチヤツきたいからさつさと告るか、告られてほしい

藤原千花↓ちよくちよく二人を上機嫌にしたり、不機嫌にしたりする要注意人物、

石上優↓ゲーマー友達、同じ苦労人だがかぐや嬢に怯えている、超頼りになるめっちゃいい後輩

早坂愛↓好みにどストライク、めっちゃかわいい自慢の彼女、告らせる策を考えるのも面倒だが嬉しかったりする

猫ちゃん達の設定

クロ

種類 ボンベイ

基本的にデレデレで常に甘えん坊。しかし、崇宮父にはあまりなついていない。誠LOVE。

トラ

種類 キジトラ

自由気まま、ある意味一番猫っぽい猫。寝坊助で基本ずっと寝ている。崇宮母に懐いている。

ココ

種類 アメリカンショートヘア

活発で常に動きまわっている。ツンデレ気味、崇宮家族と一番よく遊んでる。崇宮父に懐いている。

タマ

種類 三毛猫

基本的におっとりしていて、行動がすべてゆっくり。よく誠が湯船に浸かった後に入ってくる崇宮家全員にほどよく懐いている。一番懐いているのは、白銀御行。

オリキャラの面々

昴さん

凄く頭がいい

何を考えてるのかわからないが、時々ボーっとしている

なんか、全部見透かされてるような感じがする

美人な彼女さんがいるそうだが、崇宮君達は誰か知らない

元崇宮家の使用人

一之瀬 海理（いちのせ かいり）

年齢不詳

若い頃は自分の夢がなにかについて迷い、店を持つ事と恋を天秤に掛けて恋を取って好きな人を追っかけて四宮の料理人となった人

料理の腕前は超一流で天性の勘で相手が迷っていることや今、恋をしているか等を料理を見る、味見することで感じる事ができる

時崎 愛華（ときさき まなか）

年齢不詳

若い頃、自分の恋よりも使用人としての仕事を優先し、恋を諦め、好きな人の夢を応援する側に回ることを決意したが、結局、当の本人が夢を捨てて自分を追っかけて来たため恋を諦めず、勝ち取った人
使用人としては一流だが、行動が思っていることと違う方向にとられやすい人

崇宮誠は一緒にさせたい

秀知院学園には1年時と2年時の前後期それぞれ1つずつ授業を選択する

この選択授業では、混合クラスで授業が行われる

だから、ここでかぐや嬢と御行をなんとしても同じ科目を選択してもらって、もっと仲良くなってもらわないと

「かぐや嬢達は選択授業つてもう決まったのか？」

「それ、私も気になってたんです。皆さんはどれにしたんですか？」

「すんなり生徒会メンバー一緒になりましょう!! ってなれば楽でいいんだがなあ……」

「私はかぐやさんと一緒に良いですよー! 普段クラス違うから、選択授業だったら一緒に授業できて嬉しいですよん!」

「おいおい、そんな動機で選んでどうする。折角の学ぶ機会だ。自分で考えて、自分に必要なものを選べよ」キツ

「そうですよね。誰かと一緒に授業受けたいなんて、そんな不純な動機で選んではいけません」

えく……

何でそこで意地張るんだよ

新手のバカじゃん

そうやって上手く行ったこと今まで一回もねえじゃん

いい加減気づいて素直になってくれよ!!

「そうですか。でも、それも青春じゃねえの?」

「そういえば、崇宮さんはどうしたんですか?」

「ん、俺か?俺は美術だよ」

「誠、その言い方って……」

「もちろん早坂と一緒にだぜ?」

「そういえば、誠!!お前、同じクラスの早坂さんと付き合ってるって本当か!?!」

「そういや、御行には言っていなかった……」

「というか言えてなかったけ？」

「こんなんだけど親友だから報告はしないとな」

「あ、うん。そうだな付き合ってるな。うん」

「お前達、一体どこに接点があったんだ！」

「お家関係だそうですよ。昨日、A組の教室で話してましたから、接点」

「ちょ、待て藤原」

「あの時お前居なかったはずだよな？」

「でも、知ってて当たり前か」

「あんだだけ堂々と質問に答えたんだから」

「そうなのか？待て、教室でつてことは、昨日の騒ぎはまさか……」

「そうだよ。俺が教室に入って早々早坂の奴がいきなり付き合ってることをカミングアウトしたから騒いでたんだよ／＼／＼」

「やっべ、改めて誰かに言われるとすっげえ恥ずかしい」

「全く、何てことしてくれてんだよお、早坂……」

「今、顔真っ赤だろうなあ……」

「崇宮さん照れてます。かあわいい」

「うっせ、そんなことより三人は結局選択授業はどうするんだよ。元々そういう話だったろ？」

「そういうばそうでした。で、会長とかぐやさんはどうするんですか？」

「ナイス藤原!!」

「いつもは鬱陶しいが、こういうときは最高だよお前は!!」

「あれ、机の上からペンが無くなってる」

「ということとは……」

「かぐや嬢、もう決まってたのか？」

「ええ、でもいくら誠でも教えませんよ？これは私の秘密です」

「そうか、だったら深くは聞かねえよ」

「さてさて、こうなってくると御行も何もしないわけにはいかないよなあ……？」

「そうだな……、俺はおn」「音楽は却下だ（です）」

「ど、どうしてだ?」

「御行、ちよつと耳貸してみ?」

親友として心苦しいが、時には残酷な真実を告げてやるのもまた、親友の務めだよな

「何だ?」

「お前の信賴のためにこうやってんだよ。それで理由だが、お前が音痴だからだよ」

「なっ!?!」

「会長、校歌1つであれだったんですよ?音楽なんて取ったら私どうなっちゃうんですか……?」

「う……、ぐう……」

「だから、音楽は却下だ(です)」

んく、こうなるといよいよかぐや嬢に聞く以外の選択肢がなくなってきたな

さあ、どうする御行?

「四宮、ペンを返してくれ」

「あ、はい。どうぞ」

「俺は決めたぞ」

お、賭けに出たか

当たる確率は3分の1、そのうち御行が選べるのはその中の2つの内どちらかのみ

実質確率はめっちゃ低いだろうな

「俺は、崇宮と同じ美術にする」

「おう、理由を聞いても?」

「理由なんてどうでもいいだろ?それより藤原書記、生徒会だよりを職員室まで運ぶのはお前の仕事だろう。運ぶの手伝うから続きは終わってからにしとけ」ドンッ

おー、さすが生徒全員分、分厚いなあ

「あっ、そうでした……。戻ったら教えて下さいね」

「わかりました。帰ってきたらお教えしますよ」

「行ってら〜」

よし、あの二人は行ったな

「で、かぐや嬢？あんたは何選んだんだ？」カリカリ
ん？カリカリ？

この音ってペンが走ってる音だよな？

つてことはかぐや嬢、まさか書いてなかったのか？

「ふふっ…。ふふっ♪」

「まあ、なんだ。一緒になれて良かったな？かぐや嬢」

「ふふふふふ」クルクル

うわあ、スツゴい嬉しそうに回ってらっしゃる

これで、出席番号的にかぐや嬢はたぶん御行の隣だろうな

それにしても御行の奴、何でこんなタイミングよく藤原連れて出
てったんだ？

ひよつとして、かぐや嬢が書いてないのに気づいた……？

「まさか……。な」

そんなことより……

「かぐや嬢、あんたいつまで回ってるんだよ!？」

「ふふふふふ」クルクル

その後二人が帰ってきて、藤原書記も美術を選択することになった
そんなこんなで二学期初めて生徒会2年が全員揃った生徒会が終
了した

《くくその夜くく》

「ごちそうさま。誠、今日も美味しかったです」

「お口に合ったなら良かったです」

「後で、私の部屋まで来てください。話があります」

「畏まりました、お嬢様。それでは、またのちほど……」

さて、早く片付けてかぐや嬢の部屋に行くか

《くく崇宮君、片付け中くく》

ふう、片付け終了だな

「崇宮君、片付けもう終わった?」

「ん？早坂か。今終わったとこだな」

「そっか。それじゃ一緒にかぐや様の部屋まで行く?」

そうだそうだ、かぐや嬢に呼ばれてたんだっ
ん？一緒には？

「早坂も呼ばれたのか？」

「うん。なんの用だろうね？」

何のようって、思い当たる節がいくつかあるよ？

主に君が色んな事しでかしてくれたからね？

「あー、うん。早く行くか」

「もうちよつと、ゆっくり話しながら行かない？」上目遣い

おうふ、かわええ……

なにあの上目遣い、可愛すぎでしょ

ホント、俺の彼女マジ天使

話ながら行こう、そうしよう

「そうするか」

「うんっ!!」

あれからちよつと歩いたんだが……

「……」チラッ

「……」チラッ

「っ!!」プイッ

一体何を話せばいいんだ!?

ちよくちよく見合っては目線を反らして見合っては反らして!!

ああく!!こういうときに限って全然話題が出てこねえ……

いくらゆっくり歩いてても、このままじゃかぐや嬢の部屋についち

まう

「そ、そういえばさ。崇宮君」

「な、なんだ？」

「スマホってどうするつもりなの？」

「あー、スマホか」

そーいや早く買わないとな

あれないと色々不便だし

今週の日曜は空いてるはずだから、そんとき行くか

「今週の日曜日に新調する予定だけど？」

「そうなんだ。あの、もしよかったらなんだけどさ……。一緒に行かない?」

「え……。?」

これって……。その……。デートのお誘い、だよな?

「一人でゆつくり選びたいって言うんなら全然いいんだよ?」

「い、いや、全然。俺スマホの最新とか疎いからいいんだけどさ。早坂は近侍としての仕事とかは良いのか?」

「それは大丈夫。かぐや様、日曜日にごどこかに行くことないから」

そ、そうなのか。だったら全然大丈夫だよな?

早坂から誘ってくれたんだし

「だったら早坂、頼めるか?」

「うんっ!!それじゃ、日曜日10時にそっちに行くね!!」

「お、おう、わかった。っと、着いたな。さ、近侍モードに切り替えな。入るぞ」

「わかっていきますよ、崇宮君。かぐや様、早坂と崇宮です。入りますよ」ガチャツ

さ、一体どんなお叱りを受けるのかな?

「二人とも、なぜ呼ばれたかわかるかしら?」

「いくつか思い当たる節は……」

「いえ全く」

は、早坂さん!?

どうして心当たりがないんですか!?

あんなに色々やったのに!?

「じゃあ、言いますね」

「ゴクリ」

「二人ともおめでどう!!」

……。へ?」

「ありがとうございます。かぐや様」

「お、おう。ありがとうございます、かぐや嬢」

なんだ、良かった」

てつきり話してないことにたいして怒られるのかと思ってた

良かった〜

「と、言いたいものだけけれど。どうして最初に私に言ってくれなかったの!？」

「え、そこですか?」

「何が!？」

「いえ、何でもないです。続けてください」

「そもそも、どうして最初に主人である私に言ってくれなかったの!私悲しかったのよ?すっごく悲しかったよ?」

そこなんつすか……

てつきりかぐや嬢が花火を見に行くのに必死になつてる時に告白してたのにキレてるのかと思つてたわ

「かぐや嬢、それはな?」

「私がかぐや嬢を驚かせようと思つたので、私が崇宮君に頼んだんですよ」

「そ、そうだったの……。ごめんね?あなた達の気も知らないで怒つちやつて」

「わかつて頂けたなら結構です。それで、お話はそれだけですか?」

「あ、後、どうしてクラスのみんなの前で言つたのかしら?」

「そういえば、驚かすなら別にこういう場面でも良かったわけだもんな?」

どうしてなんだ?

「それは……」

「どうしてなの?」

「その……、崇宮君は私のだって、みんなに、見せつけておこうと思つて／＼」

「へえ〜。早坂、そんなこと考えてたのね?」

「おかわいいいこと」

「だ、だって!!崇宮君モテるし、優しいからいつ他の子が近づいて来るとかわからないから／＼」

「誠はどう思うの?」

どう思う、か……

「なんか、申し訳ないじゃん？」

だって、親友と主人が花火見ようと必死になってる時に告白して付き合ってるんだよ？こっちは

それに、あんなことがあったのに二人は進展なしだよ？

それなのにイチヤつけないですよ

「そう……。イチヤつきたかつたらかぐや様と会長を付き合わせたらいいんだよね？」

「そうだな……。そうなるな」

「だったら崇宮君!!」

「はい!!」

な、なに!?

「スマホ買ったたら、早速作戦会議するよ!!」

「あ、はい。どうして？」

「だって私、崇宮君とどこでもイチヤイチヤしたいもん!!崇宮君が後ろめたいんだつたらその元を解決すればいいんでしょ!?!だから作戦会議するの!!わかつた!?!」

「そうだな。もう部屋の前だけ？そろそろ遅いから悪いけど帰るわ」

「あ、ごめん。一人で熱くなっちゃって……」

「いや、実際俺も同じ事考えてたから大丈夫だ。それじゃ、おやすみ。」

早坂

「おやすみ、崇宮君。大好きだよ?／／／」

「お、おう。俺もだよ／／／じゃあな」

「うん、また明日」

《～～帰り道～～》

早坂、めっちゃやる気出してたなあ

早坂の言う通り、あの二人をさつきとくつつければもつと大々的に早坂とイチヤつけるんだよな

頑張るか、俺と早坂のイチヤイチヤのために

こうして、多くのイベントと波乱の待つ俺たちの二学期は始まったのだった

崇宮誠は不安にさせたくない

《くある日の放課後く》

「崇宮。このあと、ちよつといいか？」

「はい？自分ですか？いいですけど」

家庭科の先生が一体何のようだ？

別に何でもいいけど……

「愛さん、自分は先生に呼ばれているので。さようなら」ペコッ

「ん、バイバ☆イ☆」ヒラヒラ

さ、早く行かねえと

「先生、一体何のようでしょう……」ドンッ

「あいたっ」ドサッ

「あ、すみません。おや？あなたは」

「いえ、こちらこそすみません。って、あなたは」

「柏木（崇宮）さんですよね？」

後ろからぶつかつちやうなんて申し訳のないことしたなあ

当たり屋みたいじゃん

にしても、この子が件の柏木さんですか……

思わぬところで出会ったなこりや

「すみません。自分の不注意でぶつかってしまって」

「いえいえ、気にしないでください。誰だって考え事はしますから」

「そう言ってもらえると助かります。ところで、どこへ向かうと

していたんですか？」

ホント、申し訳ないから

さつさと行く

「ちよつとかぐやさんに話があつて生徒会室にと」

「そうですか。ではお気をつけて」

「ちよつと待つてください。崇宮さんはどこへ？」

「自分は先生に呼ばれているので家庭科室まで」

「途中まで一緒じゃないですか。ちよつとお話していきませんか？」

あ、逃がしてくれない感じですか

しゃーない、途中まで同じ道だし、距離もそんなないから付き合うか

「構いませんよ」

「そうですか。良かった……。翼がいなくてちよつと心細かったんですよ」

俺は翼くんの代わりですか、そーですか

ま、当たり前か……

《〜二人で歩き出して〜》

「そういえば、崇宮さんと早坂さんが付き合ってるってホントなんですか?」

「ええ、まあ。お付き合いさせていただいていますよ」

こいつ、最初っからこれを聞く気で俺を引き留めたのか

心細いなんて絶対嘘だ、こいつ俺と早坂の事聞きたいだけだろ

「それにしても驚きです。まさか、崇宮さんと早坂さんが付き合ってるなんて」

「そんなに驚きですかね?」

「驚きですよ。だって、全く正反対の二人ですよ?」

「そうですか。ですが、人は見かけによらないものですよ?」

確かに、パツと見ギャルっぽいのと、くそ真面目な生徒会総務だもんな

そりゃ、驚きか

「そうみたいですわね。私も早坂さんとお友達になれるかなあ……。どう思います?・崇宮さん」

「なれると思いますよ?・彼女、人懐っこいですし」

正直、早坂と柏木さんってなんか、見た目でも性格でもないけどどっか似てる気がするんだよね

なんでだろ?

「ホントですか!?!」ズイッ

「うわわ、顔、近っ!!」

そんな急に来られたらバランス取れな

「うわあ(キヤア)!!」ドサツ

あいたたた……

今度は倒れちまった

ホント、柏木さんに悪いな

「柏木さん!?大丈夫ですか?」

って!!顔近づ!!

鼻息が当たって……

「……………」

「あいたたた……。すいません崇宮さん。って、おや?」チラッ

今、一瞬どこ見て……

て、え!?なんでそんなに近づいて来るんですか!?

「顔赤くして、かわいいですね?でも、彼女さんがいるのにそんな顔し

ちやったら、食べられちゃいますよ?」

「あ、はい……」

なんなんだ!?この女!?

何か、得体の知れない色気がある……

危険だ、俺の勘がこいつは危険だつて言ってる

「なくんちやって、崇宮さん。倒れたとき、庇ってもらってありがとう

ございました」

「え、は、いや……」

「それでは私はこれで」スタスタ

なんだつたんだ?さつきのは……

さつきと全然違う……

さつきの危険な感じが全くしなかった……

一体、何者なんだ?柏木渚

ちよつとだけ、警戒しといた方がいいかもな

「おつと、早く先生のもとに行かないと」

「何あれ、絶対許さない」

《くく崇宮君、家庭科室着くく》

「失礼します。先生、自分に何のようですか?」

「ああ、崇宮。お前、去年の2年まあ1個上だな。その先輩の調理実習、覚えてるか?」

あゝ、あの噂というか事件のやつね

ということとは調理実習関係か……

「あれですか？三枚おろし大量ギブアップ事件ですか？」

「そんな名前になってるのか……。そこでお前に頼みたいことがあるんだ!!」

「なんでしよう？」

「魚を捌くのを手伝って欲しい。全部の調理実習で一匹ずつ生徒に見せるのも兼ねて捌いてほしい!!頼む!!」

えゝ、つていうかなんで俺に頼むんだ？

俺、この人に料理人だなんて伝えてないはずなんだけど……

「どうして自分なんですか？」

「それはな、海里に聞いたらお前にさせてみるって。それにお前、四宮家の集まりで食事を作って出したそうじゃないか」

「え、海里さんから聞いたんですか？」

「そうだ」

あの人、俺の事情も知らないで勝手に言いふらしてるんじゃないだろうな？

まあ、あの子の紹介だし、受けるか

「まあ、いいですよ」

「本当か!!ありがとうございます!!」

「ですが、2つほど条件があります」

「なんだ？俺のできる限りの事ならなんでも言ってくれ」

ホントこの先生いい先生だよな

じゃ、これはいけるだろうし頼むか

「1つ、自分が料理人であることを伏せて、頼れそうだったから三枚おろしを手伝って貰ったらうまかったからやつてもらった。ということにしてください」

「それぐらいは全然いいがどうしてだ？」

「自分、料理人であることを話してないんですよ。だからです」

「お、おう。わかった。で、もうひとつは？」

「他の方にはこの事を絶対に話さないでください」

「そんなことでいいなら喜んでそうしよう」

っし!!情報流出阻止成功!!

さ、生徒会室行く

「それじゃ、先生用事はこれだけでですか？」

「ついでに、ゴミ捨て頼めるか？」

「わかりました。それではまた」

「おう。魚が届いたらまた声を掛けるわ」

「よろしくお願いします」ペコリ

さて、このゴミ捨ててさっさと生徒会室行くか

「失礼しましたく。さ、行くか。って、愛さん?どうかしたんですk」
ガシッ

」

「痛いですよ?離してくれませんか?って、ちよ!?!」

」

痛い!痛い!!

引つ張らないで!!

何処連れてく気なの?

それになんか怒ってる!?

俺今日早坂になんかしたか?

いや、絶対なにもしてない

うん、絶対ひどいことしてない!!

ならどうして!?!考えろ、考えろ……

《〜〜そのまま引きづられるようにして連れられて少しして〜〜》

「愛さん、いい加減にしてください!?!どうムグツ!?!」

え、どうして早坂の顔がこんなに近くにるんだ!?!

それに唇に柔らかい感触が

これ、キスされてる!?!

うそうそ!?!え!?!どうしたん!?!

いきなり

「ぶはっ、なんだよ／＼／いきなり／＼／

」ポスト

「おっと、どうした?」

「崇宮君は、私のだもん……」

「え……?」

俺が早坂の?

まあ、早坂の男だけでも

何があつたんだ一体……

「どうしたんだ?早坂?」

「絶対、絶対、私のだもん。他の誰にも、渡さないもん……」

「早坂……」

まさか、早坂、柏木さんとのあれ見てたのか

そうか、それで不安にさせちまったのか

俺、彼氏失格じゃねえか!!他の女で顔を赤らめるなんて!!もつと
しつかりしろバカタレ!!

「早坂、不安にさせて悪かったな。でも安心してくれ。昨日も言った
が、俺は早坂一筋だし、俺の目には早坂しか写ってないからな?」

「ほんと?」

「ホントだ、ホント」

「なら、もうちよつとこのままで……」

「はいよ」

全く、早坂をここまで心配にさせるとは……

付き合ってたからってまだまだ余裕ぶつちやいけないな

《〜数分後〜》

「ご、ごめん／＼／誠、もう大丈夫だし／＼／」

「そ、そうですか?満足したなら良かったです／＼／」

口調も戻ったし、もう大丈夫そうだな

もつと一緒にいたいし、心配かけて申し訳ないんだが……

そろそろ生徒会室に行かないと

「それじゃ、そろそろ自分は行きますね?」

「あ、ちよつと待って。誠」

「なんですか?」

「日曜日、楽しみにしてるね」

なんだ、そんなことか

「当たり前ですよ。必ず満足のいく初デートにしましょうね？」

「それじゃあね☆誠、生徒会も頑張ってる☆」

「はい。頑張ってますね」

「それじゃ、ばいばい☆」

《くく崇宮君、ごみを捨て生徒会室に移動中くく》

お、生徒会室が見えてきたな

って、あらら？あれって御行と藤原に優？

なんで生徒会室前にいるんだ？

それにみんなで見えて何してるんだ？

あ、かぐや嬢が倒れた、倒れた!?

ちよちよ、一体何があつたんだよ!?

「かぐや嬢、だいじよ…」

「なーんちゃって」

柏木さん!?!もう帰ってると思つてたよ……

つてことは、中に居たのは柏木さんと翼くん？

あ、話が見えてきた

「ごめんなさい。ちよつと悪戯させて頂きました」ニコツ

「なんちやつての悪戯で副会長を気絶させないでくださいよ……」

「あ、崇宮さん。さつきはどうも」ペコリ

「こちらこそ、先程はご忠告どうも」ペコリ

ホント、やってくれたなこの女

ここでもいらんことしてたみたいだし

「やっぱり、忠告は役に立ったんですね？じゃあ良かったです」

ん？やっぱり？

やっぱりつてことはこの女、気づいててあんなことしたの!?

あの一瞬どっか見たのってそういうことだったの!?

もうホントなんなんだよこの女!?

「気づいていたなら教えてくれてもいいじゃありませんか。ちよつと意地悪じゃないですか？」

「でも、おかげでいい思い出来たんじゃないですか？」

「そういう問題じゃないですよ……」

確かにいい思いできたけど……

だからってあんなことをして良い理由にはなんないんだよなあ……

「それでは、私たちはこれで。翼く、帰ろく」

「おう、わかったく。それじゃ会長、皆さん。俺はこれで」

「お、おう。気を付けてな……」

「お気をつけて」

はあくく、もう疲れたよちくしよう

とりあえず、もう二度と早坂を不安にさせるようなことはしないようにしよう、絶対に……

従者二人は楽しみたい

待ちに待った日曜日♪

今日は♪早っ坂と♪初デート♪

た〜のしみだなあ〜

「一日落ち着いて……。とりあえず、予定を確認しよう」

まず、10時に家の前に集合

最優先事項は俺のスマホの新調

後は……

「何も、決まってない……!?!」

どうしよどうしよ!?!

こういうとき女の子ってリードしてくれる男の子の方がいいんだよね!?!

どうしよう、早く考えないと早坂が来ちゃう……

今日は父さんも母さんも居ないから頼れないし……

うわあ〜!?!

どうしよう、無計画な奴だっと思われる

「ピンポーン

うえ!?!もう来たの!?!

まだ15分も前だよ!?!

終わった……

ええい!!こうなったらなるようになってしまえええ!!

「よ、よし。何処もおかしな所はない……。よな……」

やべえ、超緊張してきた

大丈夫、お金は十二分に持つてる

もしものとき引き出せるようにカードも持った

財布も持った

よし!!大丈夫だ

「っし、行くか……」ガチャツ

「あ、おはよう。崇宮君」

「おはよう。早坂」

「ごめんね？こんなに早くに来ちゃって」

「いや、全然大丈夫だ。それじゃ、行くか」

俺、普通だよな？いつも通りだよな？

にしても、早坂の私服ってセンスあるよなあ……

こう、なんか絶妙にかわいいと綺麗の間というか

とにかく、めっちゃくちゃ似合ってたかわいいな／＼

「ちよ、ちよっと待って!!」

「ん？どうした？早坂」

「あの……、そのお……、崇宮君が良ければでいいんだけど、バイクに乗せて連れてって欲しくない？」

「べ、別に良いけどさ。バイクって風とか結構凄いぞ？それでもいいのか？」

「うん。それでもいいから、お願いできる？」

「お、おう。わかった」

そんな頼み方されたら断れるわけないじゃないですか

さ、そうと決まればヘルメット探しに行かないと

確か予備が部屋に置いてあった筈だから、一回取りに戻るか

その間に早坂にガレージ開けといってもらおうか

「それじゃ早坂」

「なに？崇宮君」

「ホイ、鍵」ポイツ

「わわーど、どういうこと？」

「俺、予備のヘルメット取りに行ってくるから、先にガレージ開けて中で待っていてくれ」

「わ、わかった。なるべく早く来てね？」

「つたりめーよ。すぐ行くからガレージで待ってな」

「うんっ!!」

さ、時間は有限なんだ

さっさと見つけて、さっさと戻ってデートスタートだ

《〜崇宮君ヘルメット捜索中&ガレージ移動中〜》

いやあ、意外と奥に収納してなくてよかったよかった

これでようやくデートに行けるな

「早坂お待たせ〜。ヘルメットあったぞ〜」

「あ、意外と早かったね。それじゃ、行こっか。運転よろしくね？」

「おう！もちろん任しとけ」

うっし、早坂が後ろにいるんだし、いつも以上に安全にそしてなるべく早く目的地に行かねえとな

「それじゃ、行こうか」

「お〜!!」

こうして、青空の下、俺と早坂の付き合ってから記念すべき初めてのデートは幕を開けた

《〜崇宮君&早坂さん移動中にて〜》

「あつちやく〜……」

「どうしたの？なにかトラブル？」

「ん？いやあ、ここの信号、捕まると長いんだよ。できれば捕まりたくなかったなあつて」

うわあ、折角の初デートなのに幸先悪くね？

こういうとき、何話そうか……

あゝ、スマホの話とかするか

「そういや、最近のスマホってどんなのがあるんだ？」

「う〜ん……。まず、崇宮君が前に持ってたスマホより断然性能は高いよ？それに、たくさん種類も出てるし……」

う〜ん、そりやそうかあ……

俺の旧スマホって3、4年前の機種だったからな

そっかあ……

「たくさん種類が出てるのか。迷いそうだな」

「それはそれでいいんじゃない？時間はあるんだし。あ、信号変わったよ」

「お、意外とすぐ変わったな。もうすぐだからしっかり捕まってるよ？」

「大丈夫!!絶対離さないから♪」ギョ〜

すごい頼もしいですね

でもあまり強く抱き締められると、その、む、胸が……／＼／＼
もうすぐつくからそれまで我慢だ我慢

煩惱退散、煩惱退散

《くくそんなこんなで携帯ショップに到着くく》

「いらつしやいませく、本日はいかがなさいましたか？あつ、彼女さんと一緒にスマホを買い替えるんですか？」

「彼がスマホを壊しちやつて。それで新しくしたいそうなんで私はその付き添いなんです」

あ、早坂が全部説明してくれちゃつた

俺話すこと何もないじゃん

「そうだったんですか。それで、彼氏さんはどういったものをご所望で？」

「うくん……。正直、連絡さえ出来れば何でもいいんですけど……」

「そんなんじゃないめですよ!!彼女さんと写真とるときとかどうするんですか!？」

ええく……

めんどくせえ……

何この店員、すつごいグイグイ来るじゃん

もう、この人の意見に従おうかな……

「じゃあ、画質も良いやつでなるべくお手頃価格のスマホありますか？」

「それでしたら、これとかいかがでしょうか？」

「これいいな。どう思う？早坂」

「それもいいと思うけどこういうのも、どう？」

「そちらもおすすめの商品となります」

うくむ……

くくまで多いと迷うな

早坂がおすすめのするのも、店員さんがおすすめのものももちろん良
さそうなんだよなあ……

「くくくくまで量があると迷うな……」

「店員さんがおすすすめするのでもいいと思うよ？」

「そうなんだよなあ……。全部良さそうだからどれにしようかと思っ
て」

うくん、どうしたものか……

迷うけど、適当に選ぶのは早坂と店員さんに失礼だし

どうしようかな

「それじゃ、これにするかな」

「それは少し古いものになりますけどよろしいんですか？」

「嫌ならすぐに買い替えに來ますから大丈夫です」

「それでは、こちらですね。承知いたしました」

《くくそのあと色々契約とかして買い替え終了くく》

「本当にその機種でよかったの？」

「いいんだよ。こういうのは勢いが大事だから」

「崇宮君が良いなら私はいいんだけどさ」

こういうのは迷ったら結局選べなくなるからな

それに、最新の奴を買っても持て余すだけだしな

「もう13時か、早いな」

「そうだね。そろそろお昼にしようか」

「そうだな。食べたいものとかあるか？」

「うくん……。近くの喫茶店とかかなあ……」

喫茶店、ねえ……

近くにあるかね？

「それじゃ、喫茶店探すか」

「え、良いの？」

「え？何で？別に良いじゃん」

なんで？

別に断る理由ねえし、俺決めてなかったし

「だって、折角の初デートに行くお昼が喫茶店って我ながらどうかと
思うから……」

「でも、早坂は行きたいんだろ？」

「う、うん。ちよつと懂れてたから」

「それじゃ良いじゃん。行こうよ」

「ありがとうね、崇宮君」

「なんのことやら」

「さ、良い店探しますか!!」

《〜崇宮君&早坂さん、喫茶店捜索中〜》

「ねえ、あのお店とかどう?まだそこまで混んでないしさ」

「お、いい感じの所だな。良いじゃん、あそこにするか」

「うん」

思ったより早く決まってよかった

「さ、なに食べよつかなく……」

「ん?」チラツ

「どうしたの?」

「いや、何でもないよ」

あれって、藤原とかぐや嬢だよな

服買いに行くのって延期になってたんだ

とりあえず、早坂に確認とって買い物来てるなら会わないように気を付けよう

茶化されたくないし

「いらつしやいませ。空いてるお席にどうぞ」

「わかりました。どこにする?」

「あの奥とかどう?外からも見えないし」

「そうだな。あそこにするか」

《〜崇宮君&早坂さん着席〜》

「ご注文が決まり次第お呼びください」

「わかりました」

どうするかなあ〜

お、このグラタン美味しそうだな

これにするか

「俺は決まったけど、早坂はどうだ?」

「う〜ん、迷ってるんだよね……。グラタンとナポリタンで」

「ナポリタンで良いんじゃないの?」

「それじゃ、ナポリタンにしよっかな」

「ん、決定だな。すいませーん」

「ご注文はお決まりですか？」

「ナポリタンとグラタン、一つずつお願いします」

「かしこまりました。少々お待ち下さい」

んじゃ、早坂に確認とちよつと午後の予定について話すか

「なあ、早坂」

「どうしたの？」

「今日、かぐや嬢出掛けてるか？」

「そうだけど、どうして？」

「さつき外で見かけたから」

「嘘!?かぐや様、この辺に来てるの？」

「でも大丈夫だろ。この辺で藤原が行きそうな服屋って言ったら
シヨツピングモールの中のことだろ。近付かなきゃ会わねえよ」

「そ、そうだよね!!大丈夫だよね」

たぶん、大丈夫だと思っただけ……

こんなこと言っただけなら嫌だなあ……

「それはそうと、御飯の後どうする？」

「うーん……。あつ!!ゲームセンター!!」

「ゲーセン？」

「そうそう。行ってみたかったんだ」

行ったことなかったんだ

そりやそうか、生まれたときから四宮の近侍として教育されてた筈
だし

楽しませてやれるかなあ……

俺、ゲームで手抜けないからなあ……

そこは、頑張るしかないか……

「それじゃ、食べ終わったら行くか」

「うん!!ありがとう、崇宮君」

「どういたしました。他にいきたい所はあるか？」

「特には、ゲームセンター行ってそれで終わりじゃないかな?時間的

にも」

「うわっ!!もう14時半じゃん」

もうちよつと楽しみたかったんだけどなあ……

時間が経つの早くない?

「フフツ」

「?どうしたんだ?」

「いや、何にもないよ?」

「なんだよ。気になるじゃねえか」

「嬉しいの」

嬉しい?何が?

「だって時間が進むのが早く感じるのって、それだけ楽しいってことだよな?」

「そうだけど?」

「だったら、崇宮君はすつごく楽しんでるってことでしょ?」

「そ、そうだな」

言われてみれば、そういう事だよな

俺は楽しめてるけど、早坂はどうなんだろ?楽しめてるのか?

「私、今日すごく不安だったの。崇宮君楽しんでるかなあ、とか、私がいて邪魔なんじゃないかなあ、とか」

「いや、邪魔なわけではないし。それに好きな人と買い物行って楽しくない訳ないじゃん?それよりも、早坂はどうなんだ?」

「私?私は崇宮君と居られるだけで楽しいよ?」

うお、なにこの子

めつちや嬉しいこと言ってくれるじゃん

それにしても……

「よくそんなセリフを照れずに言えるな。聞いているこっちが恥ずかしいよ……//」

「だって、だって!!こういうのは意地を張らずにちゃんとやわらないと。言葉にしないと伝わらないから//」

「確かにそうだな//」

「それに、かぐや様と会長みたいにこじれたくないし」

「それもそうだな。ホントどうにかなんないかな、あの二人」
「そうだね」

「はあく」

全く、早く付き合ってくれたら良いのに……

そしたら、学校とかでも朝と帰りの挨拶以外にももつと絡めるのに
「お待たせしました。ナポリタンとグラタンになります」

「あ、ありがとうございます。ナポリタンは彼女に、グラタンは俺にお
願います」

「わかりました。それでは、ごゆっくりと」

ふう、とりあえず御飯を楽しもう!!

《〜崇宮君&早坂さん食事中〜》

「ふう、ごちそうさまでした」

いやあく美味かった美味かった!!

「すいませーん。お勘定で」

「あ、お会計は別々で……」

「いいよ、ここは俺が出すからさ」

「え、でも……」

「それでは、ナポリタンとグラタンで計1780円になります」

「じゃあ、これで」

「1780円ちょうどお預かりしました。ありがとうございます」

「ごちそうさまでした。美味しかったです。また来ますね」

「ごちそうさまでした!!とっても美味しかったです!!」

「またのご来店をお待ちしております」

どうやったたら、あの味が出せるんだろうか……

今度個人的に行って聞いたら教えてくれるだろうか?

無理だろうか

ま、ダメもとで聞いてみるか

「ねえねえ」 チヨンチヨン

「うん?どうした?」

「良かったの?お会計」

「良いんだよ。あんまり金使わねえし、こういうときに使ってちよっ

とかっこつきたいからさ?」

「崇宮君が良いなら、良いんだけどさ……」

全然気にしないで良いんだけどな……

俺が好きでやってることだし

それよりもゲーセン♪

久しぶりだから楽しみだな

「ホントにゲーセン連れてってくれるんだよね?」

「当たり前だろ。ほら、さっさと行くぞ」

「うん、エスコートよろしくね?」

「はいよ。俺でよければ引き受けさせてもらいますよ」

「もう、崇宮君だから良いの」

うれしいこと言ってくれるじゃん?

さて、なんとか楽しんで終われるように努力しますか!!

《〜崇宮君&早坂さん、移動中〜》

「着いたぞ、ここがゲームセンターだ」

「わあ!!ここがそうなんだね!!早く行こう!!」ウイーン

「ちよちよ、待って!!」

凄いテンション上がってるな

早坂、楽しそうで良かった……

さて、何のゲームを早坂はしたがるかな?

「早坂、何かやりたいゲームとかあるか?」

「私、あれやりたい!!あのカートゲーム!!」

「それじゃ、先ずはあれやるか」

「うん!!」

《〜ここから少しダイジエストで〜》

「これで私の一位だー!!」

「残念そうはいきません」

「にゃー!?緑甲羅当てるの上手すぎだよ」

フッフッフ、これで俺の一位だな

いやあ、悪いな早坂

俺はゲームで手は抜かないんでね

「でも、私は赤甲羅を持つてるよ?」

「え、ちよ、ああああ!!」

「やったああああ!!私が一役だー!!」
くっそお……

最後で油断した……

うううううくやしい!!

「次はあのシューティングゲーム?つてのをやりたい」

「え、でもあれって……」

「いいから行こ行こ!!」

ま、早坂が良いならいいけど

《~~~~シューティングゲームにて~~~~》

「いやああああ!!」

「やつぱり……」

「ゾンビ怖いいいい!!」ダキッ

「うえ!?早坂、前見えな……。あ」

GAME OVER

「ううううううう……」

「あちやく……」

「なんでホラーゲームだつて言ってくれなかったの!?!」

「だつて、言おうとしてもなにも聞かず引つ張つて行つたから」

「だつて、楽しすぎて全然見ないで入ったんだもん……」

「さ、さいですか……」

いや、でも、まあ、楽しんでるなら良いんだけどさ?

早坂、早くいつもの調子に戻らないかな?

「早坂、大丈夫か?」

「だ、だいじよばない……」

「ほ、ほら!!クレイニングゲームコーナーだからさ?なにか欲しい物とかあるか?」

「あ、あれ、あれがいい……」

ん、あのバカでかい猫の抱き枕か?

欲しい物あるか聞いたけど、あれは捕れるかな?

ちよつと不安になつてきた……

《くく崇宮君、クレインゲーム挑戦中くく》

はあく、もう3000円超えたよ

そろそろ取れてくれないかな……

あ、取れた

「早坂、取れたぞ？」

「ホントに？」

「もちろん本当だとも」

「ホントだ、ありがとう崇宮君」

「悪いな？ホラーゲームだつて言えなくてさ」

「全然いいよ。だつて、崇宮君が言うより先に舞い上がつてゲーム始めたの私だし……。私だつてごめんね。もつとちやんと見てから入れば良かったからさ」

「そうか？」

「それに、もう切り替えれたからさ？気にしないで？」

「そうなら良いけどさ……」

早坂がいつもの調子に戻つて良かった

あの調子の時は可愛いけど心配になるからな

「それよりさ、そろそろ暗くなつてきたね」

「うえ、もうそんな時間かよ。そろそろ帰るか？」

「あのさ、最後にさ、プリクラ撮りたいんだけど良いかな？」

「わかった。それじゃ、プリクラがラストだな」

「うん、ちよつと撮つてみたかったんだ」

早坂……

やっぱ女子高生らしいことに憧れてたんだな

さ、プリクラも楽しんで行こう!!

「崇宮君!!凄いね!!私達綺麗に写つてるよ!!」

「そうだな。綺麗に写つてるな」

「プリクラって凄いなだね!!」

「そうだろ？プリクラって凄い盛れるんだよ」

それにしても、最近のプリクラの進化つて凄いな

こんなに盛れるって知らなかったわ
盛れるのは知ってたけどさ

ここまでは想像してなかったわ

「崇宮君、最後だって。二人で近づいてだってさ」

「はいよ」

近づいて、ね

『3、2、1』

「早坂」

「な、なに…」 チュッ

『パシヤッ』

やっぱり恥ずいな、これ

「は、え、なに、え、どういうこと？／／／」

「いや、今まで早坂からしかされてなかったからさ？／／／」

うがああああ!! 恥ずかしい!!

「そ、そうなんだ／／／」

「おう／／／悪いな。いきなりあんなことして／／／」

「全然大丈夫だからさ。早く加工して帰る？／／／」

「お、おう／／／」

《／／／そうして、プリクラ製造後帰り道にて／／／》

何か、凄い空気になっちゃったよ

ホント何やってんだろ……

舞い上がって変な事しちゃったなあ……

「ねえ、崇宮君」

「ど、どうした？」

「さっきの事なんだけどさ？」

さっきの事ってプリクラの事だよな……

できれば触れられたくないんだけど……

「お、おう。で、どうしたんだ？」

「ああいう事はあんまりたくさんしないようにしようね、っと思って
「や」

「そうだな。悪いな、急にあんなことしちゃって」

そうだよな

ちよつと好きな人が彼女になつてくれたから舞い上がりすぎたな

……

ちよつと反省しないとな……

「嬉しいんだけどさ？あんまりたくさんし過ぎると特別感薄れるからさ？だから、ね？」

「そ、そうだな。わかった」

「で、でもさ!!嬉しかったのは事実だから!!」

「そつか……」

「当たり前だよ!!だって、好きな人がキスしてくれたんだよ？嬉しすぎて気絶しちやいそうだよ!!」

嬉しすぎて気絶しちやいそう、か

早坂が喜んでるなら良いのかな？

それにしても思い出せば思い出すほど恥ずかしいな

／／／

「あ、照れてる」

「うっせえ、もう着いたぞ。じゃあな」

「あ、待って!!崇宮君」

「なんだよ」

「今日、楽しかったよ!!また明日ね!!」

「お、おう。俺も楽しかったよ。じゃ、また明日な」

従者二人は喜ばせたい

《〜9月8日、夜〜》

ふい〜、いい湯だった〜

やっぱり家の風呂つていいねえ〜

なんかこう、温泉とかとは違ったリラックス感があつて

「誠君、お風呂入つてるときにスマホに着信入つてましたよ？」

「え、マジで？」

「ええ。マジです」

もしかして早坂からか？

だったら、早く要件をきかねえと

「あつ!! そういえば誠君、早坂さんと進展あつたの？」

「うえ!! あ、まあ、うん……。その、付き合うことになりました……」

「やっぱり……。それはよかつたじゃありませんか」

やっぱり、つて事は薄々気付いてたわけか……

すげえなあ……。親つて

「なんでわかつたんだ？」

「そりや、実の息子の事ですよ? なんとなくです。なんとなく」

「ほ、ほう……?」

「ホントの事を言うとお親つてね、子供の変化に敏感なんです。それに、

誠君最近笑顔が増えましたから。ひと山越えたのかな、つて」

ホントに凄いな母さん

俺も、こんな親になりたいな

でも、そつか

俺自身気付いてなかったけど、俺つて最近笑顔が増えたんだな

まあ、幸せだから当たり前だな

「そつか。んじや、俺はスマホ確認して折り返すから部屋に行くな」

「はい、そうしてあげてください。後、冷蔵庫にロールケーキが入つて

ますから食べてくださいね? 自信作なんです」

「わかつた。連絡が終わつたら食べに行くよ」

しれつとまたなんか作つてるなあ……

羨ましいよ、全く

さ、早くなんの連絡か見に行かないと

《《崇宮君、移動中》》

「にゃくん」

「ん？クロか。なんだ？部屋に一緒に行きたいのか？」

「にゃくん」スリスリ

「そうか。んじゃ、行くか」

「にゃっ!!」

《《崇宮君、再び移動中》》

さて、連絡連絡つと

「そーいや、明日って御行の誕生日だったな。とすると、その事だったりするのかな？」プルルルツ

『もしもし?』

「あ、早坂か?さつきは悪いな。ちよつと風呂入ってたんだ」

『ううん、大丈夫。それより、ごめんね?お風呂中に邪魔しちゃって』

風呂もちゃんと入ったから

別に気にしなくても良いのに

と、そんなことより、なんの用事か聞かねえと

「全然大丈夫だ。もう風呂もあがったしな。それで、どうしたんだ？」

『実はかぐや様と明日の事なんだけど……』

やっぱりか

「御行の誕生日の事だよな?プレゼントとかは?」

『そっちはもう大丈夫なの。かぐや様がオーダーメイドで扇子と、

ケーキを発注してたからさ』

「だったら、後は二人にさせる方法とかか?」

『それもなんだけどさ……』

なんだ、本題はそっちかと思ってたのに

違うのか、だとしたらなんだ?

『崇宮君が会長だったらさ、どうやって祝われたら嬉しいのかなあ、つて』

「え、俺か?」

『うん。やっぱりさ？好きな人と二人きりがいいなあ、とかさ。二人きりは別になあ、とかあるでしょ？』

俺が御行だったら、ね……

『そうだな。俺が祝われる側だったとしたら、か。』

『うん、どう思う？』

『俺だったら、別にどっちでも嬉しいけどなあ……』

『そうなんだ……』

『あ、だからって二人だから嬉しくない訳じゃねえよ？』

『どういうこと？』

『正直、二人きりで祝われるのも嬉しいぜ？そりゃ、俺からしてみれば早坂が俺のためだけに祝ってくれるわけだからな』

『もうっ!!恥ずかしいよ……// //』

『アツハハ!!悪い悪い』

絶対照れてるよお♪

っと、このままだと話が逸れるな

軌道修正、軌道修正つと

『それで、話を戻すが』

『うん』

『嬉しい、嬉しくないは別として。意識させるなら二人きりの方が効果的だとは思うぜ？』

『やっぱりそうだよね……』

うん？なんだその反応、何か問題でもあるんか？

『どうしたんだ？』

『ねえ、崇宮君。かぐや様が二人きりで会長に何か出来ると思う？』

あ……

そういうことね……

ん、かぐや嬢が、ね……

うん、無理だな

『無理だな。ほぼ確実に』

『でしょ？だから、どうしようかなあ、って』

『なるほど、それでかけてきてたのか』

『うん。なにかいい案ないかと思つて』

いい案、ね……………

うーむ……………

ダメだ、全つ然おもいつかん……………

こうなつたらかぐや嬢に自分の力でなんとかしてもらうしかないんじゃないかな

「なあ、早坂？」

『どうしたの？』

「こうなつたら、一か八かかぐや嬢に賭けねえか？」

『えー、と……………。どゆこと？』

「いい加減、かぐや嬢に自分で攻めてもらわないと」

『でも、』

「それに、ここまでお膳立てしたんだからさ？ちよつとはやつてくれないと」

『……………やつぱり』

早坂、納得してくれるかね？

というか、今なんて言つたんだ？

「はやs『やつぱりそうだよね』」

……………へ？

『やつぱり崇宮君もそう思うよね』

「おう…………。早坂、大丈夫か？」

『かぐや様はいつつもそう。私がどれだけ頑張つてもいつつも結局上手いかなくて。その度、私が申し訳なくなつて。もうなんなの、あの主君』

「そ、そうだな…………。いつもお疲れ様、早坂」

『そうやって慰めてくれるの、崇宮君だけだよ。ありがとうね』

早坂……………

やつぱり結構こたえてたんだな……………

そりやそうか

かぐや嬢、いつつも早坂を頼つて、その度に失敗してるんだもんな学校の連中も早坂が近侍やつてるなんて知らねえもんな

早坂、このままだと体壊しそうだな

ちやんと彼氏として愚痴とか聞いたりして適度に発散させてやらねえとな

「早坂、愚痴とかあるならいつでも聞くからな」

『え?』

「後、行きたい所とかあるならどんどん言ってくれよ。絶対連れていくから」

『どうして?』

「だって、付き合ってるし。それに、早坂がこのまま溜め込み続けたら、いつか絶対に壊れちまう。だからさ?もつと俺に頼ってこいよ。絶対に支え続けるからさ?」

『崇宮君……』

どうだろうか?

早坂は俺をもつと頼ってくれるだろうか

俺としては、早坂をもつと支えていきたいんだがな

「どうだ?迷惑だったか?」

『うん。全然。寧ろ嬉しいよ』

「そうか」

『うん。崇宮君がそんなに私の事を考えてくれてるなんて、思ってたなかったから』

「失礼な。俺は何時だって大切な人が元気であることを考えてるよ」

『崇宮君はやっぱり優しいね』

そうかね?

あんまし考えた事なかったが、皆言うしな

俺としてはこれが普通なんだがな

「それで、かぐや嬢に頑張ってもらうでいいのか?」

『うん。かぐや様には悪いけど、私もちよつと休憩したいしね』

「そうか。ならもう大丈夫だな」

『あ、ちよつと待って』

うん?まだ何かあるのか?

愚痴とかかね?

なら、満足するまで聞かないとな

「どうした?」

『あ、あのさ』

「おう」

『夏休みに流れた小旅行、行かない?』

・

・

・

……へ?

「えくと、いま、なんて?」

『だから、二人で温泉行かない?って』

あゝ、と

これって夢じゃない、よね

「にゃくん!!」ガバツ

「うおわあっ!?!」ドサツ

『崇宮君?!崇宮君どうしたの!?!』

痛たた……

クロの奴、いきなり突っ込んでくるきやがって

なんなんだ?

でも、痛いってことは

「夢じゃないって事か」

『崇宮君!!大丈夫!?!』

「ん?ああ、大丈夫だ。クロがいきなり突っ込んできたからビックリ
しただけだよ」

『良かった。で、どうかな?温泉旅行』

「近々、絶対行こうな」

『今度は手を出す出さないの心配はいらないね?もう付き合ってる
し』

「フアツ!?!／／／」

え、えくと

それって、つまり……

そういうことですか？

『えへへへ、さっきのお返し。いま崇宮君、顔真つ赤でしょ』

「そ、そんな訳ねえだろ!?／＼／＼」

『照れてる。かあわいい』

くううううう

くつそー、悔しいけどホントの事だから言い返せねえ……

「うっせ。で、用はそれだけか？それじゃ、切るぞ」

『あ、ちよつと待って!!切らないで!!』

「なんだよ」

『崇宮君の声をもうちよつと聞きたいの、ダメ?』

うぐっ!!

なんだ、くそ、かわいいかよ

ヤバい、このままいくと俺もかぐや嬢や御行みたいにあホになる

……

『やっぱりダメだよね。ごめんね、変な事聞いて』

「いや、待て。誰もダメだなんて言っていないだろ?」

『じゃあ、いいの?』

「いいよ、いくらでも聞かせてやるよ。だから、早坂の声も聞かせてくれな?」

『う、うん。えへへ、嬉しいな。好き、崇宮君／＼／』

「俺も好きだよ。早坂／＼／」

あー、こっ恥ずかしい

顔あつつ、絶対顔真つ赤だわ今の俺

さて、どんな話をするかねえ……

『ねえ、崇宮君ってさ。どうして私の事を好きになったの?』

「え、言わなきゃダメか?それ」

『えへ、良いじゃん。言っても減るもんじゃないし』

「それなら早坂、お前も言えよ?」

『いいよー。だから話して?崇宮君』

はあ、いきなりまたこっ恥ずかしいなあ〜もう!!

でも、早坂が俺を好きになった理由を聞けるならまあ、いいかな

「第一は一目惚れだな」

『えっ!?!』

「なんだ?不思議か?」

『いや、大丈夫。続けて?』

ん???

まあ、どうでもいいか続けよ

「それから、何回か見かけけるうちにもっと早坂の事が知りたくなって。その時、丁度良くかぐや嬢から専属の料理人にならないかって言われたから受けたんだよ」

『好きになったのがその時だったとして、なんで私がかぐや様の近侍だってわかったの?』

「母さんに聞いたんだよ。そしたら、早坂のママさんが教えてくれたんだよ」

『え?!ママが!?!』

「おん。後から知ったことだけだな」

ホント、あの時は驚いたよな

いきなり、隣に現れて、彼女は早坂愛っていつてかぐやお嬢様の近侍なんですよ。仲良くしてあげてね、って言われたからなあ

まさか、早坂のママさんが直接言ってるなんて思いもしなかったからな……

「それからは、まあ、早坂も知っての通り。少しずつ仲良くなるために努力して、早坂の新しい一面を知る度にどんどん好きになって、今に至る。とまあ、ざっとこんな感じだな」

『そ、そうなんだ。それじゃ、次は私が好きになった理由だね』
「そうだな」

早坂が俺を好きになった理由……..
気になるな

なるほど、早坂もこんな気持ちでさつき俺に聞いてきたわけか
納得、納得

『私が好きになった理由はね?なんて言えばいいかわかんないけど、気が付いたら好きになってたの』

「お、おう……」

『まずママから、今度面白い子が来るって言われたのが崇宮君を知るときっかけだったね。最初は不思議な子がいるなあ程度にしか思っ
てなかったよ。もし、かぐや様に悪意を持ってようなら排除しよう
とすら考えてたよ?』

え、そこまで考えたんすか

悪意を持ってなくて良かったあ……

『でも、ちよつとずつ話していくうちにこの人は本気でかぐや様の、美
味しい、只その一言のために色々私に聞いてきてるんだってわかつた
の。いま思えばその時ちよつと機嫌悪かったんだけどね』

「あの時、機嫌悪かったの? いやあ、確かに薄々、あれ? 俺もしかして
嫌われてる? とか思ってたんだけど」

『私って、かぐや様に似て嫉妬深いからさ?』

左様で

あの時(第2話)、スツゴい思ったからなあ

あんまり嫉妬させないように注意しよ

「それで?」

『それから、少しずつ崇宮誠っていう人に触れて。ちよつといい人だ
なあ、とか思ってた時に映画館の尾行があつてね? それで、本格的に
崇宮君が気になりだしたの』

「なるほどね」

あの時、正直隣の席じゃなかったらここまで仲良くなれてないと
思ってたが

向こうも俺の事が気になってたとは、案外隣の席になれなくてもな
んとかなったかもしれねえな

『それから、近侍としての私は崇宮君に自分を偽り続けようとした。
でも、早坂愛としての私は、崇宮君にもつと素の自分を見てもらいた
いと思った。多分それが崇宮君の前だけ、時折素が出てた理由だと思
う』

「なるほど」

『この時、私は自分の気持ちが変わらなかつたんだ。でも、崇宮君は私

のどんな面を見ても決して否定したり、距離を置こうとはしなかった。きつとそこが私が崇宮君を好きになった理由かな』

「そっか……………」

『うん、どう?』

うーむ、どうって言われたら……………」

「なんだかんだ、俺たちも運命の赤い糸に結ばれてたのかなあ、と」

『言われてみればそうだよね。あっ!!そういうえば、もうひとつあるんだ、崇宮君に惚れた理由』

「ん?なんだ?」

『それはね?夏祭りの時に言ってくれた、他の誰でも、四宮かぐやでもない、早坂愛が居ると思ったから此処に来たんだ、っていうの。あれスツゴク痺れたし、かつこよすぎて心臓バツクバクだったよ!!』

あ、あはは……………」

できれば、その事はあるまい言わないで欲しいかなあ

自分でもスツゴい恥ずかしいからさ?

わかってくれるよね?ね?

『ふわあくあ。眠たくなってきたね?そろそろ寝よっか』

「そうだな。おやすみ、早坂」

『おやすみ、大好きだよ。誠』

「!!? / / / / /」ボンツ

『フフツ、じゃあね』プチツ

ツ……………!!

あんなの反則だろっ!!

かわいすぎかよ……………」

あゝ、こりゃ絶対寝不足になるなあ……………」

従者二人は贈らせたい

ついに来たなく御行の誕生日

ふわあゝあ、眠い…………

昨日、遅くまで電話しすぎたな

早坂、大丈夫かな？

それに、早坂と会って普通でいられるだろうか？

あんなことがあつたのに

自信ねえなあ…………

お、んなこと考えてたら、着いたな四宮別邸

《〜崇宮君、四宮別邸IN〜》

「にしても、かぐや嬢一体何のようだ？朝急に電話かけてきて。来い、だなんてよ」ツンツン

んあ？誰だ？人の肩なんてつついてくるのは

「おはよう、崇宮君」

「早坂か、おはよう。昨日はよく眠れたか？」

「ううん。あんまり寝れてない…………。ふわあゝあ」

「大丈夫か？」

「大丈夫だよ。寝たのは寝たから」

「そか」

寝れたんならいい？のかね

あ、そうだ

早坂ならなんで朝からよばれたか知ってるかな？

「なあ、なんで朝からよばれたかわかるか？」

「多分会長のプレゼントの事じゃないかな？」

「あゝ、そういうことか」

なるほどね

御行のプレゼントを見て良いかどうか判断しろってことかね？

「崇宮君、早く玄関に行こう？」

「え？かぐや嬢の部屋に行くんじゃないの？」

「それが…………。かぐや様が先に玄関で待っててって」

「ほーん。それじゃ、玄関行くか。ああ、それと……」

「ん？どうしたの？」

「温泉、いつ行くか決めねえとな。愛」

「……………え!?!/ /」

へっへへっ

昨日の仕返しだこんにやろっ

照れちやつてまあ、かわいいっ

やっぱ幸せだなあっ

こんなかわいい彼女持てるなんて、あの時は思っても見なかったな

……………

「ちよ、崇宮君!?!なに今の!?!もっかい!ねえ!もっかい! / /」

「なんのことかなあ?俺にはわからんなあ?」

「もうっ!!崇宮君の意地悪うっ」

「昨日の不意打ちの仕返しだよ。あれのせいで眠れなかったんだから」

「うううううっ」

納得してないけど、理解はしたって顔だな

旅行の日にち……………ね……………

絶対行こうとか言っちゃったけど行く日あんのかね?

なんだかんだ延びて冬休みとかになりそうだなあ

「早坂、悪かったよ。許してくれて、な?」

「今回は私も悪かったから、許す」

「ありがとうございます」

「はあ、全く朝からなんてものを見せつけてくれるんですか。貴方達は」

「あ、かぐや嬢。おはようさん」

「かぐや様、おはようございます」

「すごい切り替えの速さね……………。まあいいです。それじゃ、行きましようか」

「はいよっ」

「はい」

なんだろうな

なんかそこはかたなく嫌な予感がするなあ

今日は帰らずにかぐや嬢見守るかあ、生徒会の扉の前で

《~~~~車内にて~~~~》

「かぐや嬢、プレゼントどうしたんだ?」

「あら、早坂から聞いていないの?」

「一応聞きはしたけど、気になるじゃん?」

「そういう貴方はどうしたんですか?」

へっへっん

俺のは絶対被らないもんね

「俺のはこれですね」

「なに?これ?」

「御行が食べたがってた、○尋の親父が食べてた訳わかんない奴っぽいものです」

「崇宮君、よく作れましたね……」

「調べたら元ネタらしきものが出てたんでそれっぽく作ってみました」

まさか元ネタがあるとは……

正直ダメもとで検索してみたけど、ホントにあるとはなく

でも、実際食べたことはないからこれかどうかわからないんだよなあ……

いやでも、食べたことある奴なんて居ないから美味しかったら正解なんじゃ?」

わからんけど、とりあえず俺のプレゼントはこれだ!!

「ところで、かぐや嬢はどうしたんで?」

「それは学校に着いてから見せます。さ、行きますよ。二人とも」

「はい」

なんだろう、絶対おかしな事になってる気がする

いや、気がするとかほぼ確実にしてる

はあー、やだなあ

おかしな事になってるってわかって学校行くの……

《〜四宮主従トリオ移動中〜》

学校到着〜

そして生徒会室についたんだけど……………

「どうでしょう。特別に発注してもらったケーキです」デーモン

「それでしようね」

「会長、ケーキ食べたがってる感じでしたからとっても喜ぶに違いな
いわ♪」デデーモン

「『そうだといいですね』」

「苺も買付けたから行って……。つて、何よ!!さつきから二人して適
当な返事ばかりして!!」

いやあ、だって、ねえ?

デカ過ぎじゃないっすかね……………?

「いや、だってこれも……………ムグウツ!」

「??どうしたの?」

「なんでもありません。ちょっと彼氏に抱き付きたくなっただけで
す。気にしないでください」

「そう?ならいいのだけれど……………」

い、息があ……………

死ぬ、死ぬう!!

「ムー!!ムー!!」

「崇宮君、もうあれの事は指摘しないでください」小声

「プハアツ!!なんでだよ!」小声

「もう私、疲れたんですよ。朝からあんな重い、超引く、超恥ずかしい
ケーキを見せられて。もう面倒くさいんですよ。わかってください」
トオイメ

「お、おう……………。悪かったよ。もう指摘しないから」

「ありがとうございます」

早坂……………

ホント、この人の近侍がよく勤まるよ

すごい辛そうだけど……………

そうは言っても、これってサイズのにもうウエディングケーキのレ

ベルだよな？

「それで、どう思う？二人とも？」

「私は、かぐや様が良いなら特に口出ししませんけど……」

「俺も早坂と同意見だ。かぐや嬢が満足なら良いんじゃないか？」

「早坂？どうしたの？歯切れが悪いわね」

「昔はこんなにアホじゃなかったのに……」ボソッ

「何て言ったの？」

「気にしないでください。只の独り言です」

「そう？会長、喜んでくれるかな」

「ますますアホ化が進んでる気がする……」

「はあ、付き合ったらこれは止まるんだろうか？」

「このままだといつか取り返しのつかない事になりそうで怖いんだけど」

「それじゃ、私と崇宮君は先に教室に行つてますので」

「おう、そういうことだ。それじゃ、また後で」

「私はこれを直してから行きます。それではまた」

「また、面倒な事になつたなく、おい」

「何度思い出してもなんだよあのでかさ」

「信じらんねえ」

「俺の主マジで大丈夫かな？」

「ねえ、崇宮君」

「どうした？」

「今日、生徒会あるよね？」

「うん、あるけど？」

「急にどうしたんだ？」

「いきなり、生徒会の有無なんか聞いてくるなんて」

「なにか用事でもあるのか？」

「じゃあさ、生徒会終わったら私とかぐや様がどうなるか一緒に見てくれない？」

「別に良いけど」

「ありがとね。私一人じゃ倒れちやいそうで」

なるほどね

そりや、かぐや嬢があんな状況じゃ倒れるかもしれないとは考える
わな

「あ、そういえば。旅行、結局どうする？」

「どうしよつか？」

「俺としては、前期生徒会が終わった後ぐらいにしようかとおもって
るんだが……。どうだ？」

「うん。それぐらいが一番落ち着いてるかもね。それじゃ、日程はそ
れぐらいにしよつか」

「んじゃ、どこに行く？」

場所はできれば夏休みの予定通りの場所がいいんだけどな

あそこ、スゴい良かったし

早坂と一緒になら、別に他の場所でもいいんだけどな

ま、なんにせよ早坂の行きたい所を聞いてから考えよう

「それなんだけどき、夏休み行こうとした所でもいい？」

「別にいいけど、別の所でもいいんだぜ？」

「あそこがいい、ダメ？」

「あいよ。それじゃ、詳しい日程が決まったら予約しとくわ」

「うん!!よろしくね!!」 パアツ

護りたい、この笑顔

つと、もう教室か

「早坂、もう教室だぜ？」

「わかってるし」

いつも思うけどスゴい切り替えの早さだな

尊敬するよ、ホント

「そうですか。なら別にいいんですけどね」

「でしよ☆それじゃ、そろそろ皆も来るだろうし、あたしは自分の席
に行ってるね☆」

「それじゃ、また放課後に」

「バイバイ☆」

それにしても、かぐや嬢、ホントにあのプレゼント渡せるのか？

絶対まともに渡せないと思うんだけど……
それは見て確かめるか

《〜昼食時間〜》

御行に渡しに行かないと

あ!!早坂に弁当渡してねえ!!

うつわ!!マズツた……

恥ずいけど、渡すか……

先に御行から行くか

「あ、崇宮君。どうしたの？」

「こんにちは。すみませんが会長、居ますか？」

「居ますよ。会長!!崇宮君が呼んでますよ!!」

居て良かった

居なかったらどこに居るのかわからんから放課後に渡すとかになりそうだったからな

「誠か、どうした？」

「お誕生日おめでとうございます、会長。これ、会長が食べたがった、○尋のお父さんが食べてたドロドロしていた物っぽいのです」

「本当に作ったのか!?スゴいな……」

「元ネタらしき物があったから出来ただけですよ。感想は生徒会で聞かせてくださいね?」

「おう、ありがとうな。誠」

「いえいえ、親友として当然のことですよ」

さ、早坂だな……

早坂はどこだ?

お、いたいた

さ、気合い入れて渡すか……

「お弁当忘れるとか愛もうつかりしてるね」

「だから、そんなんじゃないって☆あたし今ダイエつとしてるから、そんな感じ?」

「え、どんな感じよ?」

「過度な食事制限は体に毒ですよ。はい、愛さん。お弁当」

「え!?あ、ありがと／＼／」

「ちゃんと栄養や、カロリーにも気を遣って作ってるので気にせず食べてくださいね?」

「う、うん。助かるし／＼／ありがと、誠」

「ちやうど何人かと食べてるみたいだし」

「これも渡しとくかね?」

「愛いいなく。こんな最高の彼氏さん持って〜」

「そうだよー、羨ましいよー」

「うん☆スツゴい助かってるんだ〜♪」

「あ、それとこれは皆さんで食べてくださいね」

「なにになにー?崇宮君、これなにー?」

「簡単な野菜バーですよ。お弁当作るついでに作ったので、よかったですら食べてくださいね」

「うんうん、皆で食べるよー!!ありがと、崇宮君」

「ありがとね〜」

「ありがと、誠」

「いえいえ。それでは、お昼休みを楽しんで」

「二は〜い!!」

さて、午後の授業も頑張りますかね?

《そのまま、何事もなく放課後へ》

ふ〜、やつと終わった〜

さ〜てさてさて、それじゃ生徒会に行きますかねえ〜

「崇宮君!!」

「何ですか?」

「野菜バー美味しかったよ!!ありがとね!!」

「美味しかったんですからよかったです」

「いやー、本当に美味しかったですよー。愛が羨ましいよホント」

「そうですか?」

「そうだよ!!こんなに料理上手で優しくってカッコイイ彼氏さんがいるなんて」

「そ、そうですか」

あはは……

なんか、面と向かって言われるとすごい恥ずかしい
あんまり言われたことなかったからなく

言われると嬉しいもんだな、カツコイイとか優しいって

「もしかして、照れてる?」

「いえ、面と向かって言われる事がなかったので戸惑っているだけで
すよ。それじゃ、私はこれで」

「あ、ちよつと待って!!」

「どうかしましたか?」

まだなにかあるのか?

できれば早く生徒会終わらせて早坂と二人きりになりたいんだけ
ど……

「愛の事、これからもよろしくね」

「はい?」

「あの子、私たちに気づかれないうようにしてるみたいだけど、意外と溜
め込む癖があるみたいだからさ。私、そういうのわかっちゃうんだよ
ね。だからさ、よろしくね?」

なんだ……

そんな事か、そんなもん

「任せました。愛さんが抱え込み過ぎて潰れないように支えたり、
重しを降ろしてあげるのも彼氏の務めだと私は考えていますから。
任せてください。鷹村さん」

「そう言ってくれるなら、愛を任せられるよー。それじゃ、また明日
ねー」

「それでは、また明日」

鷹村実咲さん、か……

彼女、人の内面を見抜く才があると見てほぼ間違いないな

早坂の事に気づいているのがなによりの証拠だしな

早坂に一応伝えとくか

お前の友達はお前の事をしっかり見てるぜ、ってな
さ、生徒会に急がないと

《そのまま何事もなく無事に生徒会が終了し》

ふいー、今日も無事に終わったな

疲れた

さ、こつから御行とかぐや嬢を二人きりにして様子を見ないと

「それじゃ、俺ら先に上がるわ。お先」

「それじゃ、また明日」

「お先に失礼しますね。会長、四宮先輩も」

「おう、お疲れ」

「お疲れ様でした。それでは、また明日」

さて、教室に忘れ物したとでも言って別れるか

「そういえば、崇宮先輩」

「ん？どしたの、優」

「彼女が出来たんですよね？」

「そうですよ!!スゴいですよね!!」

え!?なんで知ってるの？

あれ?俺、優に言っていないよね?

もしかして、早坂があんな事言ったのってそんなに話題になっ
てんの?

「そんなに有名なの？」

「ええ、そりやもちろん。だって、真面目代表みたいな評価されてる崇宮先輩がザ・ギャルみたいな早坂先輩と付き合ってる、しかも早坂先輩が二学期開始早々宣言したって盛り上がってましたよ」

「マジかー……………」

思わぬ所で話が盛り上がったよ

あの行動、やっぱりそういうことになるよな

他に変な噂がないか確かめとこ

「他に何か言われてることってあるか？」

「あゝ。スゴイイチャイチャしそうなカップルなのに全然イチャイチャしてないらしいって話位ですかね?本当なんすか?」

あゝ、それかあ……………

いやあゝ、だって、ねえ?

かぐや嬢と御行に申し訳ないからさ？

二人がみんな花火を見るために頑張ってる時に告白して付き合ったからさ？

なんか申し訳なくて……、なんて言えないしなあ

どう言い訳しようか

「本当ですよ。だって、早坂さんと崇宮さん学校でもそこまで絡んでませんし本当に付き合ってるのか怪しいですよ」

「そうなんですか」

「付き合ってるっての。別に学校でいちやつかなくても良いだろ？ TP Oを考える、そういう関係なんだよ。俺とあいつの関係って。」

こういう感じでもいいかね？

うんうん、TP Oをわきまえるって大事だからな

……………今度、彼女との在り方について翼くんに聞きに行こうかな

……………

「ふくん。そういう関係なんですか」

「早坂先輩がそういう感じなのは予想外でした。もつと積極的に絡みに行くと思ってました」

「そういうこった。それじゃ、俺は忘れ物したから教室取りに行ってくるわ。じゃ」

「また明日、崇宮先輩」

「崇宮さんバイバーイ!!」

さて、二人はどうなってるかな？

《～～崇宮くん移動中～～》

「やつとききましたか、崇宮君」

「ちよつと話してただけだよ。気にすんなって。で、どんな感じよ?」

「まだ特になにも起こってないよ」

「そか」

まだ二人とも作業してる感じか

早坂も凝視してるし俺も見よつと

「そういえば、崇宮君」

「どうした?」

「実咲と何を話してたんですか？」

「あゝ、その事か」

「もしかして、二股ですか？」

「そんなわけないでしょうが。言ったら？俺は早坂一筋だつて」
全く、ちよつとは信用しろつての

付き合いたてだから不安なのはわかるけどさ

俺つてそんなに信用ないかな？

「だつたらなんの話してたの？」

「昼間の野菜バーのお礼と、早坂についてだな」

「うん？」

「早坂はなんでも抱え込む所があるから頼む、つてな」

「うそ、気付かれてたの？」

「さあな。でも、お前の友達はお前の事をお前が思っている以上に気にかけてるつてことだよ」

「そ、そうなんだ」

嬉しそうにしちやつてまあ……………

でも実際嬉しいもんだよな

俺も絶対喜ぶもん

お、かぐや嬢がケーキを隠したであろう扉を開けて

「お、ついに渡すのか？」

「あれ？でも閉めたよ、扉」
なんで？

つておいおい、なんか恥ずかしがつてないか？あれ
ということ……………

「このタイミングで我に帰るなよな（らないでよね）」

あゝ、やつぱり

早坂も同じこと考えたつてことは多分そうだよな
なくんでこのタイミングで我に帰っちゃうかな？

このまま渡せば終わりだったのに

あの超デカケーキ

「なあ、早坂？」

「なに？崇宮君」

「かぐや嬢、渡せると思うか？」

「どうだろう。でも、今までの傾向を見ると無理じゃないかな？」

「やっぱりか」

「うん」

かぐや嬢……………

もうなんでもいいんでさっさと渡して告ってくれねえかな？

なんか、これからこれ以上に面倒な事に巻き込まれそうだし

早坂と一緒に考えるのも楽しいけどさ

でも、学校でも早坂とイチャイチャしたい

お、かぐや嬢が動いた

「電気、消したね」

「蠟燭の火を目立たせるためだろうな。ってことは、渡すみたいだな」

「かぐや嬢も成長してるんだね」

「そうみたいだな」

うっわ、かぐや嬢の背中でも見えねえ

中で何が起きてるんだ？一体

「なんも見えねえな」

「そうだね。でも、あのケーキを直で渡してないのは事実だね」

「そうだな」

あ、かぐや嬢こっち来た

「では……………」ギイ

「かぐや嬢、お疲れさん」

「ハナハナ」

「かぐや嬢、よく頑張りましたね」ヨシヨシ

うっわ、スッゴい心臓バクバク鳴ってる。相当緊張したんだな

ホント、よく頑張ったな。お疲れさん、かぐや嬢

《…その後…》

「かぐや嬢？ホントなんでこんなの注文したの？」モグモグ

「崇宮君の言う通りですよ。かぐや嬢」モグモグ

「……………」

あゝ、こりやダメだな

完全にシヨートしてるわ

そこまでなるんだな。好きな人にプレゼント渡すって

はあ、そんなことより……

「これ、ランニング何キロ分だろうか……。早坂、一緒に走らないか？」

「そうだね。走ろっか、崇宮君」

早坂愛は引き下がれない

何であんなこと言っちゃったんだろ？

「あゝ、やっぱり白銀くんだけ〜！」

売り言葉に買い言葉、崇宮君をバカにされたからってあんなにムキにならなきゃ良かったよ……

恥ずかしい、なんでこんなことしなきゃいけないの!?

あの時は確か……

《とある日の夜、四宮別邸にて〜side 早坂愛〜》

ホント頭を抱えたくなるよ……

はあゝ、全く……

「お見舞いに花火大会。それに誕生日に月見、これだけイベントがあつて、私と崇宮君がお膳立てして、どうして全く進展がないなんてことになるんですか？」

「うぐ……」

「どうしてここまで下手打てるんですか。もうすぐ生徒会も解散なんですよ?」

「何よ……」

「はい?」

「じゃあ何よ?早坂だったら会長を落とせるって言うの?」

今度は何を言い出すのかと思えば……

まあ、ここまでイベントがあればかぐや様よりは近くなれると思うけどなあ……

「まあ、かぐや様よりは上手くやりますよ」

「言ったわね!じゃあやってみたら良いじゃない!!」

「いや、何をどう考えたらその発想に至るんですか」

私、彼氏いるんだよ?

そんなことするわけないじゃん

全く、何を考えてるんだか……

かぐや様、また何かスツゴい色々言ってるなあ……

私、一言もイチコロなんて言っていないんですけど

「口では幾らでも言えますからね!!大言壮語も程々にして欲しいわ!!」

そんなこと私に言われても
だって私

「実際、やりきって付き合いましたし」

「そ、そうだったわね。でも、誠がチョロかっただけじゃないの?」

「カチン

へえ、そんなこと言うんだ

ふくん……

「会長の方がチョロいと思いますけど?」

「ならやってみなさいよ!!」

「わかりました。やってやろうじやないですか」

《そして、時は戻って現在》

はあく……

いやもうホント、売り言葉に買い言葉じゃん!!

でも、崇宮君がチョロくないって証明するためにもやれるだけやろ

う!!うん、そうしよう

さ、切り替えて切り替えて

「あ………。えっと、四宮の所のメイドさんのスミシー・A・ハーサカさん?」

「ピンポーン!良かった、覚えててくれたんだ〜!」

「いや、前の時と雰囲気の違いすぎて一瞬わからなかった」

「今日はオフだもん。いつもあんなに肩肘張ってたら疲れちゃうよ〜」

「ああ、そうだよな……」

「ここまでの会話は想定通り

さて、このままうまく行けるかな?」

「かぐや様から聞いてたけど、本当に勉強熱心なんだね」

「いや、そんなでもない……」

「それに比べて私が買う本は俗っぽくて恥ずかしいなあ。参考書の1つでも買ってあげばよかったよ」

「PCが好きなんですか？」

「いやー、ノーパソが欲しいんだけど何がいいのかわかんなくって」

この流れで教えてって言うってゴリ押せば教えてくれる

それで、そのまま一緒に話せる

これで決まりだね

「あつ、そうだ！こういうのって男子の方が知ってるよね！白銀くんが選んで！」

「いや俺も詳しくは……」

「それでも私よりかはマシだよ！丁度カフェエリアもあるし、どれがいいかちよつと教えてよ〜」

「まあ少しの間なら……」

「やったあ！」

良し!!これでもう少し話したり出来る!!

《一方その頃、本屋の入り口にて》

「あ？あいつ何してんだ？」

チツ、ちよつと見てみるか

本買うついでにな

「よお、かぐや嬢。何してんだ？」

「何って、早坂が会長をオトすって言うから見てるんですよ」

「へえー、早坂がそんなこと言い出したんだ。ふーん」

「うえ!?!ま、誠?ど、どうしてここに?」

「俺が休日にごくに居ようと俺の勝手だろ?」

早坂の奴、自分は二股か?

それとも、かぐや嬢との口喧嘩の流れでそうなったのかどちらにせよ、気分が良いもんじゃねえな

「で、今はどうなってるんだ?」

「ま、誠?もしかして怒ってる?」

「いんや、別にキレちやいねえよ。ただ、どうなってるか気になってるだけだ」

「ほ、ホントに?」

「しつげえな、キレてねえっての。で、状況は?」

「は、早坂が会長にノートパソコンを選んでもらうそうです」
「なるほどね」

教えて、か

確かにそういえば御行は断れないな

流石だな、良く考えて行動してるよ

「お、パソコンの話は終わったみたいだな」

「そうね、これで会長を繋ぎ止める事ができなくなりましたね。これでゲームセットです」

「いや、勉強教わりだしたぞ」

「なんですって!？」

いや、ホント、俺が言いてえよ

何で、早坂があんなことしてるの？

でも、かぐや嬢に聞いて本気でオトそうとしてるなんて言われたら俺壊れる自信があるから聞かねえけどよ

「あ、寝たフリ始めたぞ？」

「今度は何をするつもりなの?」

「さあな。じゃ、俺は本探してくるから」

「あ、ちよ、誠」

さてさて、本はあるかねえ〜と

うーん、こんなんもいい感じだしな

お、これいいじゃん

せっかくだしカフェエリアで読も

《崇宮君、本購入後カフェエリアへ》

「よ、御行。何してるの?」

「ああ、誠か。いや、この子に勉強教えてたら寝ちやつて……」

「あれ?その子もしかしてハーサカさん?」

「知ってるのか?」

「まあ、名前ぐらいはな」

こう言えば、ハーサカが本当にいるって思わせれるだろ

御行、意外と勘が鋭いところあるからバレててもおかしくねえなからな

「誠は何しにここに？」

「いや、いい本があったからちよつと読もうかなって。折角カフェエリアがあるしコーヒー片手にな」

「そういうことか」

「おん、そつちはその子起きるまではここに居る感じか？」

「ああ、女の子を一人にするわけにはいかんしな」

「そゆことね。んじゃ、また学校で」

「誠、お前機嫌悪くないか？なんかあったか？その……、彼女とかと」

「……なんもねえよ」

「そうか。それじゃ、ゆつくり読めよ」

「へい」

さて、読むか

《〜約3時間後〜》

ふいふ、中々良かったなこの本

家だったら絶対泣いてたわ

特に最後の『繋いだ手は、互いが思っていた以上に暖かった』ってのがいいよなあ

この二人の距離感と関係の変化を良く書けるとおもおうよ

さ、帰るか

「ハーサカも起きたみたいだしな」

さて、かぐや嬢と一緒に見るか

《崇宮君、移動中》

「戻ったぞ。かぐや嬢」

「何してるの!!どうして会長を移動させなかったの!!これで成功しちゃったらどうするのよ!!」

「そんなときは俺が手を引く、それだけだ。後、かぐや嬢は新しい恋を探すんだな」

「え、手を引く?それってどういう……」

「どう受け取るかはあんたに任せる。じゃ、俺はこれで」

「え、ええ」

《視点は戻り〜side早坂〜》

どうしよどうしよどうしよ!?

崇宮君が来てる、本当にどうししよう、もしかして嫌われちゃった？
うそうそ、でも早く誤解を解かないと
会長をオトすとかそんなこと言ってる場合じゃない!!

「白銀くん、ごめんね?待っててもらって」

「いや、無防備な女の子を放って帰るわけにはいかんだろ。それに、勉強疲れは努力の証だ」

「そっか、ありがとね。って、もうこんな時間!ごめんね。私これから
用事あるんだ。だからじゃあね」

「ああ、さようなら」

崇宮君、崇宮君、お願い居て!!

「かぐや様!!崇宮君は!?!」

「い、今帰ったわよ」

「何か言っていました!?!」

「もしもの時は俺が手を引く、って……って早坂待つて!!」
待てる訳ないじゃん!!

今行けば会えるかも、それに家に帰るならわかるからきつと追い付
ける

お願い!!私に弁解させて!!崇宮君!!

あ、見えた。お願い、止まって!!

《視点変更 side 崇宮君》

はあく、手を引くとは言ったもののやっぱ辛いしムカつくなあ……

「崇宮君!!」

「ぬおわあ!?!」

イツテエ、今のって早坂か?

「どうしたんだよ。御行をオトすんじゃないかねえのか?」

「ごめんなさい」

「はい?」

いきなり、何言ってるの?

なんのこっちやわかんないんだけど

「かぐや様と口論になって、向きになったからって二股っぽくなるうとしてごめんなさい」

「いや」

「崇宮君が居るのに、会長さんをオトそうとしてごめんなさい」

「ちよ」

「崇宮君が居たのにスルーして会長さんを優先してごめんなさい」

「早坂さん？」

「ホントは崇宮君一筋で大好きなのに。会長さんに告白しようとしてごめんなさい」

「ストップ、ちよっとストップ!!」

「何度だって謝るし、何でもするから」

「落ち着けて」

「好きだから、大好きだから。だから、手を引くなんて言わないで……」

「はあく、つたく、ここまでするんだったら最初からしなきゃいいのに……」

「まあ、ここまで言われると怒る気も失せるわ」

「なんか、ちよつと言えば泣きそうだし」

「……取り敢えず事情聞か」

「わかった、わかった。だから取り敢えず落ち着けて」

「う、うん／＼／」

「あ、これ我に帰った奴だ」

「絶対恥ずかしがつてる奴だ」

「取り敢えず、その喫茶店で話聞くから、な？」

「わかった／＼／」

《崇宮君と早坂さん、喫茶店入り》

「ご注文はお決まりになりましたか？」

「コーヒーと、早坂は何がいい？」

「メロンソーダ……」

「コーヒーとメロンソーダで」

「かしこまりました」

で、じつくり話を聞こうか

「何がどうなつて、御行をオトすとかいう話になつたんだ？」

「ううう、言わなきやダメ？」

「言わなきやダメです」

「わ、わかつたよ。実はね……」

《早坂さん説明中》

「という訳なの」

「アツハハハハ!!それで売り言葉に買い言葉でああなつたと」

「うん」

「アツハハハハ!!いやもうバツカみてえ！」

「もう!!笑いすぎだよ!!」

「ヒー、ヒー。腹いてえ……」

キレてた俺がバカみてえじゃん

俺がバカにされたからキレたつて……

ハハハハハハ!!我慢できねえ

「もう!!なんでそんなに笑うの!!私だつてバカだったとは思うけどそんなに笑わなかつたつていいじゃん!!／／／」

「いやあ、愛されてるなあつてよ」

「ううう、だつてう、我慢できなかつたんだもん」

「いやあ、笑つた笑つた。久しぶりにこんな笑つたわ」

ホントに愛されてるわ、俺

嬉しいんだけどさ？

どうしてそんなことするかね？

俺、スツゴク不安になつたんですよ？

全く、俺の心配を返せつての

「お待たせしました。コーヒーとメロンソーダになります」

「ありがとうございます。コーヒーはこつちで、メロンソーダは彼女に」

「かしこまりました。それではごゆっくり」

ま、それにしても

「ありがとうな」

「へ?どうして?」

「まあ、形はどうあれ俺をバカにされて怒ったわけだからさ。形はどうあれ、な」

「うっ、その件はホントにごめんなさい」

「もう別に怒ってねえよ。それじゃ、これ飲んで帰ろうか」
「うん」

ホント、別に俺チヨロいって言われてもいいけどな

俺って多分チヨロいと思うしな

チヨロいと言やあ、かぐや嬢

「あつ、かぐや嬢(様)」

「あの二人、帰ったら絶対説教してあげます」

崇宮誠は終わりたくない

今日が、生徒会最後の日か……………

ホント、色んな事があつたよな……………

俺個人としても、生徒会にしても、全部懐かしいよ

「俺たちの生徒会は終了、だな」

「そうっすね」

「そうだな」

「そうなりますね」

「そうですね」

この1年、早かったような短かったような不思議な時間だったな

「じゃあ、今度こそ忘れ物はないか？」

「もうないだろうよ」

生徒会、終わっちまうのかあ……………

もつと続いて欲しかったな

終わるもんはしやーないと割りきるしかないか

「どうします？ファミレスで打ち上げでもしますか？」

「お、優それいいね。どうだ？御行」

「それもいいかもなあ」

いいねえ、ファミレスで打ち上げ!!

ん、藤原の奴、妙に静かだな……………

「おい、藤原……………」

「いつぐ、いつぐ」ズビー

「泣くなよ、とは言わねえ。お疲れ様、藤原」

「うわああああん!!」ポロポロポロ

やっぱりか……………

でも、この1年楽しいこと悲しいこと含め、思い出がたくさんでき
たからなあ

泣くのも無理ないか……………

「も……………。そんなのずるいわ……………」ポロポロポロ

「かぐや嬢まで……………」

「…皆お疲れ様。ありがとうございました」

「ありがとうございます」

ホント、大好きだぜこのメンバーが、この第67期生徒会がな

『第67期生徒会、全活動終了』

《くくファミレスに移動中くく》

「ホント、この1年でみんな成長したな」

「御行、いきなりなんだよ」

「いやそんなこと言いますけど、成長したって、それ多分崇宮先輩のこ
とじゃないですか？」

「そうですよ!!私もそう思います!!」

「確かに、誠かもな」ハハッ

え、俺？

「何を、え、俺？みたいな顔してるんです？」

「かぐや嬢まで……。俺、そんなにか？いや、そんなにか」

「そうですよ、私たちみんなに素で話してくれるようになったじゃないですか」

「そうだな」

「1学期の期末試験で本気で悔しいって思えたのも成長だしな」

「そんなことがあったんですか？」

「うえ!!御行、それ言うなって」

できれば、言わないで欲しいんだけどなあ

くっそ恥ずかしいし

「それに、ちゃっかり可愛い彼女作って、羨ましい限りですよ、先輩」
「本当にそこですよ!!崇宮さんだけですっこいです!!」

ちよつと待て藤原、お前告られても断ってるよね？

なのになんだよ、ずっこいって……

それに、優はもつと容姿に気遣ったりしたら……
って、そっかあれがあるのか……

優はなにも悪くないのにな

でも、本人が言うなって言うしな

どうにかならんかな、あれ

「誠、それは私も思いますよ。本当、羨ましいですね」

「そうだぞ、ホント羨ましい」

いやいや待て待て待ちなさいな

お前らに限ればお互いが素直になれば解決するじゃねえか!!

あんたらが素直にならないせいで俺と早坂がどれだけ苦労してる事か

もう生徒会も終わっちゃうし、これからどうやって告らせたらいいんだ?

考えるだけで頭が痛くなる……

「へいへい、俺が悪うござんした。でも、優だって、自殺試行回数減っただろ?それに、メンタルも強くなったように見えるぜ?」

「それは、そうですね……」

「まあ、そんなことはどうでもいいけどな。とにかく、打ち上げレッツゴー!!」

「「オー!!」」

《〜生徒会、打ち上げ中のワンシーン〜》

あれから普通に入店して、普通に打ち上げして、今かぐや嬢とジューズを注いでるんだが……

「かぐや嬢? いい加減御行のこと、呼んでやったら?」

「それができたら苦労しません!! 大体、どうしてあの二人はあんなに馴れ馴れしく呼べるんですか!? 藤原さんにいたっては、名前呼びなんて……!! 軽薄、軽薄ですよ彼女は!!」

「はいはい、普通に御行を呼ぶのが恥ずかしいって言おうな」

「なんですか? あなたも御行、御行って馴れ馴れしい」

んなこと言われたって……

実際、馴れ馴れしく呼べる程つるんでるんだし

「はあく、もういいじゃねえか。普通に白銀くんかさんで」

「だ・か・ら!! そう呼べたら苦労しませんってば!! 正直今まで会長として呼んでこなかったから、その、呼ぼうと思っても会長って言葉が先に出てくるのよ……／／／」

なぐるほどね」

「気持ちにはわからなくてもないから、ここはかぐや嬢に任せるか

まあ、かぐや嬢の気持ちは大体想像つくからちよつとだけ、背中押すようなこと、言ってみるか

「まあさ、かぐや嬢が呼びたいようにすればいいんじゃないか?」

「結局、他人事ね……」

「実際他人事だしな、でもよ」

「なんですか?」

「たまには、わがままの1つ位いいんじゃない?男って、大事な女のわがままは出来るだけ叶えてやりたくなるもんなんだぜ?」

「何よ、わかったようなことを……」

「わかるさ。だってよ?俺と御行は幼馴染みたいなものだぜ?だから、白銀御行は少なくともそういう人間だってことぐらいわかるんだよ」

「……………私は、わがままを言っても良いのかしら?」

「なんだ、今日はえらく素直じゃん」

「ちよいちよいこういう日があるから、この人を憎めないんだよなあ……………」

「こういう時は思ったことを言えばいいのかな?」

「そいつはかぐや嬢自身が決めることだな。ま、もうちよつと打ち上げはあるんだ。それに、御行のことだ暗いからあんたを送って帰るって言うだろうさ」

「でも、藤原さんも居るし、そつちを送るといふ可能性も……」

「だー!!もう!!調子狂うな、つたく」

「そつちは任せな、なんのために俺がいると思ってる?」

「ありがとう、誠」

「感謝される事でもねえよ。俺はただ、自分の主様の幸せを願う、そういう従者として普通の発想をしてるだけだよ」

「そうね。あなたはそういう人よね」

「そういうこつた。さ、戻ろうぜ?」

「ええ、戻りましょうか」

《〜そんなこんなで打ち上げが終了し〜》

ふいふ、楽しかった〜!!

ささく、それじゃあ藤原を家まで送るか〜

「藤原、優さつさといくぞ〜」

「は〜い、了解です。崇宮先輩」

「ええ〜!? どういうことですか? 崇宮さん!!」

どうということもなにも

「いや、女の子をこんな時間に一人で帰すわけにはいかんぞ?」

「そうですね。藤原先輩、普通に抜けてるんで、送らなきゃ誘拐されるかもですよ?」

優、ナイスフォロー

建前はこんな感じで大丈夫だよな?

かぐや嬢と御行は〜、つと、ありや大丈夫だな

ちゃんと一緒に帰る話になってるだろうし

後は…………、なるようになるだろ、多分

「それは困ります〜!! 崇宮さんも石上くんも絶対に私を見捨てないでくださいね〜」

「んなことする訳ねえだろ。バカなこと言ってないで、さつさと帰るぞ?」

「そうですね、早く帰りましょうよ。藤原先輩」

「ああ〜!! 二人とも待つて〜!!」

頑張れよ、かぐや嬢

多分、今回は御行の手のひらの上かも知れねえけどな?

《その後、書記ちゃんと石上くんと別れて崇宮家にて》

「誠君、生徒会お疲れ様でした」

「ん、さんきゅ」

「誠〜!! 生徒会お疲れだったな〜!!」

うつわ〜、出来上がってるじゃん

別に気にしないけどさ

「いやあ〜、この1年色々あったな〜」

「そうですね。色々ありましたね」

「誠が珍しく風邪を引いたり、初めて俺達に本音でぶつかってきてくれたり、誠に彼女ができたり……………」

「ちよっ!!父さん!!」

「そうですね、まさか誠君がまた彼女を作れるなんてね」

「は?今この人またって言った?またって言ったよね?」

「なんで?何をどこまで知ってるの?この人マジで」

「母さん?あんた、どこまで知ってるの?」

「さあ?なんの事かわかりませんね。とりあえず、打ち上げも含めてこの1年、本当にお疲れ様でした」

「おう、まあまた1年延びそうだけどな」

「どうして?」

「まあ、色々あるんだよ。俺にも、かぐや嬢や御行にもさ」

「そうですね。でも、そうになったらそうなたでまた頑張るんでしよう?」

「そりやあな、せっかく選ばれた訳だしな」

「じゃあ、次も頑張ってくださいね」

「はいよ」

さて、部屋に戻ってたらスマホでも触るか

《〜崇宮君、自室に到着〜》

「さ・て・とくなんかイベントやってるかな」ピロンツ

ん?メールだ、かぐや嬢からか?でももう寝てるはずの時間だし

それじゃ、御行か?

「ありや、早坂だったか。何々……………」

『崇宮君、生徒会1年間お疲れ様。かぐや様の事とかで色々疲れたでしよ?今日も手伝ってくれたって言ってたし。それでなんだけどき、今週末前から計画建てた温泉旅行に行きませんか?あ、用事があるんだったら全然良いからさ?出来るだけ早く返信してくれると嬉しいな』

今週末ね、なんもなかったし、行けるって返すか

『ありがとさん。まあ、多分もう1年生徒会やんなきゃいけないけどさ。それで、温泉旅行の件だけど、今週末は特になにもないから俺は

行けるぜ？でも早坂は良いのか？かぐや嬢のこととか色々あるんじゃないか？」

つと、こんな感じで良いかな？

文章可笑しくないよな？

『その事なら大丈夫だよ。かぐや様に許可は貰ってあるから。それでさ、行けるって事だよな？』

『おう、そうだ。楽しもうな、温泉旅行』

『やったやった!!それじゃ、予約するね!!』

『ありがとな、早坂』

『うん、それじゃあね!!大好きだよ崇宮君。おやすみ!!』

『俺も好きだよ。おやすみ早坂』

テンション高かったなあ

ああ、この瞬間の為に生きてる気がする

ホントに幸せだわあ

あ、でも着ていく服どうしよ

1泊2日だからな

それにしても二人で旅行か……

「たあのしみだな〜!!!」

こうして、俺たち第67期生徒会が終了し、俺たち生徒会メンバーは一時的に解散、俺と早坂の1泊2日の温泉旅行が確定したのだった

従者二人の温泉旅行

「だ、大丈夫……………だよな？」

荷物はさつき確認した

服装は……………多分大丈夫

財布も入れた

髪は、ワックスはつけてねえが大丈夫

忘れ物もない、はず

「誠君？何をちんたらしてるんですか？」

「い、いやあ…、そのお…、忘れ物の確認を……………」

「はあ、全く。あなたそれさつきから何回やってるんですか？」

ア、アハハハハ……………」

その通りでございます

宿が開くのと同時にチェックインして荷物を置いてから周りを見て回ろうって言ってたけど、なあ……………」

「もうっ!!シャキツとなさい!!男の子でしょ!!折角、好きな女の子と旅行できるんですから、そんなオドオドしないの!!」

「ひゃ、ひゃいっ!!」

「ほら、さつきといく!!」

「で、でもよ……………」

「あ、？グダグダ言わないでさつきと行け」

「はい……………、行つてきます……………」

《〜〜崇宮君、移動中〜〜》

母さんの奴、ひどいよ……………」

なにもあんなにキレなくったって良いよなあ……………」

だつてさ、緊張するじゃん？かわいい彼女との旅行だよ？誰だつて緊張しますとも、しない奴なんているか？いや、いません

これは絶対断言できるね

父さんも絶対最初は見られてないだけでこうなつてたもんね!!

俺とあの人つて性質ほとんど一緒だし!!

「もう家から出ちやっただし、仕方ない。腹括つて行くか!!」

でも、気になるな〜

俺の今日の服装って変じゃないよな？朝風呂にも入ったし臭くもないよな？大丈夫だよな？

《所変わって四宮別邸にて〜side早坂愛〜》

うう〜、大丈夫だよな？

なんで朝早くから誘っちゃったんだろ？

いや、そのときの私の考えはわかるんだよ？

崇宮君と最初で最後の旅行だから出来るだけ長く一緒に居たいっていうのはね？

でもさ、もうちよつと遅くにすればよかつたんじゃないかな!?

自分に言うのもなんんだけどさ!?

「はあ〜」

「あら、早坂、早いわね。ふわあ〜あ」

「おや、かぐや様。起こしてしまいましたか?」

「いえ、お手洗いにいきたくなっただけですから気にしないで。それよりこんなに早くから行くの?」

「その事なんですよ」

「なにがです?」

「いや、その、崇宮君の迷惑になつてないかな、と」

崇宮君の迷惑になつてたら謝らないとダメだし

それに、こんなに朝早くから行くのってなんか、その、申し訳ないし

「誠は迷惑に思つてないと思いますけど?」

「どうしてそう思うんですか?」

「だって、崇宮誠っていう人間は好きな人の為なら本気で迷惑だなんて考えない人間でしょう?」

「そうですかね?」

「じゃあ逆に聞きますけど、あなたは誠に一回でも本気で迷惑がられた事があるんですか?」

「それは……………」

ない……………けどさ

けど、もし迷惑に思われてたら、つてさ!!考えちゃうじゃん!!

「ないんでしょう?じゃあ、そういうことよ。ちよつとは自分の彼氏を信じなさい」

そう、なのかな?

そうだよね……………

私の知ってる崇宮君は、そういう人だもん

好きな人の為なら、どんなに迷惑そうな事でも、迷惑だと思わずその人の幸せの為に精一杯がんばる人だもん、きつとそうだもん

……………もつとあの人と一緒に居たいな、無理だろうけど

「もう大丈夫?」

「はい。すみません、かぐや様。ご迷惑をおかけして」

「全くよ。緊張するのはいいですけど、それでネガティブになるのはいけません。折角の温泉旅行なんですから楽しまないと」

「そうですね」ピンポーン

あ、崇宮君来たみたい

最終確認、寝癖は大丈夫、服もきつと大丈夫……………多分、荷物は大丈夫、昨日確認もしたし

あゝ、緊張するう……………

「ほら、噂をすれば来ましたよ。さ、さつさと行きなさい。あまり彼氏を待たせるものじゃありませんよ?」グイグイ

「ちよ、かぐや様待つて、まだ、心の準備が……………」

「いい加減にしなさい!!ウダウダ言わないでさつさと行く!!」

「え?は、はいいい!!」

えゝ、何時も自分の時は散々ウダウダ言つて、挙げ句なにもしないくせに……………

でも、お陰で心の準備ができたよ

そして、覚悟もね

ありがとう、かぐや様

「それではかぐや様、行ってきます」

「行ってらっしゃい。気を付けてね」

「わかってますよ。それでは失礼します」

さて、気合い入れて行こう!!
でも大丈夫だよな?

服装とかさ?

あゝ、もうっ!! 考えても仕方ない!!

行く!!

「お、おはよう。崇宮君」ガチャッ

《少し時間が戻って〜side 崇宮誠〜》

ふう〜、大分落ち着いてきたな

お、早坂が出てきた

「お、おはよう。崇宮君」

「うーっす、おはようさん。早坂」

「こんなに朝早くにごめんね?」

「別にどうってことねえよ。いつもこれぐらいには走りに行ってるからな」

「そうなんだ」

「そうだよ。じゃ、行きますか」

「うん!!」

うわあゝ、なんかいつもより何倍も可愛く見える

って、ぼーっとしてる場合じゃない!!

今日と明日は楽しむぞ!!

「あ、そうだ」

「ん? どうしたの?」ギョッ

自分から手繋ぐのって恥ずかしいな／／／

え〜っとお、ちよっといきなりすぎたかな?

「んえっ!?! / / /」

「わり、迷惑だったか?」

「いや、全然。寧ろ嬉しいよ。ちよっどビックリしただけ / / /」
ギョッ

に、握り返してくれた!!

良かったゝ、嫌がられてなくて

ホント、早坂の手って柔らかいなく、ってそんなこと考えない!!

こういうときはなにか話題転換を……………

あ、ダメだわ

なに考えても手に意識を持ってかれるわ
なんか話題出してくれないかなあ？

「チラッ

「えへへ／＼／＼」ギョッ

あらまあ／＼かわいい

なにあのとろけたニヤケ顔

何あれ、むっちゃかわええやん

更に強く握り返してくるのもええな／＼

やっぱ、マジ俺の彼女天使だわ

《崇宮君がそんなことを考えてるとき／＼side早坂愛》

崇宮君から手を握ってくれた／＼!!

きやく!!もうすごい、すごく幸せ／＼

あ／＼!!さいっ／＼!!崇宮君、LOVE!!

もつとギューつて握っちゃうもんね

「えへへ／＼／＼」ギョッ

…………でもきつとこれが最後の旅行になるんだろ／＼な

今までで一番楽しい思い出にしよう

でない／＼私は、この先絶対に後悔する

きつと、この事を話すと崇宮君は私が嫌いになると思う

でも大丈夫。私が我慢すれば良いだけだから

崇宮君には、かぐや様や書記ちゃん達色んな人がいるんだもん

きつと、私一人居ないぐらいなんてことない

「……………」

《sideチェンジ／＼side崇宮誠》

「……………」

難しい顔してんな

辛そうだし

こういうのって聞いた方が良いのか？

いやでもさっきの笑顔を見るに楽しみにしてたんだろ／＼……………

どうしたものか、あ、そっか

夜に宿で聞けばいいのか

そうすれば、最悪仲違いしても1日は楽しめる、よな？

とりあえず、俺は早坂とこの旅行を楽しめばいいかな

後、片手間で考えるか、早坂が何を悩んでるのか

「お前が本音で俺を嫌いにならない限り何があっても、絶対に俺はお前の側にいるからな

「さ、それじゃ楽しんで行こうか？早坂」

「そうだね。崇宮君」

ささ、切り替えて行ってみよー!!

《〜崇宮君&早坂さん移動中〜》

やつぱいいいなあ、早坂と話していると幸せな気持ちになるわ

恋っていいもんだな

御行やかぐや嬢と違って、恥ずかしくても告白して良かった〜

「でね？かぐや様、その時私が渡した紙読んだんだよ？」

「なんて書いて渡したんだ？」

「プレゼントは私、って書いたんだ〜」

「アツハハハ!!ウツソだろかぐや嬢読んだのかよ」

「そうなんだよ！かぐや様ったらホント無用心なんだから」

「それだけ信頼してるんだろうよ」

「ツ!!そ、そうだね。ホント、かぐや様は私を信頼しすぎなんですよ」

なるほど、なんとなく話が読めてきた

かぐや嬢関係か

それにしても、信頼しすぎ、ね……

「そりゃ、信頼もするだろうさ」

「どうして？」

「だってよ、小さいときからずっと側に居て支えてくれてるんだぜ？」

「……………」

なんだ？急に黙りこんで

もしかして……………？

いやいや、まさか、な……………

「ねえ、崇宮君」

「どした？」

「もし、崇宮君だったらそんな信頼してる人が裏切ってたらどう思う？」

なるほど、オーケー

今の話でやっと、確信に変わったな

なんで、早坂が今まで時々辛そうな顔をしていたのか

どうして、話していたとはいえこのタイミングで旅行をぶっこんで来たのか

合点がいったよ、ようやく

「さあね」

「え？」

「その話は今晚にでも聞くよ。だからさ？今は旅行を楽しまないか？」

「良いの？」

「当たり前だろ？だって今日はお前と俺のお疲れ様旅行だからな」

「そうだけど……………」

「だったら、そういう話は旅行を楽しんでからしてくれよ。そうじゃないと後悔する気がする」

「そう、かな？」

「俺のよく当たる勘が言ってるんだ。ほぼ間違いねえよ。だからさ、楽しもうぜ？早坂」

「……………うん。そうだね!!後悔が無いように楽しまなきゃね!!ごめんね崇宮君。こんな空気にしちゃって」

「気にすんなって。さ、電車も来たし。さっさと乗って行こうぜ」

「うんっ!!」

こんな事言っちゃいるが、正直今晚話を聞いて決断しなきゃいけないかもな

俺がどう身を振るか

これから、かぐや嬢を含めた四宮の人間とどう付き合っていくの

かつて事を………

ま、今はそんなことより早坂との旅行を楽しむけどね

愛の本音と誠の覚悟

「とうちやーく!!」

まあ、なんやかんやあつたが無事に現地到着だな

早坂も切り替えてるみたいだし、楽しみますかね

「とりあえず、泊まる旅館に荷物を置きに行くんだよな?」

「そうだよ。周りのお店が開く時間と合わせたから、早く荷物置いてまわろう!!」

「そうだな。って、おいおい走るな走るな。危ないだろ」

喜んでくれてるよな?

俺が今まで見てきた中だと、あれが彼女の素だからたぶん大丈夫だよな?

そんなこと気にしても仕方ないか

さ、楽しむぞお!!

《〜崇宮君&早坂さん移動中〜》

「早坂?ここであつてるよな?」

「うん。地図を見た感じ、ここだよ」

「おっけ、んじや行こうか」

さて、ちやちやつと荷物置いて楽しむぞ!!

《〜崇宮君&早坂さん荷物を置き中〜》

「早坂、準備できたか?」

「こっちは準備万端だよ。崇宮君は?」

「俺はいつでも準備バッチリだから大丈夫だよ。それじゃ、行くか」
「うんっ!!」

《〜崇宮君&早坂さん散策中〜》

「すごいね、崇宮君。普段は見れない色んな物があるよ!!あつ、あれ美味しそう」

早坂、楽しんでるみたいで良かった

にしても、ここまで色んな店があるんだな

母さん達と来たときはこんなになかった気がするんだけど、見てなかっただけかな?

「買ってこようか？」

「でも、あんなに大きいし。お昼食べれなくなるかも……」

「俺も食うから大丈夫だって。んじや、買ってくるな〜」

「待って!! 行って、行っちゃった……」

さてさて、ちやちやつと買って戻るか

はぐれると面倒だし、それに、あんな早坂を一人に出来ないしな

「すんませーん!! これ1つください!!」

「はい!! 970円になります」

「はい、1000円で」

「30円のお釣りです。ありがとうございます!!」

「ありがとうございます!!」

すつげーな、でかすぎない？

これ、二人で食べても昼飯食えるかな？

「ちよつと崇宮君!! 急にどっか行かないでよ!! あ、買ってくれてありがと」

「いや、食いたくなっただけだからいいよ。はい、あーん」

「あ、あくん／＼うくん♪ 美味しい♪」

「そかそか」パクッ

うくん♪ たつまんねえ♪

うつま〜♪

買ってよかった〜

早坂もおいしかったみたいでよかった……!?

こ、これって、か、かか間接キス!?

ど、どどど、どうしよう

知覚すると急に恥ずかしくなってきた

／＼／

「お熱いね〜。羨ましいよ、全く」

「えっ!?! いや、その、そういうことじゃなくて……」

「いやいや、お似合いだよ。はいこれサービス」

「え、いいんですか？」

「いいんだよ。久しぶりに良いものを見せてもらったからね」

「ありがとうございます。それじゃ、僕らはこれで」

「また来てねー。彼女さん大切にしなよー」

「言われなくてもそうしますよ。ほら、行くぞ早坂」

「え、あ、うん／＼／＼ありがとうございます」

はあ、全く、疲れた

あゝ、恥ずかし

でも、こういうのも楽しいんだよなあ

「どうしたの？嬉しそうな顔して」

「ん？こういうの、楽しいなって」

「そうだね、楽しいね」

そっか、楽しいか

良かった、良かった

俺は、あんな寂しそうな顔なんか見たくないからな

「ねえねえ」 チョンチョン

「どうかしたか？」

「次、あのお店行きたい」

「あの土産屋さんか？いいぞ、行こうか」

「うん」

なんか良いもんあるかな？

「ねえ、崇宮君。あれ、どう思う？」

「ん？これか？」

この2個で1個のペンダントか？

確かに良いデザインだとは思うけど…………

うお、結構な値段してるな

でも、折角だし、いっか

「買うか？」

「いいの？」

「なにか問題でも？」

「いや、そういう訳じゃ…………」

「なに？もしかして、申し訳ないんか？」

「うん。だって今日、崇宮君に買って貰って貰ってばっかだし……」

別に気にしなくてもいいのに

こういう時しか金使わないんだし

でも、早坂の性格上気にするよなあ……

あっ!!そうだ!!

「気になるんならさ。一つだけ、約束してくれないか？」

「なにを？」

「これをお前が着けてる時は早坂は俺に嘘をつかず、素直でいること」

「えっ」

「俺が着けてる時は、俺は大事な人に嘘をつかない」

「そんなことでもいいの？」

「おん。じゃ、買ってくるな」

そんなことって………

あんた、そんなに素直でいることないでしょうよ

これを守ってくれるかは早坂次第……

まあ、俺は守るけど

基本的には嘘ついてなかったし

お、この指輪早坂に似合いそうでいいな

《~~~~崇宮君、購入中~~~~》

「はい、早坂」

「あれ?指輪?」

「ああ。そいつは俺からのお礼だよ」

「なんのお礼?」

「俺を旅行に誘ってくれたこと、俺を好きでいてくれる事、かぐや嬢の側でいつも支えてくれていている事への感謝の気持ちだよ。つけなくても全然いいからよ、受け取ってくれや」

「全然。嬉しいよ!!早速つけるね!!」

そっか、嬉しいか

良かった………

その笑顔の為なら、俺は何でもできる気がするよ
「どう?指輪もネックレスも、似合ってる?」

「両方、その綺麗な肌に似合っていてかわいいよ」

「そ、そう？えへへ／＼／＼あつ、崇宮君にも着けてあげるね」

「ん、サンキュ」

俺には似合うのか？これ

まあ、似合ってたなかったら、似合う様な服装と髪型を考えるけどさ

「はい、着け終わったよ」

「ありがと。で、似合ってるか？俺に」

「うん。今の服装にはそこまで似合っていないかな。でも、制服には似合うと思うよ？」

「つまり、学校にも着けて行けと？」

「や、ちが、そういうことじゃなくて、その／＼／」

「まあ、着けてくつもりだから良いけどさ」

「え、良いの？」

良いの？って、お前…………

「折角、ペアで買ったんだぜ？ちよつとぐらい見せつきたいじゃん？」

「もう……………ばか／＼／」

「バカで結構。さ、散策を続けようぜ？」

「うん…………。ねえ、崇宮君」

「んあ？なんだ？」

「崇宮君は、何があっても、私の側に居てくれる？」

なんだ？急に

でも、ふむ…………

何があっても、側に居てくれるか、ね

「わからん」

「え？」

「でも、俺が早坂の事を好きな内は絶対に離れない。たとえ早坂が、俺の為と言つて俺から離れてもな」

「そっか…………。そうだよ。崇宮君ってそういう男だもんね」

「なんだ？その言い方」

「なんでもないよ。崇宮君のそういうところ私は大好きだよ。たぶん、いつまでも」

「そうかい。そう言ってくれてる間は早坂から離れねえぜ？俺」
「それじゃ、お互いの気持ちを確認できたところで、行こっか？」
「そうだな。行くか!!」

《そうして1日目の散策が終了し、宿に戻って夕食後》

「ふいふ。食った食った」

いやあ、旨かったなあ

また来て食いたいね、ああいう料理は

それにしても、早坂遅いな

一緒に温泉行ったのにまだ入ってんのか？

「崇宮君、いる？」

「いるぞ」

「それじゃ、話すね」

「ああ」

「私ね、本当の主人はかぐや様じゃないの」

やっぱりか……

「それで？」

「私の本当の主は四宮黄光、四宮家の長男。私の本当の目的はかぐや様の信頼を勝ち取り、一挙一動を報告すること」

四宮黄光……

現段階で次期跡取り筆頭とされてるあのおっさんかなるほど

「それが、早坂家の生存戦略だったわけだ」

「そうです」

「それを、お前は嬉々としてやっている、と」

「っ!!それは……」

やっぱりか

早坂はかぐや嬢を裏切ってる事に罪悪感を持ち続けている

つまり、早坂は仕方がないと自分を納得させてかぐや嬢のスパイを
してるってことか

「早坂、こっからはたかだか17年しか生きてないガキの持論だ。だ
けど、ちよつと聞いてくれや」

「うん」

「信頼なくして我儘言わず、愛なくして我儘聞かず」

「どういうこと?」

「そのままの意味だよ。信頼されてなけりや、我儘は言われねえ。当たり前前だろ? そいつは敵かも知れねえから。そんな奴に弱味なんざ見せられねえからな」

「うん」

「我儘を聞く側はそいつに対して何らかの愛情がなければそれを必死になつて叶えようとは思わねえ、違うか?」

「でも、私は、かぐや様に申し訳なくて、それで……………」

「本当にそれだけか?」

「え?」

俺の思う早坂愛が本当に彼女の素であるなら

きつと、罪悪感や信頼を勝ち取るためだけにあんな行動はしない

きつとそこには姉妹愛のような感情があったと、俺は思う

「早坂、ホントの自分に素直になれよ。お前はどうしたいんだ? かぐや嬢とこれからどうしていきたいんだ?」

「私は……………」

「俺は、お前がどんな選択をしようかと否定しない。それがお前の本心ならな」

早坂、俺はお前の本心が知りたい

お前が、もしかぐや嬢を捨てても良いって言うんなら俺はかぐや嬢を切り捨てても早坂の側に居続ける

もし、別の選択を取るんなら、俺は……………」

「私は!! かぐや様ともつと一緒にいたい! 従者とか、裏切り者だとか関係なく。かぐや様と従者じゃなく、友達として、彼女の側に寄り添いたい!」

「そうか、それが本心だったんだな」

「でも、私にはわからないの!! この事をかぐや様に話せばきつと私は彼女を傷付けそして彼女に嫌われちゃう!! でも、話さないと、私は罪悪感で押し潰されそうで、かぐや様に申し訳なくて、それで……………」

「それで？」

「私、もうどうすれば良いのかわからなくて、かぐや様と会長を付き合
わせたなら、自分は近侍を辞めてどこか遠くに逃げるつもりだった」

早坂……………

そんなこと考えてたから、かぐや嬢と御行をくっ付けるのに必死
だったのか

なるほどな。でも、だったってどういうことだ？

「でも、崇宮君を好きになって、付き合つて。そしたら、崇宮君と離れ
たくなくなって。でもそれじゃあいつか私は罪悪感に潰される。だ
から、この旅行を最期に、崇宮君と別れて。それで、自分の恋心に決
着をつけようとしたの」

「そうみたいだな」

「でも、今日1日、崇宮君と一緒に色んな事をしたら、ますます離れた
くなくなって……。ねえ、崇宮君。私はどうすれば良いの？どうすれ
ば、私は自由になれるの？」

やつと、やつと心の底に眠らせてた本音を全部表に出してくれたな
ありがとう、早坂

それじゃ、俺のやることはただ1つだ

「早坂、正直どうなるかは俺にもわからない。でも、正直にかぐや嬢に
話すしかないと思う」

「でも、そうしたらかぐや様は、きつと」

「ああ、怒るだろうな」

「だったら!!」

「でも、たぶん同時にこうも思うと俺は思う、辛かったんだろうな。気
付けなくてごめん、って」

「そうかな？」

「確証はないが。少なくとも、俺がかぐや嬢ならそう考えるっただけ
さ」

「でも、それでもし許してくれたとして、そこからどうするの？私が裏
切り者であるのは事実だし、かぐや様は許してくれる？」

そこなんだよ、かぐや嬢が早坂を許したとしても、そこは変えられ

ないんだよ

そして、それをどうするか、それはかぐや嬢にしか解らねえしな

「それは、かぐや嬢次第だ。でも他の四宮家対策なら出来る」

「なんで？」

「もし、早坂を解任したとしたら、恐らく次の近侍は俺か昴さんだろう？ だったら、おっさんには情報は回らなくなる」

「でも、私が追われるんじゃない？」

そこは恐らくだが大丈夫だ

だって、

「なんでも利用する四宮の人間が、なにか重要な情報を持つてる奴を解任すると思うか？」

「それはないと思う。だって、情報漏洩の危険があるから」

「安易かもしれないが、どこの連中もそう考える。ということは、早坂は狙われないって事にならないか？」

「確かに。でも、黄光様はどうするの？」

そっちは、出来れば取りたくはない手段だし

何より、不本意だが

「その場合、俺が犠牲になる」

「え？ それって、つまり」

「俺がスパイとしてかぐや嬢の近侍になる」

「それはダメ!! そんなことしたら、崇宮君が……」

「大丈夫。俺は二重スパイする気だからな」

「それってつまり」

「長兄様の指示には従うけど、俺はかぐや嬢の従者だからな。その辺はきつちりやるさ」

そう、やってやるさ

早坂は覚悟を決めて話してくれたんだ

俺も覚悟を決めないとな

「でも、良いの？ それって崇宮君に何のメリットもないんだよ？」

「何言ってるんだ？ メリットの有無なんざ関係ねえよ。それに大好きな人が自由になれる。これって、十分俺にとってはメリットになるの

さ」

「こんな事言ってるが、実際は自由ではないんだろう

必ず色々、制約がつく

それをどうするかは伝えないとな

「だが、勿論完全な自由にはなれない。必ずしも制約がつく」

「うん」

「それでも、お前が自由になりたいなら俺は出来るだけの事をする」

「ありがとう、崇宮君」

「その言葉は自由になった時にとっておいてくれ」

「わかった……………」

ああ、そうだ

「こういうのは意思表示が大切だよな

「後、俺は何があっても早坂を愛してる。そして、側に寄り添って支えるから。だから、俺を頼りにしてくれ、自分一人で考え込んで、それでも答えが出なかったら俺に相談してくれ。早坂の不安な顔を見るの俺はやだからさ」

「崇、宮、君…………。うん…………、うんっ…………!!ごめんね、心配かけて。ごめんね、一人で抱え込んで、崇宮君を不安にさせて、崇宮君に隠し事して。本当にごめんね」

「別に隠し事があるのは悪いことじゃない。そりゃ誰だって知られたくない事の1つや2つあるさ。でも、早坂はそれを俺に打ち明けてくれた。まだ隠し事があるかもしれない。けど、隠し事があったからって俺が早坂の彼氏じゃなくなることはない。それは忘れないでくれ」

「崇宮君…………。いや、誠君。本当に、本当にありがとう。こんな、どうしようもない私を好きになってくれて、私の彼氏でいてくれて、本当に、ありがとう」

「ポロポロ

「早坂、いや、愛」

「なに？」

「ポロポロ

「俺の方こそ、頼りない、結局運任せで力になれない俺の彼女でいてくれて、本当にありがとう」

「愛…………」

「ギョッ

「誠君……」ギユッ

「愛してる。これから、きつと、ずっと」チュッ

お疲れ様、早坂

ホント怖かったろうに、よく言ってくれたな

ようやく俺も、自分のこれからしたいこと、するべき事への覚悟が決まった

だから、その為に俺にできるだけの事をしてやるさ

俺の大切な人達が笑顔で幸せに暮らせるために

その日は、綺麗な月と星が空一杯に広がっていて

とてつもなく、ロマンチックだった

そして、これで俺たちはまた一歩お互いの距離を近づけ、愛を深めたのだ

早坂愛は打ち明けたい

「ふわあゝあ、ん。よく寝たな」ナデナデ
「んう」

起こしたら悪いしこの辺にしとくか
それにしても、はあ、全く人の気も知らないでどさくさに名前呼び
してくれちゃって

俺もしちゃったけど

ていうか、昨日結局一緒に寝たんだよな

別に、やましいことはしてないから大丈夫か？

前回一緒に寝ちやった時はビンタされたからな

出来ればああいふ経験はもうしたくないね

「折角だし、部屋に付いてる方の風呂にでも入るか」

名前呼び、か……………

俺も、愛って呼ぶべきだよな……………？

いや、でも、昨日はどさくさに紛れたから言えたけど改めて考える
と恥ずかしいな

「愛、か……………／＼／＼」

はゝ、やめやめ

さつきと風呂入ってこの顔の赤み引かせよう

《崇宮君、お風呂イン》

「ふう」チャポンッ

あゝ、やつぱいしい湯だなあ……………

てか、この部屋すゝごい豪華だよな

部屋に外が見える風呂があるし、飯はギガうまだったし、部屋は広
かったし

何より、こんなに気持ちいい部屋風呂があるなんてもう最高だね!!

「ふいゝ」ウトウト

あゝ、なんか気持ちよすぎて眠くなってきた

へゝ、気持ちいいゝ

「隣、いいかな?」

「ん〜？」

「ふう〜、朝風呂って気持ちいいね？誠君」

「……………へ？」

「は、はは早坂さん!？」

「え、ちよ、なんで隣に!？」

「え、てか、いつから起きてたの!？」

「いや、待て、とりあえず一旦風呂から出るんだ

それで落ち着くんだ

「じゃ、じゃあ早坂、俺は先上がってるから……………」ガシツ

「……………へ？」

「なんで名前で呼んでくれないの？」

「いや、あのお、そのお……………」

「恥ずかしいの？」

「そういうわけじゃ……………／＼／＼」

「ふふつ、顔真っ赤にして説得力ないよ？」

ぐぬぬ……………」

「顔が熱いから言い返せねえ……………」

「さ、一緒に入るの？ちよつとだけだからさ、ダメ？」

「うっ……………」

「そんな悲しそうな顔しないでくれませんかね……………」

「断れないじゃないですか

「う〜、しゃーない!!腹くくって一緒に入るしかないか……………」

「わかった。ちよつとだけだからな？早坂」

「あ、後名字呼び禁止ね」

「わ、わかったよ。愛／＼／＼」

「えへへ、よろしい」

「なにこの子、かわいい

「この顔を見たらなんでもしたくなっちゃうな

「……………」

「う、う〜む、何か話題はないものか……………」

「それにしても、なんか、こう、エロいな

艶っぽい肌とか、ちよつと上気した顔とか
って!!何、変なこと考えてるんだ!?

「煩惱退散、煩惱退散」

「あのさ、」

「う、うん?どうかしたか?」

「ありがとう」

「おう」

「私の話を聞いてくれて、それでも側に居てくれるって言うてくれて、
ありがとう」

ハッ、何言つてんだ?

「当たり前だろ?俺は愛が大好きなんだから」

「えへへ、そっか。私も大好き、誠君」

そっか、そっかあ

愛、今までより気が楽そうだな

良かった……………

「所で、誠君」

「ん?どつた?」

「さっきから、胸をチラチラ見えますよね?」ギョッ

「そそそ、そんなことはございませんですよ!」

い、痛い痛い!!

つねらないで、つねらないで!!

ちぎれる、俺の皮膚がちぎれちゃう!!

てか、こんな力どつから出してるんですか!?

「もうっ!!どうして、男の人ってこう変態なの」ボソボソ

「いやもうホント、返す言葉もございません」

「ねえ、こういうのって聞こえないもんじゃないの?」

「あのなあ。俺は難聴系主人公じゃないし、こんなに密着してたら聞
こうとしなくても聞こえるっての」

それに今俺と愛ってゼロ距離ですし

あんた俺に寄りかかっているんですし、胸に顔うずめたりしない限り
そりや聞こえますとも

「そっか。でき、1つお願いがあるんだけど、いい?」

「ものによるけど?まあ、とりあえず言ってみ」

「うん。あのさ、私、今から帰ってかぐや様に打ち明けたいの」

「うえっ?今から?」

「うん、今から」

今から、かあ……………

別にいいんだけど、そうになると旅行は終了か……………

こればかりは、しゃーないと割り切るしかないか

「全然、構わねえよ。それが愛のやりたい事なんだろう?」

「うん。そこに誠君も同席してほしいの」

「なんでだ?」

そういうのって、二人だけの方がいいんじゃないのか?

「私が怖いから。お願い」

「事情はわかった。同席はする。けど、俺は何もしない」

「うん。ありがとう、誠君」

「なんで感謝なんだよ。感謝されることじゃないよ」

「だって、私の為でしょ?何もしないのは」

「……」

「こういうの事は、本人の口から言うから信頼できる話だもん。だから、何もしないって言ったんでしょ?」

ありや、バレちった

それだけ、俺の事を理解してくれてるって事かな

いやはや、俺も早坂の事を理解できるようにしないとな

「そういうこと、わかってくれて嬉しいよ」

「だからありがとうって言ったの」

「そっか。それじゃあそろそろ上がって準備するか」

「うん、ごめんね?無理言っつて楽しみだった旅行1日潰しちゃって」

「大丈夫。旅行ならまた今度行けばいい。でも、話したい事があるなら、話しておかないとな。それじゃ、俺先に上がってるから」

「わかった。着替えたら呼んでね?」

「へーい」

《くく崇宮君&早坂さん、着替えと準備中くく》

「よっこらせつと。これで準備完了だな」

「うん。忘れ物もないはず、だよな?」

「持ってきた物は全部入ってたから大丈夫だと思う」

うん、きつと大丈夫のはず

忘れてたら、そんなときはそんなきだな

「それじゃ、帰りますか」

「そうだね」

さて、こつからまた頑張らないとな

愛が話している間は何もしないって言ったから何もできないけど、側に居ることだけは出来るからな

《崇宮君と早坂さん、帰りの電車内で》

「ねえ、誠君。ちよつといい?」

「隣、来いよ。手の震えは止めてやるから」

「ごめんね……」

まったく………

でも考えたら、震えもするわな

裏切りを許さないって奴に、自分裏切ってしまったって言いに行くんだもんな

怖いだろうな、俺には何もできないが、な……

「謝るこたないさ。それに、俺は手の震えを失くせても、体まではどうにもできないしな」

「それだけでも十分だよ」

「そっか。でも、情けないよ」

ホント、情けないよ………

もつとなにかしてやればいいんだけどな

「その気持ちがうれしいの」

「そうかい。それなら良いけどさ」

「うん。それで良いの」

愛が いいなら いいんだよな………?」

今は、かぐや嬢と愛の絆を信じるしかないか……

《そうして、二人は四宮別邸へと戻ってきた》

ふう、緊張するな

愛はもつと緊張してるし、可能ならば逃げたいんだろうな

「誠君、準備はいい？」

「愛は大丈夫か？」

「本音を言うのと逃げたいけど、いつまでもこのままはイヤだから」

「それじゃ、行くぜ？」

「うん」

《視点変更く side 早坂愛く》

誠君が扉を開けてくれる

緊張する、正直今にも逃げ出したい

でも、言わないと

それに、私の側には誠君が居てくれる

だから、きつと大丈夫

「かぐや様」

「あら、早坂に誠もおかえりなさい。早かったわね」

「おう。ちよつとな」

「なに？どうかしたの？」

言うんだ、今日、ここで!!

「かぐや様に言いたいことがあるんです」

「そう。誠、少し席を外してくれる？」

「それはできない。悪いな」

「そう……。わかったわ。早坂、話し始めて」

やっぱり、怖い

でも、話さないと、この地獄を、終わらせないと

「私は、あなたの一挙一動を四宮本家に報告するためにあなたの近侍になりました」

「へえ、つまり私を、ずっと裏切り続けていた、と」

「そういうことに、なります……………」

やっぱり、許されないんだ

当たり前だよ、信頼をずっと裏切ってたんだもんね

許されるわけ、ないよね

「泣くんじゃねえ!!」

「!?」

「まだ、全部話してねえだろうが!!なのに、なにももう諦めてんだ!!諦めるなら、全部話した後にしろ!!話す前から諦めるな!!」

「ごめん、なさい」

「かぐや嬢、悪いな?話、続けてくれや」

「ええ。早坂、あなたはどうしたいの?」

え、いま、なんて……………

「それは、どういう……………」

「だから、あなたはそれを私に話して、私を怒らせて、どうしたいの?と聞いているの」

「それは……………」

「早坂、あなたの言葉で話しなさい。あなたは私にどうして欲しいの?」

私が、かぐや様にどうして欲しいか

「私は、」

そんなの決まってる……………

「私は、かぐや様に、打ち明けたいの!!」

「そう……………」

そうだ。私は、かぐや様に打ち明けたい

「いつも、辛かった。自分の本当に大切な人を裏切るのが!!でも!!そうしないと、ママ達に迷惑が掛かるから!!そう思っても、私は毎日、罪悪感に潰されそうだった」

私が、いつもどんなことを思いながら、本家に報告していたか

「それでも、たとえ最初は利用するために近づいたとしても、それでも」

私が、あなたの事を、どう思っているのか

「私は、あの時間が楽しかった!」

そう、私は、楽しかった

「毎日、かぐや様のバカみたいな惚気を聞くのも、無理難題を押し付け

られて、それを叶えるのも。そのすべてが、私にとって、幸せで楽しい時間だった」

「早坂……………」

「許してください。なんて事は言わない。けど、私にとってあの時間だけは、苦痛じゃなかった。だからそれを、打ち明けたかった。あとは、かぐや様にお任せします」

「それは、あなたをどうするか。ということですか？」

「そうです。裏切っていた私をどうするか。すべて、かぐや様にお任せします」

全て、出しきった

もう、何も言い残す事はない

ない……………きつと

「だ、そうだ。かぐや嬢、どうするんだ？」

「いいえ、まだよ。まだ早坂は嘘をついている。早坂、自分自身に嘘をつくのはやめなさい。どうなりたいたのか。はつきり言いなさい」

「わ、私は……………、私は……………」ポロポロ

ひどいよ、私の大切な人達は

私が諦めようとしているのに、決してそれを許してくれない

そんなの、ズルいよ…………

「私はかぐや様と一緒にいたい!!従者としてではなく、かぐや様と友達になりたい!!」

「そう。それが、あなたの本心なのね」

「はい」

これが、私の気持ち

これで、本当に出しきった

だから、これから何を言われてもきつと、辛くても、満足できる

「じゃあ、今度は、私の気持ちを言うわね？」

「はい」

「今日、私はね?はじめての感情を持ったの」

はじめての感情……………?

「私ね。誰も、許したことがなかったの。だから、私にはわからないの

よ」

「なにがでしようか」

「ここまで言つて、まだわからない？ 私がわからないのは、他人の許しかたというもの」

……え？

それって、つまり

「誠、あなたならわかるかしら？」

「ん？俺に聞か。そうだな、人と状況によるけど俺だったらこう言うな。許す、とか、それに似た類いの言葉を」

「そう……。早坂」

「……………なんでしようか」

「今まで、気づいてあげられなくてごめんねえ」ポロポロ

え、どうして？

「か、かぐや様!？」

「辛かったでしょう？ 苦しかったでしょう？ それなのに、主人の私が気づいてあげられなくて本当にごめんねえ」ポロポロ

「かぐや様……………」

どうして、あなたが泣くんですか……………

泣くのは、私の筈なのに

「泣かないで下さい。私まで、泣いちゃうじゃないですか……………」ポロポロ

「だって、だってえ、私だつてずっと考えてたんだもん。いつか、早坂と友達になれたらいいのにつて」ポロポロ

え……………？

「本当に？」

「うん。だから、これからは従者としてではなく、私のたった1人の親友、早坂愛として、私の近くに来てくれない？」

「うん……、うんっ!! わかった。近くにいる。友達として、近くにいる!!」

なんだ、こうなるならもつと早くに話せばよかった

やっぱり私は、出会いに恵まれてるなあ……………

《それから、二人が、今までの事、辛かった事そして、これからの事を話し合った後》

「あれ、そういえば誠は？」

「言われてみれば、どこに行っただんでしよう？」

あ、連絡がきてる

「かぐや様、これ見てください」

「もうっ、愛さん違うでしょ？」

「えへへ、そうだね。かぐや、これ見て」

『たぶん、かぐや嬢と見てるんだろう？とりあえず、和解おめでとう。

これからは抱え込まず友達として相談しろよ？俺には、彼氏としてもうちよつと頼ってくるといいかな？まあ、あとは二人でじっくり話
な』

やっぱり、かつこいいや

「フフツ」

「どうかした？かぐや」

「いや、今のあなた、幸せ満天って顔してるから、嬉しくって。つい」

そっか、私にも、そんな顔、できたんだ

幸せ満天、か当たり前でしょ？だって、

「私は、こんなに素敵な親友と彼氏にずっと昔から出会えてたんだもん！それに気づけたのが嬉しくて、幸せなの！！」

従者二人は見守りたい

はあ……………

あれから3日たつんだけどさ？

早坂s、愛さんが変わりすぎてハッキリ言っただけ怖いです…………

だって、まさか月曜日にあんなことすると思わないじゃないですか
それに、珍しい人が絡んで来ましたし……………

《前話の次の日、学校にて》

いやあ、一悶着あったのかも知れないけど

かぐや嬢と愛が無事に仲良くなって、友達になれて良かった

もう、心配しすぎておかしくなりそうだったんだから!!

ささ、教室いきましょ

「ちよつと、待ちなさいよ」

「ん？自分ですか？」

「そうよ。あんたよ、崇宮」

あらら、なんか珍しい人が来たな

まさか、接触してくるとはね

「四条さん？どうかしましたか？」

「あんたら崇宮に確認したいことがあるのよ」

「ほーん。ちよつと場所、変えましようか」

「ここは基本誰も来ないから大丈夫よ」

さいですか

んじや、さつさと話してもらって、教室行くかな

「それで？話とは？」

「あんたら、ホントにウチにつく気はないわけ？あんたら用の席、まだ
残ってるのよ？」

「それなら、俺じやなく父さんに言いな。俺は決定権もなければ関与
もしてないんだから」

「あんたらはあの時、こっち側だったじゃない!!どうして、あの腐った
家系についてるのよ!!」

四条家も、どうしてウチなんか取り込みたいのかね？

まあ、確かに資産だけで言えば四宮に匹敵するレベルで今は稼いでるけど、それは四宮の援助ありきの話だ

そこまで重要には見えないかな？

「勘違いすんなよ？」

「どういう事よ」

「父さん達がどうか知らんが。俺はあの家に仕えてるんじゃない、そこを勘違いしてもらっちゃ困るぜ？」

「どういう意味よ」

「それは自分で考えな。でも、俺はあんたらには感謝してるよ。お陰で父さんと母さんに会える時間も増えたからな」

ホント、あの家が最初から吸収するつもりでかかってくれて良かった

今の四宮なら潰しにかかったと思うから……

正直、感謝しかないよ

「だったら……!!」

「でも、俺の主は四宮かぐやただ一人だ。悪いな、眞妃嬢」

「待ちなさい!!誠!!」

はあ、あの人は苦手だ……

かぐや嬢と同じ感じがするから、要望を断りにくいんだよなあ……

でも、四宮と四条仲良くテーブルを囲んで飯を食える日が来るかな

かぐや嬢と眞妃嬢が当主になったら、だがね

そんなときは、全力で仲立ちをするかな

「そうなるよ、崇宮の当主になるのが動きやすいんだろ。つと、そんなことよりさっさと教室行こ」

《〜崇宮君、移動中〜》

「崇宮君おはよー」

「おはようございます」

かぐや嬢、今日は遅いな

いつもならもう来てる筈なのに

昨日の事、聞きたかつたんだけどな？

それは今晚でもいつか

「ん？なんか外がうるさいですね？」

なにかあったのか？

「なにかあったんだ」ガラガラ

「みなさん、おはようございます」

「み、皆、その、おはよう……／＼／＼」

ああ、良かった……

もう、仮面は要らないんだな……

良かった、ホントに良かった……

「愛？もしかして、そっちが素だったりする感じ？」

「そうだよ。皆もごめんね、今まで騙してて」

「何言ってるの？何で謝る必要があるの？」

「え、だって私は、皆を騙して……」

「いやいや、人は猫被る事の1つや2つあるって。それをやめたってことは、それだけ仲良くなったって事でしょ？ね、皆もそう思わない？」

「そうだよな」

「そうそう」

「うんうん」

ほれみろ、愛

お前はお前が思ってる以上に大事にされてるじゃない

俺が言えたことじゃないけど……

そもそも、皆に謝らなくてもいいと思うしな

考えすぎなんだよ、全く

「実咲……。うん、うん！ありがとう！皆」

「で、愛はこれで終了だけど？」

「はい？どういう事ですか？鷹村さん？皆さんも、どうして自分を見てらっしゃるんです？」

「いやあね？崇宮君。愛が急にこうなったのって、確実に君が関わってるよね？だから、洗いざらい吐いてもらおうと思って」

「却下します!!」

残念でした〜!!

俺は、ドアに近い席なんだよ、逃げr……っ!!

「崇宮、逃がさん」

「うえ、マジですか……………」

「どう?吐く気になった?」

まさか、現役の金持ちor天才高校生達がここまで人の恋愛話に興味を持つとは

想定外だよ、全く!!

「出来れば、ご遠慮願いたいんですけど……………」

「待って!!」

「ん?愛、どつたの?」

「誠君は関係ないの。私が自分で決めたの、もうギャルのふりするのが疲れただけ、だから誠君は関係ないの」

愛……………

「つて、言ってるけど?どうなの?」

「確かにほとんど関係ないですけど、素の方がいい、とは言いましたよ?愛に……………。あっ」

「んん〜?いま、愛って呼んだよね?しかも、呼び慣れたる感じだったし」

しまった!!

これはまた別の案件を作ってしまった……………

あ〜、やらかした〜!!

「者ども、崇宮を捕獲じゃ〜!!」

「お〜!!」

「イヤアアアアアアアアア!」

《〜回想終了〜》

あれは、きつかった……………

うん、きつかった、ホントに

でも、お陰で愛の呼び方に気をつけなくていいからいいんだけどさ

?

それはさておき……

「四宮さん？」

「かぐや？」

「……………何よ」

「そんなになるなら自分から行けば？」

「ば……馬鹿なことを言わないで、二人とも!!」

「えー……………」

バカなことって言われましても…………

「この間、あんな告白紛いの事を言ってしまったのよ？」

「告白紛いって、何？」

「あー、あれだね。会長君に、『会長は会長がいい』って言ったの。この人」

めっちゃ似てんな、かぐや嬢のモノマネ

でも、それは会いづらいの、か？

いや、でも会いたいなら会いに行くしかなくね？

「それに、ここで私から会いに行ったら。まるで、私が会長に会えず寂しいみたいじゃないの／＼／＼」

「もう思うように生きれば？めんどくさい」

「愛さん？日曜日から、私に少し辛辣過ぎない？」

「これが私の素だよ？ほら、もう従者の前に友達でしょ？だから、文句の1つ位いいでしょ？」

「うぐっ、そ、それはそうだけど……………」チラッ

いや、何でこつちに視線送るんすか…………

何ですか？愛がそうだったのは、従者の前に友達とか言ったあなたの責任でしようよ？

あー、でも、助け船出すか

「まあまあ、愛もそんなこと言わないで、ね？協力してあげましょう？」

「別に、協力がイヤな訳じゃないからいいけどさ。それで？なんか策あるの？」

「それは……………。あつ、むしろ会長の方が寂しがってるんじゃないか

しら？もしかすると、放課後に告白しに来る可能性も……」

「はあ」

「もうっ!!なんなのよ!!二人とも」

「だいぶ前からだけど、俺の主はダメかもしれない……」

「あ、私ちよつとお手洗い行つてきます」

「お気をつけて」

「ええ、どうぞ」

愛が、居なくなった、な

「で、誠（四宮さん）？応援演説はやる気あるんですか？」

「はい？」

「あら、かぶっちゃった」

俺から、話していいんだよな？これ

「もちろん、頼まれれば全力で演説させてもらいますけど、問題でも？」

「総務のあなたが、この1年間の会長の成果をきっちり余すことなく伝えられると、本気で思っているの？」

え、なに、つまり？あなたから、私を選ぶよう会長に言いなさいってこと？

えー、でもさ？

「その言葉、そっくりそのままお返しますけど」

かぐや嬢、会長と別件の仕事しか基本見てないよね？

だったら、いつも連絡して相談に乗ってる俺の方が適任じゃね？

「ご覧になって、四宮さんと崇宮君が応援演説で激突してますよ」ヒソヒソ

「崇宮さんは、会長と小学校高学年からの付き合いだっけってましたから、譲れない物があるのかも知れませんか？」ヒソヒソ

「副会長も、1年間会長の隣で支えてきた意地があるんだよ、きつと」ヒソヒソ

なんか、外野がヒソヒソうるさいな

「あら、随分な物言いね？もう一度はつきり言ってもらえる？」

「いや、ですかr「へいへい!!」愛？」

あらまあ、すごい悪い顔をしてらっしやる
今まで相当たまつてらっしやったようで

「かくぐやく☆」

「どうかしました?」

「会長が大事な話があるってー!!」

「かつ会長!」

「噂をすればなんとやらですね」

あらら、俺フラれちまったな

いやあ、残念残念

「俺達のこれからについて話がある」

ん?

今、なにか決定的ななにかが足りなかったと思うんだけど、俺の勘
違いか?

「ここじゃなんだから放課後校舎裏に来てくれ」

んんん?

え、応援演説を頼むだけだよな?

え!? そうだよね!?

「あいつら、放課後よくイチャついてるし、そーゆー関係じゃないの?」

あの二人」

「そーなの? 崇宮君!!」

「いや、イチャイチャはしてませんから!」

眞妃嬢! あんた知らないでしょうよ!?

なんで口からでまかせ言いやがって!!

いや、イチャイチャはしてるけどさ……

「柏木さん、結構生徒会に顔出してるよね!? 実際どーなの!」

「んー、付き合っていないと思うよ?」

良かった、柏木さん

あんたは味方で

「今はまだ」

てめええええええ!!

やりやがったな、コラアアア!!

あゝあ、もういいや、俺しーらね

《そして、この噂が広まり拡散された結果!!》

「愛？」

「なに？誠君」

「なにか言い訳は？」

「プイツ」

こちら、そんなに可愛くそっぽ向いたっていきませんよ
全く、今までよっぽどたまってたんだな……

今日は、なにも言わないでおくか

それにしても――

「ちよつと、人来すぎじゃね？」

「これは、私も想定外だった」

「あんだだけ集まってるのに、ここには来ないんだな」

「みんな、少しでも近くで聞きたいんですよ。はい、誠君。これつけて」

「なんでイヤホン？」

「ここじゃ聞こえないでしょ？盗聴器つけてるから、これで聞こ？」

そんなんつけてたんだ……

全然知らなかった

「それにしても、みんなこういうの好きだねえ？」

「そりやそうでしょ。華の高校生なんだし。誠君は嫌い？」

「どっちかと言えば、嫌いかな。俺、茶化されるの好きじゃねえし」

「それは、わかる。実咲もしつこいんだよね」

わかるわゝ

すつごい事細かに聞いてくるんだよなあ……

話すまで逃がしてくれないし

「近づいてなにか言われたみたいですね？もう少し精度良くした方が
良かったかな」

「聞こえなくても何を言ったのかは想像つくけどな」

「そうだね」

「絶対告ってないよ、全く……」

崇宮誠は相談したい

今日は初めての美術だな
なにするんだろううな？

選んだは良いけど俺、絵は別に上手くないんだよなあ……

「誠君、どうかした？」

「いいえ、別に」

「そっか」

「あ、そうs「愛く!!」」

「実咲？」

「呼んでますし、行ってあげればどうです??」

「でも、誠君なにか話あるんじや」

「別に急用でもないから大丈夫。さ、行ってください」

「うん、そうする。ごめんね？」

「それじゃ、また後で」

「うん、またね」

あくあ、最近こんなものばっか。ホント、イヤになるよ

でも、こんな事考えててもしょうがないし、切り替え切り替え

さ、美術頑張るか!!

《その後、美術の授業が始まり》

「えー、今日は最初の授業なので。とりあえず遊び感覚で出席番号の近い人の似顔絵を描いてもらいます。遊び感覚なので他の人の絵を見に行ったり、話ながら描いてもらって結構ですよ」

出席番号……

あ、俺は翼君になるのか

ちょうど良かった

「翼君、今日はよろしくお願いします」

「固いって、もつとフランクにいきましようよ。崇宮さん」

「そうですか。それじゃ、よろしく。翼君」

「よろしくっす」

なんだこいつは!?

誰!?

ホントに翼君なの!?

落ち着け、一旦落ち着け

うん、御行から事情は聞いた

でも、ここまでとは……………

まあ、いいか

とりあえず、聞こ

「翼君、少し相談したいことが」

「ん?なんすか?」

「いえ、手を止めなくていいんです。書いている片手間でもいいので」

「そつすか。で、なんですか?」

「その、彼女との関係についてなんですが…………」

「へえ。意外つすね」

ん?何が?

「何がですか?」

「いや、崇宮さんってそういう悩みがないと思ってました」

「それは違いますよ。自分にも悩み位ありますよ」

「それで、悩みつて?」

あ、忘れるところだった

そうそう、それで話しかけたんだつた

「あー、その、彼女と親友の方の仲が最近更に深まりました……………」

「それで、あまり相手にされなくて寂しい、とかつすか?」

「まあ、そういう感じになりますね」

かぐや嬢と愛、ようやく隔たりがなくなつてすんごい仲良いから

なあ……………

やっと二人の願いが叶つたから、中々割つて入るのが申し訳なくて

「それなら、簡単でしょう」

「そうですか。して、どうするんですか?」

「その子と話してない時に話すんですよ」

うゝむ、確かにその通りなんだけど……………

「それだと、夜になつてしまつて。夜更かしさせてしまうのも申し訳

なくて」

「それでも、向こうも話したいと思ってるんじゃないですか？」

「そうですかね？」

「そういうもんですよ」

「なら、今夜にでも少し頑張ってみますか」

「その方が良いっすよ、絶対。っと、こんな感じですかね」

ありや、意外と早く完成したんだな

俺も、もうちよつとで完成だけでも

「ああ、すみません。もう少しで完成するので待ってください」

「全然問題ないんで、ゆっくりやってください」

と、言われても申し訳ないんだよね

ちよつと、急いで描こ

《〜崇宮君、絵描き中〜》

ふいふ、意外といい感じなんじゃね？

「お待たせしました。もう動いてもらって大丈夫ですよ」

「あ、そつすか。それじゃ、俺の絵見てくださいよ。俺も崇宮さんの

絵、見るんで」

見せ合いつこつてことか

いいね、見てみるか

「なるほど、俺ってこう見えてるのか〜」

「そうですね。自分にはこう見えてますね」

それなりにちゃんと描いたつもりなんだが、もしかしてここがイヤ

とかあるのか？

「なにか、おかしな点とかありましたか？」

「いやいや、全然!!ただ、俺ってこんななんだ〜、って思っただけっ

す。崇宮さんはどうですか？中々うまくできてると思ってるんです

けど」

「自分もほとんど翼君と同じ感想ですよ。自分はこういう風に見えて

るんだ〜、といった感じですね」

正直、これ以外の感想が見当たらない

だって自分の顔なんて毎日鏡で見てるけどわっかんねえし

まあ、とりあえず終わったわけだし、フラフラするか

「まあ、終わったわけですし。自分は皆さんの作品でも見に行きますか」

「俺は渚の作品見に行きますかね？それじゃ」

「そうですか、それじゃ」

さて、俺は御行とかぐや嬢の様子でも見に行くかな

《〜崇宮君、移動中〜》

お、御行のとなりは柏木さんか

「ん、誠か。どうした？」

「いえ、四宮さんをうまく描けてるなあ、と」

「何を言うか!!」

「ん？」

「これではダメだ!!四宮の魅力を完全に引き出せていない!!」

「んん？」

「くっ……。やはり実物に及ばん……………!!」

んんんんんんんんんん???

「崇宮さん!!」

「ん、ああ、柏木さんですか。どうかしましたか？」

「あの人をどうにかしてください!!」

「え？」

「さっきからずっと!!ずっとこっちが恥ずかしくなることを言い続けてるんですよ!?!?!」

あー、あれずつとやってる感じなのか

そりゃ辛いだろうな

「すいません。うちのバカが」

「ホントですよ!!もう勘弁して下さい!!」

「あはははは……………」

いやもうホントに、ご迷惑をおかけしました

でもあの二人、ずつとあんな感じなんだよなあ…………

付き合ってる柏木さんには辛いだろうな

でも、申し訳ないけど、俺はこれ以上苦勞を増やしたくないから、頑

張ってください

「柏木さん、あれはもうダメです。だからほつといてあげてください」

「あ……。崇宮さんも苦労されてるんですね」

「そうなんですよ……」

「あつ!!私で良けれb「渚」翼?」

「お二人の邪魔をしてはいけませんので、自分はこれで」

「あ、はい」

何を言おうとしたのかはわからんけど

彼氏彼女の話の邪魔をするのはいかな

さして、かぐや嬢はどんな感じかな?

「四宮さん……。これは、一体?」

「一体って、会長に決まってるじゃないですか」

「は?」

うっそだろ、おい

これが御行?

全然違うじゃん!!

「これもダメね。まだかつこよすぎるわ……」

「いやいやいや、四宮さん?」

「なんです?誠、どうかしたんですか?」

「どうしたもこうしたもありませんよ!!ありのままの会長を書けば良いですよ!?!どうして、そんな化け物が生まれるんですか!?!」

「化け物とは失礼ですね。かつこいいじやありませんか」

んんんんんんんん?!!

「今、なんと?」

「だから、かつこいいじやありませんか」

うそだろ?!

「これが、御行……?」

いや、違うよね?

「あのですね、四宮さん?」

「なんですか?」

「こういうのはありのまま見たものを描くんですよ?かつこよすぎで

良いじゃないですか。そう見えてるんですから」

「ですが……………」

「ほら、さっさと描き直して。会長の嬉しそうな顔、見たくないんですか?」

「そ、そうよね!!私の描きたい物を描けば良いのよね!?ね?ね?」

「そうですよ。全く……………」

ホントに、めんどくさい人ですね

自分の描きたいように描けっつての

どうして、素直になれないのかね?

はあ、今の俺も、人の事、言えねえか……………」

愛と話したいのに、話してないもんなく

俺も、素直になるべきだな……………」

「はあ、どうしたもんかね?」

「どうかしたんですか?」

「ん?いやあ、素直にならなく早く座れ!!」

「残念でした。折角、崇宮さんの恋の悩みを聞けると思ったのに」

「げ、藤原だったんですか。気づきませんでした」

「ブーツとしてましたからね。仕方ないですよ。それじゃ」ぴゅ

マジでビビったあ……………」

全然、誰かが聞いているとか考えてなかった……………」

あつぶねえ、誰に聞かれても面倒だがよりにもよって藤原に聞かれ
ちまうと一番面倒になりそうだからな

藤原には申し訳ないけど

「あ、そうそう。崇宮さん、いつでも相談に乗りますよ?」

「どうしてです?」

「いやあ、崇宮さんには色々お世話になったつすから」

「そうですか。頼りにさせてもらいます」

「任せてください。俺のできる範囲なら協力させてもらいますから
!!」

翼君、いい子だなあ……………」

頼りにさせてもらおうと

俺の周りって、いい人多いな、嬉しいことだな

「今日の授業はここまで。それじゃ、また次の授業で」

「ふいふ、やっと終わったつすね」

「そうですね。疲れました、全く」

「それじゃ。また次の授業で」

「はい、またよろしく」

翼君の言う通り、夜に電話、してみるか

《〜〜そうして、夜になった〜》

さて、そろそろかぐや嬢も寝だした時間だろう

……………掛けて良いのか？ホントに

めんどくさいって思われたりするんじゃない？

また、あの時みたいにはなりたくない

「やめておくべきだな」

「ニヤ〜!!」

「うおわっ!!」

あ、クロこら、掛かっちゃまってるじゃねえか

あゝ、どうしよ!!?どうしよ!!?

迷惑だよな?迷惑ですよね!!

『もしもし?誠君?』

「あ、愛か?悪いなこんな時間に、迷惑だよな…………」

『そうでもないけど?どうかした?』

「いや、何でもないんだ。ただ、間違いで掛けただけだから」

『嘘はダメだよ?』

え、

『だって、通話を間違えるなんて普通ないでしょ。何かあるんでしょ

?隠し事しないですよ』

「いや、その、ええつと……………」

『何?何かやましい事でもあるの?』

「それは、ないんですけど、ね?」

『ね?じゃわからない。ハッキリ言って』

ヤバイ、絶対マジギレしてるよこれ

電話越しでもわかるよ、めっちゃ怖い

「わかった。話すよ」

『うん、どうぞ』

《くく崇宮君、事情説明中くく》

『それで掛けてきた、と』

『そういうことになる』

『最近絡めなかったのが寂しかったと』

『そうだよ』

『でも、かぐやや実咲達と私の仲に割って入るのは申し訳なかった。ってことで良いのかな?』

『そうですよ』

『つまり、かぐやや実咲達に嫉妬してたってこと?』

『そうだよ!! 悪いか? 女に嫉妬して。悪いか? 彼女にもっと俺を話したいって思っ。悪いか? 彼女に俺だけを見てほしいって思っ、もっと構ってほしいって思っ!!』

自分でもわかってんだよ!!

俺がどうしようもなく、独占欲が強くて、愛が重くて、構ってちゃんだってことは!!

でも、どうしようもないんだよ

どう頑張っても、出てくるんだよ

『誠君……。やっと話してくれたく』

「は?」

なに言ってんだ?

『だって、最近全然話せてなかったし。ずっと悩んだ顔ばかりしてたから心配でさ?』

「そうだったか?」

『そうだよ』

そんなに顔に出ってたのかよ

全然出てないと思っってたんですけど

『でも、そっか。嫉妬してたんだく』

「う、うっせえな。俺だって、愛ともっと話したいんだよ。でも、学校

じやいつも誰かと話してて、今までなら別邸で話せてたけどかぐや嬢と仲良くなつてからそんな時間もねえし／＼／＼

『誠君って意外と構ってちゃん?』

「うるっせえ。悪いかよ?」

『全然。寧ろばっちこいだよ?』

ほ、ほんとか?

『だって、私だって嫉妬深いもん。だから別に構ってちやんだからって悪いことはないよ』

「そ、そうかよ。ありがとな」

『それに、私だって誠君ともっと話したかったし』ボソボソ

「それは嬉しい知らせだな」

『うえっ!?今の聞こえてたの!?!』

俺は難聴系じゃないっての

むしろ、聴力良い方だし

「ハハッ」

『ん?どうかした?』

「いやあ、悩んでたのがバカみたいだ。最初っからこうなるんだつたらもつと早く電話してりや良かった」

『そうだね。私も電話してれば良かった』

はあく、全く

『バツカみたい』

あ、ハモった

「ハモったな」

『ハモったね』

「俺たちって似た者同士かもな」

『今更気づいたの?私やかぐやはずっと前から思ってたよ?』

マジか……

気づいてないのって俺だけだったのか?

うっわ、なにそれ、恥ずかしいんだけど

「なあ、愛」

『ん、どうしたの?』

「その、迷惑じゃなければいいんだけどさ。これから、夜に通話、しないか？」

『いいよ。ちやうど私も誘おうとしてたし』

「そっか、ありがとな」

『さて、それじゃ。一杯お話ししよっか？』

「そうだな」

ほんっと、俺の周りにはいい人しかないよ

そして、俺の側にいてくれる人はとっても素敵な俺の彼女だ

大好きだぜ、愛

崇宮誠はやめさせたい

今日は♪愛と一緒に♪

歩きで登く校♪

「誠君、すごい嬉しそうだね?」

「なんだよ。愛は嬉しくないってか?」

「そんなことないよ。私もすつごく嬉しい♪」

それは良かった

それにしても……

「ちよつと引つ付きすぎじゃね?」

「ん♪そんなことないよ?」

いや、絶対引つ付きすぎだつて

普通手に絡みつかんでしよう!?

それに、胸が当たってるんですよ!?!?／／／

「照れてるでしょ」

「そんなことないよ?」

「顔、真っ赤だよ?」

「うそお!?!」

「嘘だよ。でも、照れてたんだね?やっぱり」

なんだろう……

すつげえ恥ずかしい／／／

「それにしても、かぐや嬢の推定異常性癖は大丈夫なのか?」

「あ、無理やり話を反らした」

「悪いか?」

「ぜんぜん♪」

「だろ?で、どうなんだ?」

「ん♪、ダメなんじゃない?」

ダメなんじゃない?って……

「それって、どっちの意味で?」

「両方だよ?あれはもう手遅れで私たちにはどうしようもないし、正直関わりたくない」

「そうは言ってもなあ……………」

関わりたくないのはわかるけど

あれって放置していいものなのか？

だって、あれって露見したらヤバイでしょ、絶対

でも、どうにもできないしなあ……………」

「とりあえず、かぐやに会長以外の好きな人は作らせなかつたらいいだけだよ」

「なんで？」

「かぐやって多分好きな人に引っぱり張られるタイプだよ？だから、これ以上癖を増やさないようにするにはそれが一番でしょ」

「そうだなあ……………」 あれはもう、どうしようもないから再発を防ぐしか方法はない、かあ」

つまり、このまま御行とくっ付けるしかないってことか

それが一番早いし現実的っぽいなあ

あ、そうそう

「愛」

「なに〜？」

「これからちよつとの間忙しくなるから、通話とかできるかわからん」
「そういえば、誠君って選挙の手伝いも頼まれてるんだっけ？」

「一応な」

去年の選挙手伝って、誘われたんだよな

そしたら今年もよろしくって……………」

元々、やってみたかったからやったけどさ？

「何かあるの？」

「ほら、前生徒会の人間が管理委員の手伝いってのは怪しいと思うんだよなあ、って」

「そう言われてみればそうだね」

「だろ？だから、今からでも辞退するべきなんだろうか？っていう」
「いいんじゃない？このままで」

なんで？

絶対、忖度してるとか不正してるとか言われるからやめるべきだろ

？御行の為に

「だって、誠君って先生からも、生徒からも信頼されてるから大丈夫だよ。誰もそんなこと考えないよ」

「いや、少数でもそういう意見が出るのは確実なんだよ。御行が混院だから生徒会長はイヤだっていう人間が一定数いるからな」

御行を落とす隙を作る事になるのはやめるべきなんだがな？

かといって、頼まれたことを断るのはできないしなあ

「そうか。演説にだけ関わればいいのか」

「どういうこと？」

「管理委員会の買収はハッキリいって完了してるんだ。もし、御行がギリギリ負けそうなら、勝たせろってな」

「そんなことしてたんだ……」

「かぐや嬢の命令でな」

「でも、だったらどうして確実に勝たせないんですか？」

そんなことか？

そりや、だって

「他の生徒に大多数が入れていて、それでも御行が受かるってのはおかしい話だし。それにかぐや嬢にはできるだけ勝てるようにしろって言われたからな」

「それ、後々かぐやに怒られない？ 負けた場合」

「そのときは、御行との接点を提供すれば手のひら返すだろ」

「そんな、かぐやがチョロいみたいな言い方……」

え、いやだって「実際チョロいだろ、あれ」

「あれって言うのは良くないと思うよ？」

「あーら、口に出ってたか？」

「実際って所からね」

あつちやく

近くに誰か居れば厄介な事声に出してたなあ

「あ、そうそう。誠君」

「なんだ？」

「この選挙が無事に終わったら、デート行こうね」

「おう。すまないな、生徒会が終わったのに忙しくて」

「全然大丈夫」

ホントに申し訳ない

まさか、御行がかぐや嬢に言われて出馬を決めるとは思わなかった
あいつ、ホント単純過ぎるだろ!!

「あくあ、優秀なやつがもう一人でも増えれば俺ももうちよつと楽で
きると思うんだがなあ〜」

「それって、ありえる話なの?」

「いんや。今のところ増やすって話は聞いてないな」

増えてくれれば、俺もちよつとはサボれるかなあ? って思ったが、
無理だな

かぐや嬢の手伝いしないといけないし

そうなつてくると早く二人をくっ付けるのが一番手っ取り早いの
かな?

「誠君?」

「ん? どうかしたか?」

「そろそろ、他の生徒も見えてくるよ?」

「そうでしたか。ありがとうございます、愛」

「誠君も素で話せばいいのに……………」

んなこと言われてもなあ〜

もうこれが俺の学校での素になっちゃってるし
どうしようもないからなあ

「それはまた考えておきますよ。さ、早く学校に行きましょう?」

「そうだね。早く行こつ!! 誠君」タツタツタツタ

「あつ、待って。走らないでください!!」

全く、愛と付き合ってから毎日色んな発見があつて楽しいな
《〜それから、いつも通りに授業が終わる〜》

ふう〜、授業終わり〜

あ〜、今日も疲れた〜

ん? か御行達と……………伊井野さん、だっけ?
なにしてんの? あれ

「何してるんですか？皆s

「私が生徒会長になった暁には、藤原先輩に副会長になって頂けませんか!!」

ん？」

「えー！ー！？」

なに言ってるんだ？この子

「優、この人が……」

「そうです。こいつが伊井野ミコです」

「そうですか」

うーん、とりあえず止めとくか

「伊井野さん？悪いことは言いませんから。その人を副会長はやめた方がいいと思いますよ？」

「崇宮さんまでっ!？」

「崇、宮、さん？」ピクッ

ん？俺この子と関わりないはずなんだけど

なんで反応したんだ？

「あなたが崇宮誠先輩ですか……」

「ええ。自分が崇宮ですけど？」

「先輩、何かしたんですか？」

「いや、自分は基本的になにもしていませんよ？」

「なにもしてなくないですよ!!」

ん？

「先輩は、1年の時に中等部の校舎でなにしたか覚えてないんですか!？」

「あの事なら気にしてませんが？」

「それで、現1年からおかしなやつ扱いですよ!?!なのに、どうして気にしないんですか!!」

正義感が強い人なんだな伊井野ミコさん

でも、それは俺には必要のないことなんだよ

「では、その方達は自分に怯えてるといふ事でしょう?」

「どうしてそうなるんですか」

「簡単ですよ。自分はそんな話一切聞きません。つまり、でかい声で言えないんですよ。報復になにをされるか、なにを言われるか怖いから。これって、怯えてるに入りませんか？」

「確かに入りますけど。それでも!!おかしいです!!崇宮先輩はなにも悪いことはしてないんですよ!？」

「それは、君の主観で見た話だ。客観的に見れば、自分は物をキレて破壊した。これは理由がどうあれ悪事だ」

「っ!!ですが!!」

いい加減にしてくれ

鬱陶しいぞ!!

「本人が構わないと言っていることに口を出すな。お前にそこまでされる義理はない。してほしかつたら自分で動いてる」

「で、でm」でもだつてもねえ。いいか?忠告だ。自分の正義を貫くのはおおいに結構。だが、本気で嫌がつてる奴にそれを押し付けるのはやめるべきだ。いつか身を滅ぼす」

ちよつと言い過ぎたか?

でも、この子は正義感が強すぎる

俺には眩しすぎる

俺よりもつと暗いところに生きてる連中にこんなこと言えば、確実に消される

だから、悪く思うなよ。伊井野さん

「ぶ」忠告感謝します。けど、だからと言って私はこの自分のあり方を変えるつもりはありません!!」

「なら、好きなようにすると良い。君のその信念が早死にしないことを祈るよ。それじゃ、皆さん。自分はこれで」

「お、おう。また明日」

「さ、さようなら」

「また明日っすね。先輩」

さて、さっさと帰ろ

《~~~~下校中~~~~》

あゝあ、柄にもなく説教しちやつたなあ……

でも、今日の絡みでよくわかった

「ん？電話？愛からだ。もしもし？」

『もしもし、誠君？ちよつと頼みたいことが』

「伊井野の件か？」

『そう。さっすが崇宮君。それでその伊井野さんのことなんだけど』

「その事ならたぶん、黒い噂は出てこないだろうよ」

『……………どうしてですか？』

久しぶりだな。お仕事モード

相変わらず迫力があつて怖いねえ……………

「今さっき、件の伊井野ミコと話した」

『それで？』

「ありや、世にも珍しい真つ白な人間だよ。両親ともに、な」

『そうですか……………』

「それでも、こっちでも情報を漁ってはみる。愛はどっち方面を今やってるんだ？」

『かぐやの命令で今は彼女の親の黒い部分を』

「ん、了解。俺は本人を調べてみる」

『ごめんね』

「気にすんなよ。俺は生徒会が終わっても、時間を作れてないんだ。これくらいのはさせてくれ」

『そういつてもらえると助かります。それじゃ、頼みますよ』

「任せときな」

さて、と

彼女、たぶんなにも出てこないんだろうなあ……………

でも、不思議だな

あれだけ自分の意見をはっきり言えれば、一定数の固定票は確保できるとは思うが……………

その辺も含めて調査してみるか

崇宮誠は手助けしたい

《ある日の生徒会室にて》

「あ、あの……。お、俺、選挙、じ、辞退するから……」

「いやだわ。勘違いなさらないで？そんなことを強いてる風に聞こえましたか？」

「私は、貴方の味方ですよ？」

「そ、それじゃあ、四宮さん、俺は、これで」

「あら、もう少しゆっくりしていけば良いのに……」

「お、俺今日、じゅ、塾、あるから、も、もうこんなじかんだし……」

「あら、それはいけません。塾に遅れないように気をつけて帰ってくださいね？」

「じゃ、じゃあ、俺は、これで……」

「誠、これはどう見ますか？」

「やめるだろ、あれ」

「そうですか……。それにしても、意外ですね」

ん、意外？

「てつきり、会長に正々堂々勝って欲しいと言って止めてくると思っていたのだけれど？」

「じゃあ、あんたは俺の腹のそこが見えちやいな」

「その様ですね」

あんたの言うように俺は御行に勝っては欲しいさ

ただ、この程度の脅しに屈する様な人間に御行とやり合う資格なんざねえよ

それに、かぐや嬢の言うほど俺は綺麗な人間じゃないよ

「じゃあ、あなたの腹の中、見せていただけませんか？」

「少なくとも、あんたに牙を向ける事はしねえから安心しな」

「……その言葉、信じて良いんですね？」

「あんたの料理人になったときにも言ったが、俺はかぐや嬢の幸せの為に頑張る。だから、牙を向ける理由がないよ」

「そうだと良いのだけれど……」

まあ、少なくとも今の所はないな

それにこのまま行くと敵対する事はないし

「あ、そうだ。かぐや嬢」

「なんですか？」

「伊井野の件だが」

「どうでした？何かゆすれる物はありましたか？」

「真っ白だった。気持ちの悪い程に清廉潔白だよ、あいつ」

正直、期待してなかったけど

ここまで善人だと気持ち悪い

ただ、彼女は受からないだろうけど……

かぐや嬢に警戒させるに越した事はないからな

「そうでしたか……。」

「愛の方からの報告は？」

「明日辺りに結果が出るらしいわ」

「そっか」

まあ、シロだろうな……

これで親が真っ黒何て事はないだろ

「ほいじゃ、帰りますか。かぐや嬢」

「そうね。帰りましょうか、誠」

《〜〜次の日〜〜》

「あれ〜？崇宮君一人？」

「どうかしたんですか？鷹村さん」

「いやあ、愛が居ないからさ、てつきり此処かと」

「愛なら、四宮さんと二人で食べてくる〜。って言って何処かに行き

ましたよ?。」

「そっか〜」

「そうですよ」

ムグムグだから、俺は今日は寂しくボツチ飯ですよ〜

ん、この卵焼き今日はちよつと味が薄いな

全く、こういうところ味見で気づけなかったものか

ん、この鯖おいしい!!

やっぱり、俺の味付けって天才か、なんてな……………
それにしても……………

「いつまでそこに居るんですか？」

「ん？あたしがどこにいてもあたしの勝手でしょ？」

「まあ、そうですが……。話したいことがあるなら、聞きますけど？」

「お、さっすが。よくわかったね」

白々しい、横目でチラチラこっちを観察してたくせに

それにスマホ触ってるふりしてロック画面のままなの気づいてる
んですけど？

「それで、何が聞きたいんですか？」

「いやあ、野暮かも知れないけどさ？そのネックレスどうしたのか
なく、って」

「これですか？まあ、色々ありまして……………」

「それは君の独占欲の象徴でしょ？」

うつ……………

痛いところをついてくるな、この人

やっぱり、内面を読まれるってのはいい気分じゃねえな

「やっぱり、あなたみたいな人は苦手ですよ」

「だろうね。だから、今まで極力関わらないようにしてた、でしょ？」

「正解ですよ。全く、思考が読めるなんて難儀な人ですね」

「どうして？」

どうしてって、そりやお前

「オンオフが効くならそりや便利な能力ですよ。ただ、無意識的に行
われているその行為は人にとって地獄以外の何物でもないでしょう
？」

「そうだね」

それはつまり、人の悪意を受信してしまうこととほぼ同義だからな

鷹村、今まで辛かったろうな

「だったらどうして、最近は関わるようになったの？」

「まあ、つまるところ。そんな厄介な力を友達の為に使った鷹村さん
はたぶんきつといい人だって思ったんですよ」

「最初は警戒してたんだ」

そりゃ、下手に思考を読まれて誘導されるなんざたまつたもんじやないからな

「そうなりますね。でも、別に100%読まれる訳じゃないですし」

「そんなことできたらもつと上手い生き方するよ」

ケラケラ笑いながら言うか？それ

いや、でも、それじゃあ、今まであんな話するか？

ちよつとカマかけてみるか

「……………今までそうしてきたから、それが嫌になってそんなナリをしてると思つてましたよ」

「え、え？」

「当たつてるでしょう？」

「え、いや、でも、なんで」

「顔と表情、その他もろもろ見たらわかるよ」

まあ、こういうのしつかりしないと天才二名の恋愛頭脳戦（笑）に付き合えないし、その他にも、面倒なお家関係でも使えるし

「だから、私が気にする必要ないってこと？」

「そういうことですよ。心を読むなんて、大なり小なりできるんだよ。それを気にして心を閉ざす必要ないって」

「崇宮君に何がわかるの？君のそれは読もうとしてるからできるんですよ？私のとは違うじゃん」

あゝ、全く、類は友をよぶって言うのか？

どうしてこうも闇を抱えてる人が俺の周りには多いんだよ……………俺つてそんなに闇抱えてるか？

それとも、お嬢様ですお坊ちゃんってこんなもんなのか？

「オンオフなんて、そんな器用なことできませんよ」

「だとしても、読もうとして習得した崇宮君にはわかんないよ。でも、最近はこの才能があつて良かったつて思えるから良いんだけどね」

「それは本心でしょう？」

「それはどうかなく？」

「へえ」

「っ!?!」

え、愛!?

「あ、愛、あ、あのね?」

「二人とも、楽しそうに話してるね? 彼女であり、親友である私を差し置いて」

「愛、これはですね……………」

ヤバイツテ、絶対キレてるって

どど、どうすれば……………」

「なーんてね☆」

「へ?」

もしかして、騙された!?

「んも〜。いくら私が嫉妬深いからって彼氏が女子と話してるだけで機嫌悪くなったりしないよ〜」

「ほ、ほんとに?」

「ホントだよ〜☆えへへ、上手かったでしょ?」

うわ〜、綺麗に騙された〜……………」

なんかすっげえ悔しい

「そっか。それじゃ、二人の邪魔しちや悪いから私はこれで〜」

「ん、じゃあね〜」

「それでは、また」

なるほどね

愛のおかげ、ってことね

「やるじゃん」 ナデナデ

「ん〜♪何〜?」

「なんでもないよ」

あんまり撫でるのも髪型が崩れるからダメだな

「さて、授業の準備しますか」 スツ

「んう……………」

なに!?! その不満そうな目は!?!

もつと撫でろと!?!

やだよ!! 周りの目が怖いもん!!

「あ、そうそう。誠君？」

「どうかしました？」

「かぐやが放課後、生徒会室に、だってさ」

「あいよ。了解」

今日は伊井野かな？

やれるかな？

さて、直接は顔を合わせませんが、見せてもらおうかね？

彼女、信念を曲げないそうだし

「何か勝算があるのか？かぐや嬢」

《その後、放課後の生徒会室にて》

「んじや、かぐや嬢。俺は何もできないけど。ま、頑張れな」

「そうですね。伊井野さんにあまり勝算はないですけど、切り口がない訳じゃないので」

でも、なんで俺がここにいる必要があるんだ？

「かぐや嬢、どうして俺がここにいる意味が？」

「私の護衛ですよ？」

「あー、そういう」

もし仮にキレて襲って来たときの為ってことね

なるほど、了解

「さ、そろそろ伊井野さんが来ますから。隠れてください」

「はいよ〜」

はあ、外は見えないし声は聞こえづらいなあ…………

暇だし、外の声は愛から借りた盗聴器で聞こえるし、愛とLONEでもするか

『愛〜、暇か？』

『あれ？誠君、かぐやと生徒会室じゃ？』

『なんか、護衛だけでいいから隠れろって』

『それで暇なんだ』

『うん。くっそ暇。だって、聞き耳たててなくても愛がくれた盗聴器で聞こえるし』

『あ、使ってくれてるんだ』

『早速重宝してるよ。ありがと』

『えっへへ』

文面だけなのに癒されるな〜

と、かぐや嬢の方は〜……………

ん〜、何々

「あなたと白銀会長……………、本っ当にお似合いですね!!」

「へ!?!お似合い……………?」

あ、終わった

『愛』

『どうかした?』

『次の選挙、伊井野と御行の二人になりそうだわ』

『あく、なんかアクション?』

『伊井野が地雷を連爆してる』

『ちよつと待って、それってかぐやが相当ヤバイんじゃないの?』

あ、考えてみれば

これでやらかしたら色々終わるな

最悪、盗聴器につけた連絡機能使うか

「で、かぐや嬢と伊井野はどうなってる?」

「夜は不純異性交遊を取り締まりました!!」

「あーっ!!」

あ、かぐや嬢が軌道修正した

「藤原先輩が副会長ならきつとできます!!」

「え、誰が副会長って……………。正気?」

「勿論です!!」

はあ、伊井野ミコか……………

藤原に並ぶ危険人物かもな

『愛、15分後位に帰れるように手配ししてもらえる?』

『終わったの?』

『ああ、結果は失敗だ』

『じゃあ、会長が負ける可能性があるんじゃない?』

『ないよ。断言できる』

『どうして?』

『まあ、色々あるのさ』

『え、教えてよ!!』

『生徒会選挙に期待しな。俺の言った意味、わかるだろうよ』

『ぶ、ぶ』

『まあ、今晚電話してでも教えるさ』

『ホント!?じゃあ、今晚待つてるね』

『おう』

この紙に書かれた事が本当なら、御行の勝利は確実……

『伊井野ミコ 極度のあがり症のため、人前で話せない。これにより、これまで選挙に受からず』

ただ、かぐや嬢の脅しに屈服しなかった度胸と御行に対しての鬱憤もあるし、ちよつと邪魔するか

伊井野ミコ、どこまでやってくれるかな?

さて、選挙の策略練りますか

崇宮誠は戦わせたい

《〜生徒会選挙当日!!〜》

「優、今なんて？」

「だから、今日の選挙。伊井野ミコに徹底的に勝ちたいんです」

意味はわかりかねるが

とりあえず、負けてしゃーないって雰囲気にしたってことか？

「向こうにかくし球でもあるのか？・石上」

「いえ、ありません。今回の選挙は僕らが勝つでしょう。でも、皆さん

ならそれ以上の勝ち方ができるはずですよ」

「まあ、俺は進行担当だから行くぞ？・あとはそのうちでやりな

さして、優には悪いが、ちよつと見たくなつちまつたんでな

御行と伊井野の本気のぶつかり合いが、な

《〜そして、選挙が始まる〜》

「伊井野ミコの応援演説を始めます」ガヤガヤ

ちつ、なんで人の話が聞けねえんだ？

「大仏さん、少し待ってもらえますか？」

「あ、はい。どうぞ」

「少し、静かにできませんか？・貴様ら」

「シーン

なんだ、こいつら

たかだかこの程度で黙るなんざ話にもならねえな

「まず、先輩方がべちゃくちや下らないことを話すのはわかります。

自分にはほとんど関係ないのだから。でも、後輩の事を考えてくださ

い。最上級生が聞いてないなんてハッキリ言ってダサいです。見損

ないですよ」

「あの、崇宮先輩、もうみんな黙りましたからいいでしょう？」

「いいえ、ダメです。この際ハッキリと全員に言っておきます」

こいつら、ちよつと不真面目が過ぎる

「次に、同期の皆さん。少しは黙れませんか？・3年生が喋っているか

ら喋るんですか？なら、あなたたち、全員に言っておきます。これからは自分も含めた2年生がこの学園を支え、引つ張っていくんですよ？それがなんですか、他人の話は聞かず自分たちの話したいことを話す。そんな奴等に誰がついていくんですか？誰が下につきたがりですか。その辺、ちよつと考えて行動してください」

あとは、最下級のあいっらだな

「1年生には一言、進級して、高校生活が楽しいのかもしれないが、調子に乗るな。てめえらの同期が頑張つてこの選挙に出てるんですよ？なのに聞かねえつてのはなんですか？それに先輩方が話してるからつて話して良いとでも思ってるんですか？一番下が入つたばかりにも関わらず、ルールを守らないの事。それは調子に乗っている証拠です」

さて、それじゃ最後に締めるか

「最後に、ここにいる全生徒に一言。あの程度の事を言われたごときで黙る位ならしゃべらないください。以上です。それでは、応援演説を開始します」

ふう、これでようやく、始められるな

《〜大仏さん、演説中〜》

「ご清聴、ありがとうございます」パチパチパチ
ん、すっかり練習してたんだな

淀みのない、良い演説だった

「ありがとうございます。崇宮先輩」

「なんの事ですか？」

「とぼけないでください。先輩のあれがなかったら、半分以上は話を聞いてませんでした」

「手助けしたつもりはありませんよ。自分は進行をしなきゃなんで、それでは」

大仏こぼちさん、あんたは確かに凄いですよ

でも……………

「次は、白銀前会長の応援演説です。四宮さん、どうぞ」

マニユアルに則つたやり方じゃウチのお嬢には勝てんよ

《くぐや様、演説中くぐ》

「これにて、演説を終了します」

やっぱり、いつも御行の側で!!御行しか!!見てないだけはあるな
客観的に見れば、かぐや嬢が有利だな

さ、次は、伊井野の演説か……………

「以上で、応援演説を終了。これより、立候補者の演説に移ります。伊
井野ミコさん、どうぞ」

「は、はい……………」

はあく、この感じ、無理っぽいな

やっぱり、期待しすぎか、あがり症だもんな

「い、伊井野、ミコです……………」

「ん、なに？マイクトラブル？」ざわざわ

「全然聞こえねーじゃん」クスクス

「もしかして、緊張してんじゃね？」ざわざわ

「ふふつ、まただよ」クスクス

あー、そうだった

こいつら、あの程度じゃ動じない層の集まりだったわ

気に入らねえな、頑張つてまつすぐあり続けてるやつが、バカにさ

れんのは

《くぐその頃、ステージ裏ではくぐ》

「必死に頑張ってるやつが、笑われるのは気にくわないんですよ」

そう、だから僕は伊井野が笑われないように、圧倒的大差で勝つて
欲しいんだ

こんなの見てられない

「わかった。伊井野が笑われずに勝てばいいんだろ？任せとけ、それ
に……………」

「伊井野さん、演説中すみません。少し中断しますね」

崇宮先輩……………

「俺たちの頼れるあいつが、こんな腹立つことを無視するわけないだ
ろ？」

そうですね。あの人、自分は綺麗じゃないとか、汚れてるかもしれ

ないけど一本まつすぐ芯を持った僕のこの世で一番の先輩ですもん
これぐらいやつてもらわなきゃダメですよ

《くく場面は再び崇宮君へ戻るくく》

「うわー、とめられちゃったよー」クスクス

「だつせー」クスクス

「何を勘違いしているんですか？先輩だろうが同期だろうが、後輩だろうが関係ありません。自分が止めたのはあなた方に生徒会長を決める資格がないと思ったからですよ」

「は？どういう事だよ？」

「私達に投票の資格がないってどういう事よ」

「彼女が話せないのが悪いんでしょう!？」

すぐこれだ

誰かのせい、伊井野が話せないのが悪いのか？違うだろ

それに、俺はそれが理由でこんなこと言ったんじゃない

「あなた方、誰か一人でも立候補しようとか考えたことあるんですか？ある方はそのまま着席、ないものは起立してください」

ほれ見ろ、ほとんど全員立つじゃねえか

「それじゃあ、起立している方々に、あなたたち、立候補しようとか考えたこともなくせに、立派な信念を持って立候補した子に対してそんな態度ですか。ふざけるのも大概にしてください!!」

てめえら、ホンツトにいい加減にしろよ!!

「最初もそうです。今からこの学校の生徒の長を決めようってときにベラベラベラベラ何を話すんですか？そこまで重要な会話なら壇上に出て話さない。そんなこともできない癖にいちよまえに前に出た人間を無視する資格はあなたたちにはありません。ましてや、前に出た生徒を嘲笑うなんてもつての他です。恥を知りなさい!!」

「もういいだろ。誠、こんな会話しても無意味だ」

あ、あ、!?

「どういう事ですか？白銀前会長」

「こんなことしたって何の価値もない、時間の無駄だ。自分のしたいことを話せないんだ、仕方ないだろう？」

「つまり、俺が次も会長だ、と?」

「そういうk「ちよつと待ってください!!」ん?」

伊井野か?大勢の前であんな声出せるのか

「崇宮先輩、皆さんを黙らせてくれてありがとうございます。でも私の演説はまだ終わっていません。白銀前会長も、下がってください」

「結果は明らかだろう。もう下がっておけ」

「いいえ、下がりません!!まだ私は話したいことをなにも話せていませんから!!」

「そうか、なら話してみろ。お前の理想とするこの学園を!!」

さて、御行が後はやってくれるから、俺は下がるかね

そのあとは、さすが御行と言わざるを得なかった

伊井野が言いたいことを言わせる巧みな誘導

その上、伊井野に自分と御行以外の人間を意識の隅に追いやるように決して自分から目をそらさせずにする技術

やっぱ、すげえわ。あいつ

そんなこんなで、生徒会選挙が終了し、結果発表の日

「さて、どうになりましたかね?」

生徒会選挙結果!!

白銀御行

270票

伊井野ミコ

230票

崇宮誠

100票

んんんんんんん!?

「あく!!崇宮さん!!良かったですね。100票も入ってるじゃないですか」

「え、いや、ちよ、待ってください。自分、立候補してないんですけど……」

「いやあく、実に良き演説であつたな!!崇宮」
「うえあつ!?!」

「そうだけ、崇宮。俺お前の言葉聞いて感動したわく!!」
あく、そういう………

「とりあえず皆さん、そこに座りなさい」
「え?」

「なんでだよ」

「良いから座る!!」

「はいっ!!」

「それじゃ、私はこれで……」ガシツ

「もちろん、藤原もですよ?」

「あ、あははは………」

はあく、とりあえず

「あなたたちは真剣に入れてくれたのかもしれませんが、立候補してないものに票を入れるとは何事ですか!!」

「ヒイツ!?!」

「全く、そういうことをされると運営サイドに負担が掛かるんです」

「はい」

「あまりに多いから今回は特例で書いたのですが、あれを許可してしまうと、今後の生徒会選挙に影響が出ると。そこをもっと考えてください」

「はい………」

「それにですね……」誠、藤原書記。体育館の片付け行くぞく「あく、それですか」

はあ、きりあげるか

こいつらも悪気があつた訳じゃないみたいだし

「とりあえず、新生徒会の仕事もあるのでこの辺にしておきます。さ、行きますよ。藤原」

「はい。頑張つて行きましょく!!」

「あと、」

「ん?」

「その、まあ、悪い気はしませんでした。自分に票を入れてくれて、ありがとうございます／＼」

「っ!!」

「崇宮さん?どうかしましたか?」

「なんでもありません。さっさと行きますよ」

あく、はっず!!

面と向かってお礼言うのってこんなに恥ずかしかったっけ?

さっさと行って片付けしよ、切り替えのために

「あく、待ってくださいいゝ!!」

こうして、生徒会選挙は幕を閉じた

俺は後から知ったことだが、生徒会に伊井野ミコが会計監査として

加わった

さて、次のイベントは体育祭だな

それじゃ、それまでの期間含めて、頑張りますか!!

崇宮誠も読ませたい

《~~~~とある昼休み~~~~》

「御行……。学校に漫画なんて持って来ないでくださいよ……」

「う、うるさい。とにかく、これを四宮が読めば必ず俺に告白するはずなんだ!!」

まだ言ってるのかよ……………

どつちかがから告白すれば絶対成功するだろうに

難儀な二人だなあ、全く……

「そんなに好きなら告白すりや良いのに」

「ばっ!?!／／別に俺はそんなんじや……」

「はいはい。わかったわかった。それで、知らなかったんですか、きょうあま」

「知ってるのか?」

「はい。たまたま本屋で目に入ったから読んでみたら、結構面白かったので全巻買いましたから」

最終回のあれは良かったなく

それは置いといて

かぐや嬢、読むか?

俺が薦めても却下されたし

あ、でも、好きなやつに薦められたら読みそうだなあ、あの人

「で、どう薦めればいいと思う?」

「え、そこ未計画だったんですか?」

「いやまあ、石上会計に読ませればその流れで、とは考えているんだが……。タイミングが合うかどうか……」

「わかりました。自分に任せてください副会長が行きそうなタイミングで連絡しますから」

「助かる」

全く、なんでこう、ビミョーに無計画的というかなんと……

こういうところ似てんだよな、かぐや嬢と

まあ、とりあえず手伝わねえとな

《～～放課後～～》

「はあ、ホントに上手くいくのか？この作戦

「副会長、今日は生徒会に顔、出しますよね？」

「ええ、そのつもりですけど。どうかしましたか？」

「いえ。ただ、藤原を待っていてあげてくれませんか？と思ひまして」

「どうしてですか？」

「藤原一人だけ後で来たら、あの子騒ぎそうじゃないですか」

「これが一番妥当な理由だったんだよなあ……………」

「昼休みから今まで考えたなかで、だけど

「どうにか納得してくれねえかなあ

「そういう子でしたっけ、彼女」

「まあまあ、待っててあげたら彼女、絶対喜びますから、ね？」

「わかりました。藤原さんを待ちます」

「それじゃ、自分は先に生徒会室に向かってますんで」

「はい。それでは、また後で」

「さて、さつさと向かいますかね

《～～崇宮君、移動中～～》

「や、御行。来たぞ」

「泣いちやうー！！」

「優……………」

「やっぱりなくよなあ～～！！」

「わかるわかる！！」

「すつげえわかる！！」

「あ、先輩」

「よつすー。で、ご感想は？」

「キラキラな恋したくなっちゃったー！！」

「なるほど」

「青春ヘイト極めてる優ですらこうなるのか……………」

「きょうあまパネエな

「あー、どっかに出会い無いかなあ」

「それなら生徒会には3人いるけど？」

「伊井野はあり得ませんし、四宮先輩は家の格が違い過ぎて無理」

「そうか……」 ホツ

ホツとするなよ、全く……

でも、伊井野とかぐや嬢がダメとなると残りは……

「藤原か……」

「藤原先輩か……」

「いやでも、消去法とかで選ぶもんじゃないだろ？恋する相手って」

「いや、それはそうなんですけど。なんか油断したら恋しちゃいそうで」

そこまでなるか？

いや、俺も無意識にそうなってたのか？

うむ、わからん

「でもやつぱり、絶対この人じゃなきゃ!! って心から思える人と恋したいじゃないですか」

「まあ、それが普通だろ」 バンツ

噂をすれば

「ここから恋バナの匂いがします!!」

「藤原、もう少し扉はゆっくり開けましょうね」

「それは気を付けます。で、誰が惚れた腫れたんですか!？」

「いや、惚れた腫れたじゃなくてな」

「この漫画の話で……」

「きょうあまだー!!」 ドパツ

え?!なんで号泣してんの!？」

「あつ、表紙見ただけで涙腺が……」

「そんなにか?」

「そうですよっ!!私、友達に1巻だけ借りて、電子で全部買っちゃう位はまったんです!!崇宮さんは読んだことないんですか?」

「いや、読むには読んだよ。確かに面白かったけど、表紙見て泣くほどじゃねえだろ」

で、かぐや嬢の反応はどんなもんだ?

「……………これは、そんなに面白いんですか?」

「おもしろいし、読んでみたらいいんじゃないか？かぐや嬢」

「そうですよ。かぐやさんも読んでみてくださいよ」

「いえお構い無く。私は漫画を嗜まないの」

あゝ、やっぱり？

さて、ここからどう読ませたものか……

「四宮、これも勉強……、漫画というものを一度通して読んでみるのも悪くないと思うが」

「でもそれ、いやらしいんでしよう？」

「いや、そんなことないって……」

「どうだか……。最近皆さん私を騙すのが楽しくて仕方ないようですし。何を信じたら良いのやら……」

おい!!そんなの俺知らねえぞ!!

どう言うことだ!?

「それって、どういう」チラッ

「」パイッ

「目をそらすな!!」

全く、最近ちよつと建て込んで中々ここに出れてない間に何があつたんだよ

「四宮? 騙されたと思って、読んでみてくれないか？」

「参考程度に聞きますけど、どういう話なんですか」

「まず、人間不信の女の子が主人公でな」

「今の私と同じですね……」

「………んで、まあクチの悪い男の子が転校してくるんだが」

「そのおとk……ムグウツ!？」

はあ、今絶対ネタバレしようとしただろ

全く、ちよつと油断するとすーぐやらかしそうになる

「次、ネタバレしようとした奴を潰す。OK?」

「」りよ、了解しました……」

「と、とりあえず、続きをどうぞ」

「あ、ああ……。それで、人間不信が高じて拒食症の少女がさ、恋愛を通して社交的になっていく訳よ」

「初めて友達も出来て、人間としての温かみを取り戻していく訳じゃないですか」

「ああ!!序盤な」

あー、絶対ネタバレする流れだな

よし、潰そう

「それでーっ!?!」

「い、痛い痛い痛い!?!」

「誠!?!いきなりどうしたの!?!」

「ネタバレするなって言ったよな。OK?」

「わかった!!わかったから手首極めないで!?!」

「そうですよ!!僕らみたい一般人に使う技じゃないでしょ!?!それ!!」

「うるっせえ!!ネタバレなんかされて読みたくなるか!!猛省しろ!!」

なんでネタバレせずに魅力を伝えられないの!?!

したくなる気持ちはわかるけどさ!?!

もうちよつとオブラートに包めないの!?!

「それですね。かぐやさん、その男の子ががががっ!?!」

「だくかくら〜!!ネタバレしないで伝えろっての!!」

「誠?そ、その辺にしないと、三人とも可愛そうよ……?」

「藤原先輩!!助けに来まし…えっ、何があっただんですか!?!」

あー、事態が余計にややこしくなった!!

「とりあえず、崇宮先輩は三人を離してください。というか、どうして指一本で人を拘束できるんですか!」

「いや、すまん」

「後、その口調も説明してもらいますからね!!」

「お、おう。わかった」

「い、痛かった……」

はあ、面倒臭いことになった

最悪だよ……

「で、どうしてあんなことになってたんですか?」

「それはだな……」

《〜崇宮君、事情説明中〜》

「そういう事ですか。なら白銀会長達が悪いですね。それで、崇宮先輩のその口調は？」

「まあ、対した理由じゃないけど。本当の自分を見られるのが怖いんだ。だから、普段は仮面を被って生活してる。でも、別にみんながキライとかじゃないぜ？ただ、口調を穏やかにして、ちよつとだけいい面してるだけで」

「まあ、それが先輩の処世術なら、何も言いませんよ」

「助かる。後、生徒会室ではこんな感じだから改めてよろしく」

「はい。よろしく願います」

「やっぱ、類は友を呼ぶんだな」

「伊井野もいやつだよなあ……………」

「いやあ、変なやつが入ってこなくて良かった良かった」

「で、向こうはどうなったかな？」

「で、話はそれだが、四宮どうだ？読む気になったか？」

「ええ、まあ、少し興味が湧いたので読んでみようかなと」

「そうか!!だったら、これを」

「いえ、折角ですので買って帰りたいと思います」

「そうか……………」

「ちゃんと読んだら感想を言いますよ」クスツ

「おう。それじゃ、解散にするか」

「そうですね」

「良かった、上手くいったみたいで」

「でもなーんかモヤモヤするんだよなあ……………」

「なんでだ？」

「どうかしましたか？崇宮先輩。すごく複雑そうな顔してましたけど」

「え、そんな顔してたか？」

「はい。なんというか、その、嫉妬？してるみたいな顔してました」

「ん、今後気をつける」

「俺が嫉妬？んなアホな」

《〜その夜、四宮別邸にて〜side早坂愛〜》

「私もこんな恋したいー!!」びえええええ

「かぐや、ちよつと静かにして」

「ん?」

「今、いいところ、だから」ポロポロ

「愛さん、漫画って良いものね」

「そうだね。じゃ、そろそろ寝よつか。かぐやがそうなるならきつと会長も同じだと思うから、明日攻めればコロツと告白してくれるかもだよ?」

「そうよね!!それじゃ寝るわ、おやすみ!!」

かぐや……………

最近更に思うけど、よくこのボロの出し方で今までバレなかったよね?

いや、多少バレてたから学校で噂になってたのかな?

まあ、今はそんなことどうでもいつか

さ、私も自分の部屋に戻る

《〜早坂さん、移動中〜》

さ、久しぶりに誠君とお電話〜♪

「もしかして、寝ちやっているとかもありうるのかな?」プルルルツ

『ん、もしもし?』

「あ、誠君?もしかして起こしちゃった?」

『いや、全然起きてたけど。どしたの?なんか鼻声っぽいけど、風邪か?』

うそ、そんなに変わってる!?

そんなはずないと思うんだけどなあ……………

あつ!!それぐらい細かい変化に気づくほど私を見てくれてるってこと??

えへへ〜♪／／／照れるな〜♪／／／

「風邪じゃないよ。かぐやときょうあま読んで泣いただけ」

『そうか、だったらいいけどさ。で、どうだった?きょうあま』

「すつつごいおもしろかったし感動したよ!漫画ってすごいね!」

『そうだな。確かにハマればすっげえ面白いからな。漫画って』
へ〜

漫画ってそういうもんなんだ
それにしても誠君ってすごいな〜

私の知らない事いっぱい知ってるし、ちよつとした変化に気付いてくれるし

「あ、そうそう」

『ん、どした?』

「今週末、水族館にデート行こ!!」

『この辺だとSunlight水族館か』

「そうそう。行かない? やつと、色々終わったし」

『そうだな。行くか』

「楽しみにしてるね」

やった!! 誠君とデートだー!!

楽しみ〜♪

『ホント、悪いな。中々時間作れなくて』

「大丈夫。誠君が頑張ってるの、知ってるもん」

『でも、付き合ってるんだからさ。もうちよつと一緒に居たり、話したりする時間を作った方が良いだろ?』

「それって結局、誠君が私と話したいってことでしょ?」

ふっふ〜

誠君、これは照れるでしょ〜

誠君の照れた声かわいいから好きなんだよね〜

『当たり前だろ』

あれ?

「へ?」

『大好きで彼女と少しでも話したいのって当たり前だろ? 愛はそうでもないのか?』

「いや、そういうわけじゃないけど……………」

あれええええええええええええええええ!!

なんで!?! 今日の誠君、なんか変

いつもなら照れる筈なのに!!

どーして照れないの!?

『ホントか? だったらいいんだけどさ。ほら、申し訳ないじゃん? 俺だけが勝手に舞い上がって話したがつてたら』

「そ、そんなことないよ!! 私だって、誠君と話せなくて寂しかったもん。恋しかったもん!!」

『そうかそうか。それは良いことを聞いた』

あれ? もしかして

『愛がそこまで俺にゾツコンだなんて嬉しいなく。照れちやうなく』

「は、謀りましたね……………//」

『ん? 前に愛がやったろ? それの仕返し。だから、そんなに恥ずかしくないっていい』

「うっさい!! 恥ずかしいからもう寝る!!」ブチッ

ううううう……………//

恥ずかしいよお……………

私、なんて言っただっけ?

たしか、「私だって、誠君と話せなくて寂しかったもん。恋しかったもん」だったよね?

「……………!!」バタバタバタ

は、恥ずかしいくく//

ベットの所で足ばたつかせても全然気持ちをそらせないよお……………ピロリンツ

「ん? だれから?」

誠君か、なに? 煽るつもり?

『ちよつと恥ずかしかつてる愛を見てはしやぎすぎた。すまん。でも、あの言葉に嘘偽りはひとつもないから』

はあ、全く……………

「これだけで許しちゃう私って、相当重症なのかな?」

『気にしないでいいよ。私も誠君が私みたいになったら同じことする自覚あるし』

明日は誠君ともっと話せると良いな〜♪

従者二人は楽しませたい

「水族館のペアチケットですか？こんなものを付けてくれるなんて、校長も粋な計らいをしますね」

「ふうむ……………」

「私、水族館好きなんです。色んな生き物が居て、ロマンティックで……………」

「あ、あの……………」

「2枚つすか」

「石上君？」

「じゃあ四宮先輩、僕と行きます？」

「えっ」

「四宮先輩には、勉強を教えてもらったり恩義がありますから。こう見えて僕結構詳しいんですよ。魚」

「そうなんですか」

「凄いつすよ。僕の教えテク……………」

「ドキッ」

「えーと……………」

「いや待て石上。魚はお前の方が詳しいかもしれん。だが、ペンギンなら俺だ」

「会長……………」

「飛べない鳥のロマンを教えこんでやる。骨の髄までな」

「っ!!」 キュンッ

「四宮（先輩）」

「俺と石上、どっちを選ぶんだ？」

「あの、三人とも？」

「どうしてここまで影響されるんだよ……………」

「はあ、まさかここまで恋愛ムードになるとは……………」

「もう1時間もこんな感じの空気だよ……………」

「恋愛漫画1つでここまでなるか？」

「もう、この流れのまま告白しねえかな、二人」

それと、今日はもう帰りたい

この空気、キツイ……………

「いやあー、白鵬強いですねー」

「そうだな。白鵬、強かったな。それじゃ、俺はこれで」

「どうかしたんですか？」

「ちよつとした用事だ。じゃ、また明日」

「そうですか。バイバーイ」

藤原が居てもどうとでもなるだろ、多分

俺は俺のやりたいようにやらせていただきますよ

《〈〈崇宮君、移動中〉〉》

たぶんこの辺に居ると思うんだけどな

お、いたいた

「翼君、今時間ありますか？」

「崇宮さん、なんかあつたんすか？」

「いや、少し相談がありました」

「オツケーつす。とりあえず、俺らの部室行きましょうか」

「え、他の部員がいるんじゃないんですか？」

「今日はオフなんで部室は誰もいないんで、大丈夫ですよ」

「そうですか。じゃ、よろしくお願いします」

《〈〈一方その頃〉〉》

はあ、不安だなあ

「どうしよつかなく……………」

「何かあつたんですか？」

「わひやつ!?か、柏木さん？」

「初めまして、早坂さん」

「……………こんにちは」

び、びつくりした……………

柏木さんって確か彼氏いたよね？

だったら相談してみるか

でも、この人一回誠君を誘惑してるんだよね……………

信用して良いんでしょうか？

「そんなに警戒しないでくださいよ。私は別に崇宮さんを誘惑したくてあんなことしたんじゃないんですから」

「本当にそうなんですか？」

「ほら、崇宮さんって結構脇が甘いじゃないですか。誰にでも平等に優しくし過ぎる所とか」

「それは誠君の美点です」

「それはそうなんですけど。後、あまり女性に耐性無いようでしたし。そういう人って危険ですから」

「まあ、それは一理ありますけど……」

だからってあれはないでしょう!!

あんなのダメだよ!!

「だから、忠告も兼ねてやったんですけど……。でももう少しやり方があったのは事実ですね。そこは謝罪します。すいません」

「いや、それはいいんですけど……」

悪気は、ない……のかな？

わかんないけど、とりあえず信用してみる？

このまま考えても仕方ないし

相談してみるか

「それで、悩んでいるようでしたけど。何かあったんですか？私でよければ相談に乗りますよ？」

「いや、たぶん柏木さんじゃないとダメだと思う」

「そ、そうですか。それで、その内容は？」

「実は——」

「デートのやり方がわからない？」

あゝ、やっぱりそうなる？

「恥ずかしい話なんですけど、何回か彼女とお出掛けはしたのですが。その、そういう施設に行くのは初めてでして……」

「それで、どうしたらいいかわからない、と？」

「はい、その通りなんです……」

一回目は買い物とゲーセンだったから特に問題なしで、二回目は

色々あったから、結局、娯楽施設でのガッツリデートってのは今回が初めてなんだよな

「何回かデートしてるんですよね？」

「まあ、二回位ですけど」

「その内容は？」

「それは――」

「ええっ!?!二回目のデートで温泉旅行!?!しかも一緒に入った!?!」

「おつきな声で言わないで!!私もしま後悔してるんだから／＼／＼」

「あ、それはすいません。でも、良く温泉旅行なんて行きましたね。襲われるとかって考えなかったんですか？」

お、襲っ……………!?!

「それは、その、誠君は同意無しにそういうことしないし……………／＼／＼」

「随分信頼してるんですね。崇宮さんの事」

信頼って……………

「そりや、彼氏なんだから信頼するよ。もしかして、柏木さんはそうでもないの?」

「そんなことないですよ。私も翼も、お互いの事信じてますから」

「うらやましいなく。そういう関係」

私も誠君ともっと信頼し合いたいなあ

まあ?きつとなれると思うけどね!!

って、そうじゃなくて!!

「それで、どうしたらいいと思う?」

「うくん……………。どうしたらいいか、かあ」

「やっぱり、初めてだからさ、楽しんでもらいたいの」

「なるほど…………。あつ、そうだ」

何があるんだろう?

普通のデートってわかんないんだよね

あんまり恋愛物とか読んでないし

そういうの読むべきなのかな?

「魚の名前を覚えるとかどうでしょう?」

「魚の名前?」

「そうです。覚えて行って、話してみて、興味がなさそうなら話を変えればいいんですよ」

「なるほど……」

それだったら私にもできるかな?

誠君、楽しんでくれるといいな

「そういえば、柏木さんは最近どうなの? 田沼君と」

「えっ? 最近? そうだな。例えば——」

「なるほど。そういえば崇宮さん。早坂さんは魚とか詳しいんですか?」

「いえ、そんな話は聞いたことないですけど?」

「じゃあ、魚について色々教えてあげれば良いじゃないですか!!」

いや、それも考えて、準備もできたんだよ?

でもさ

「それって、引かれる可能性があるじゃないですか?」

「そういわれてみればそうですね。じゃあ、珍しい柄の魚とか、彼女が気になった魚を教えてあげて、興味があまりなさそうなら別の話題を変えれば良いじゃないですか」

「なるほど、それなら彼女と楽しめますね」

「それにしても、うらやましいな。初々しくて、楽しそうで」

ん? 翼君、何言ってるんだ?

もしかして、柏木さんと喧嘩でもしてるのか?

「喧嘩でもしたんですか?」

「いやいや全然。寧ろこんなふうにうまくいってこのままどうしようかな、って感じで」

「そうなんですか。それは良かった」

なんだ、喧嘩じゃないのか、良かった良かった

でも、さっきの話を聞く限り、何か悩みでもあるのか?

「柏木さんとの関係で何か思うことでもあるんですか?」

「いやあ、悩みつつ程じゃないんですけど。最近、渚が黙ってることが多くて……」

「何かしたんですか?」

「いや、思い当たる節はいくつかあるんですよ。でも、全部違うって言われて、もう俺どうしたらいいか」

柏木さんがずっと黙ってるねえ……

彼女の性格上、たぶん翼君が浮気とか、愛を感じないはない
だってあの絶対翼君がゾッコンだって自覚してるし

じゃあ、なんだ?

「とりあえず、時間と距離を置いて見たらどうですか?」

「どうしてですか?」

「お互いに何か思うことがあって話しづらいなら一度客観的に物事を整理する。これがいつも自分のやっている手段で……」

「どうかしました?崇宮さん」

待てよ、ゾッコンだって自覚してる、翼君はこんなに良い子、夏休み明けからの態度からして彼女の要望には尽くすタイプ……

もしかして、いやないよなあ……

「いえ、1つ仮説が浮かんだんですけど流石にあり得ないので。とりあえず一度客観的に整理してみましよう」

まさか、な……?

「へ?今なんて?」

「だから、私、翼に結構わがままなことたくさん言ってるんですよ」

「うん」

「彼、全部受け入れてくれて」

「うん」

「でも!怒るときはちゃんと怒って欲しいの!」
なるほどね

「わかるよ、柏木さん。その気持ち」

「え?わかるの?」

「うん。でもね?きつと、田沼君はホントに無理とか駄目とか思った

らきつと止めてくれると思うよ?」

「どうしてそう思うんですか。翼のこと、よく知らないくせに」

うつわ、すっごいトゲのある言い方

柏木さんも田沼君にだいぶ惚れてるんだね

「だって、田沼君は柏木さんにゾツコンだから」

「ゾツコンだったら尚更止めてくれないんじゃない」

「違うよ。確かに私は田沼君を誠君から聞いたぐらいでなにも知らない。けど、誠君の人をみる目は確かだから。その誠君がいった言葉だから、私は信じてる。田沼君はゾツコンだけど柏木さんが道を違えそうなら、必ず止めるって」

「翼が、私止めてくれる」

うん、きつとそう

だって、誠君の言葉だもん

彼、人と関わってから、その人の内面を見抜くのは大得意だから、きつとそう

「そうだよ。だから、きつと、怒るときはちゃんと怒ってくれると思うよ?」

「でも!私だけ怒ってるのは一方的だから嫌で。そう考えるとイライラしてきちゃって」

「なるほどね。私でよければこのまま愚痴聞くよ?優しすぎる彼氏を持つもの同士、共感できる部分も多いだろうし」

「そうですね?なら付き合ってください。だいたい翼はいつも――

ここから3時間近くずっと愚痴を聞かされた

途中途中でどっちの彼氏のここがいい、私の彼氏の方が優しいで激突したけど

なんだかんだ、渚さんとは仲良くなれた

警戒してたのがバカみたいだよ

《〜一方、彼氏はというところ》

「なんかすんません。崇宮さんの相談に乗る筈が、俺の相談に乗ってもらって」

「気にしなくていいですよ。今日相談に乗ってもらったお礼みたいな
ものですから」

結局、何で柏木さんが怒ってるのかはわからず仕舞いだし
ホントに気にしなくていいんだよな

「それじゃ、俺はこっちなんで」

「そうですか。では、また明日」

「さいなら〜」

とりあえず、帰ったら

水族館にどんな魚がいるか、周辺にどんなお店があるかのチェック
だな

初めての娯楽施設デート、楽しませるぞ〜!!

従者二人♡アクアリウムparty

早坂との、ある意味で初デートだな……………

緊張するなあ~~~~、うへへ~~~~

予習はちゃんとしたし、まあ、大丈夫だろ

さ、今回はバイクで来いってことだし

そろそろ行くか

「ふう…………。それじゃ、行つてきまーす」

《~~~~崇宮君出発後、崇宮家にて~~~~》

「響也さん、響也さん」

「どうしたんだ？玲香」

「誠君、最近楽しそうですね」

「ハハッ、そうだな。あんなに楽しそうなのは久しぶりだな」

「ちよつと前まで、誰にも素顔を見せなかったのに、本当に子どもの成長は早いですね」

「そうだな…………。俺たちはあいつの居て欲しい時に側に居てやれなかった。その間にきつとたくさん良い経験をしたんだろうさ」

響也さん……………

そうよね、私たちは誠君が小さいとき、つまり一番親に甘えたい時期に本能的少ししか一緒に過ごせなかった

仕事に…………いや、四宮の方々を見返す事ばかり考えて、彼と向き合えなかった

彼の事は昴に任せきりで、ね……………

その分、余裕の出来た今を家族らしく過ごしたいわね

「玲香？どうした？難しい顔をして」

「なんでもありませんよ。所で響也さん」

でも

「ん？なんだ」

「少しお出かけしませうか」

「本当か!?今すぐ準備してくる!!」バタバタ

「もう…………。どこ行くのかも決めてないのに…………」

息子が居ないとき位、たまには私も、良いですよね？

「準備できたぞ!!で、急にデートの誘いなんてどうしたんだ？」

「その、誠君のあの姿を見ると、なんというか、そういう気分になったんです／＼／」

「ハッハッハ!!そうかそうか。玲香でもそんなこと思うんだな」

失礼な!

私だって色々我慢してるんですよ!!

とりあえず、響也さんが乗り気になつてくれて良かった…………

断られるの、結構辛いですからね

「行く場所は決まってるみたいだが、行くか。玲香」

「はいっ!!行きましょう!!響也さん!!」

さあて、今日は久しぶりのデート、楽しむぞ〜♪

《〜所変わって、四宮別邸〜》

「かぐやく。服装こんなので良いと思う？」

「良いと思いますよ?」

「それじゃ、これで行こつかな」

それにしても……………

「どうして会長のお誘いを受けなかったんですか……………」

「だ、だって、あのときはあれですごい幸せだったから、それで、そのお……………」

「異性を誘うのって、結構勇気いるんですよ?」

「だ、だってえ……………」

「この期に乗じて付き合わないでどうするんですか。会長、他の子と付き合うかも知れないですよ?」

「どうして……………そんなこと言うの……………」

「あー、はいはい。すいません。言い過ぎましたからそんな顔しないでください」

そんなこの世の終わりみたいな顔されたら追及出来ないじゃん……………

それにしても会長さん、報われないなあ……………

それに、これが転機になってあわよくば、とか考えてたけど
考えが甘かったな〜

「愛さん。最近あなた、私に呆れてるときに必要な報告の時は敬語になるわね」

「両方とも癖みたいなのだよ。それが嫌なら、呆れさせないで」

「それはわかっていいるのだけれど……。はあく、ホント、どうして断ったの〜？私い〜」

ホント、どうして断ったの？

全く、こうやって世話が焼けるから手伝いたくなるんだよねえ

「もう過ぎたことは割り切る？次に誘われたら、今度は行けるように、今度練習しよ？ね？」

「次があるかわからないじゃない!!何を余裕のあることを言ってるの、このおバカ!!」

「カチンッ」

「あなたはいいでしょうよ!!誠って彼氏が居て、余裕があるんですからね!!」

黙って聞いてれば、人の気も知らないで……!!

「かぐやが凹んでるから慰めてあげようとしたんだよ!?なのになんなの!?その言い方」

「実際そうじゃない!!でも、私は違うのよ。もしこれで会長が誰かと付き合ったら……」

「だったら自分から告ればいいじゃん?」

「だから、そういうのじゃないって言ってるでしょう!?ホントにわからない子ですね。あなたは」

私がわからない子!?

絶対かぐやの方でしょ!?

いつまでも、いつまでも自分の気持ちを認めないで……

「大体、あなたが最近出す案は全部両想いが前提でしょう!」

「だって、そうじゃん!!二人とも両想いじゃん!!」

「だから、仮に会長が私にゾッコンでも私はそうじゃないと何度も言ってるでしょう!?どうしてわからないの!!」

「そうは見えないから言ってるの!!いい加減認めなよ!!」

なんでそこまで素直になれないの!?

全っ然、意味わかんない!!

「どうして素直にならないの!?素直になった方が付き合えるってわかりなよ!!」

「だから、別に好きじゃないって言ってるでしょう!?あなたこそ、いい加減私の思いに気付きなさいよ!!」

「……………わかった。もうそろそろ誠君も来るから、行ってくる。それじゃ」

もうかぐやなんて知らない!!

誠君と楽しむ!!

《〜〜早坂さん、移動中〜〜sideチェンジ崇宮君》

っし、到着つと

さて、早坂が出てくるまでゆっくりするかな

お、早いな。もう出てきた

「おはよ、愛」

「……………おはよう。誠君」

ん?なんか、ご機嫌斜めじゃね?

もしかして、体調でも悪いのか?でも、顔色は良いし……………

聞いてみるか

「愛、もしかして体調どつか悪い?」

「全然そんなことないよ?さ、行こ行こ」

「じゃあ、良いけどさ」

かぐや嬢となんかあったのか?

でも、あんまり聞くのはなあ……………

とりあえず、デート楽しませて、自然に話し出すの待つか

《〜〜従者カップル移動中〜〜》

「そういえば誠君」

「ん?」

「ネットレス付けてくれてるんだ」

あ、そういえば付けてるな

慣れたから忘れてたけど

「まあな。折角のプレゼントだし、大事にしたいってのはあるけど、俺は付けて見せつけたい派だからさ。ダメか？」

「へ、へええ。全然私はいいけどさ／＼／＼」

「照れんなって」

「て、照れてないし!!／＼／＼」

ホント、かわいいな／＼うちの彼女

さ、そろそろ付くな

っと、信号だな

「愛、そろそろ着くぞ」

「ん、わかった」

さて、翼くんの相談を生かせるだろうか……………

不安だ

《水族館到着／＼side早坂愛／＼》

ふう／＼、落ち着いて、落ち着いて……………

さっきの不意打ちでだいぶ乱れちゃったけど、大丈夫、大丈夫

私には柏木さんのアドバイスがあるからねっ!!

『まずは、自分が感じた彼の変化とか、服装に対して思ったことを言うてみたら?』

「さて、ちゃんと駐車もしたし。行くか……………。愛?」

「ま、誠君!!」

「おう、なんだ?」

「その、今日もかっこいいよ。その服装もよく似合っていると、思う／＼／＼」

くう／＼っ!!恥ずかしいよお……………／＼／＼

誠君、喜んで……………かな?

「チラッ

「……………っ!!あ、ああ、ありがとう。愛も、似合ってるよ／＼／＼」

「ありがとう!!」

良かったあ／＼

喜んでくれたよ／＼

柏木さん、ありがとう!!

私、貴女とすぐく仲良くなれそうだよ!!

「それじゃ、行く? 誠君」ギョツ

「わわっ!! 引っ張るなって!!」

ふんふふくん♪ たつのしみだなあ〜♪

《〜〜従者カップル移動中〜》

初めて来たけど……

良いね、こういう場所憧れてたんだよ

私がこんな事出来るなんて、思ってたから……

一生夢だと思ってた

「ていつ」ピシッ

「いてっ」

「んな、悲しい顔しなくてもこれは現実だし、これからもっと実現させてみせるよ」

「誠君……」

やっぱり誠君は最高に優しいし、かつこいいよ

認めようとしなくてね

自慢の彼氏だよ、ほんとに

「まあ、まずはあの二人を付き合わせて俺らのフリーの時間を増やすのが先だけだな」

「そうだね。それにしてもさ」

「ん?」

「誠君ってなんか変わったよね」

「どうしたんだ? 急に」

「なんか最近前より格段に優しいし、それになんか声色が落ち着くというか、側に居ると落ち着くというか……。うん、なんか、しっかり言えないけどそんな感じ」

だって、初めて会ったときは本当に四宮の関係者なの? って思うぐらいには雰囲気荒れてたし

それはかぐやの付き人になる頃には気にならなくなったけど、ここまで周りを落ち着かせる雰囲気も纏ってなかったんだけど……

私は今の方が好きだから全然良いけどさ

「たぶん、それは色んな理由があると思うぜ？」

「色んなって、どんなの？教えて欲しいな」

「ん。まず、優しくなったってのと声色が落ち着いているのは、愛が彼女だからっていうのと、彼女が出来て心に余裕ができて、そのお陰で周りを見れるようになったからだと思う」

「なるほど……………」

確かに私も誠君が彼氏になったお陰で今まで以上にみんなと話せたり、私の勝手な体感だけど周りを見れるようになった気がするし、そういう事か

「あ、でもたぶんだけど、側に居て落ち着くっていうのは愛が俺に気を許してるんだと思うぞ？」

「え、どういうこと？」

「いや、だってそうさ。愛、気づいてないかも知れないけど、俺と居るときだけ結構気が抜けてること多いし、何より俺、居るだけで落ち着くとか言われたことないしな」

え、じゃあなに？

私が誠君が好きだから一緒に居て気を許して落ち着いてるってこと？

つまり今私すごい恥ずかしい事言っちゃったこと!?

「ううう／＼／＼」

「まあ、俺としては嬉しい限りだけどさ」

「え、な、なんで？」

「それだけ俺を信頼してくれてるって勝手に俺のなかで意識してるからだよ」

誠君……………

意識なんかじゃないよ

私、誠君の側に居る時間がかぐやの惚気話以上に楽しくて大好きだから

これからもっと、愛情表現していくね

「えいつ」ダキッ

「うえっ!?ちよ、愛!?!いきなりどうしたんだ?」

「えへへ、誠君が私の気持ちをよくわかってくれてるのが嬉しくて、ね?」

「まあ、愛が周りの目が気にならないなら別にいいけど………／＼／＼」

んふっふっ♪今は気にしないもんねっ

さて、それじゃ

「そろそろオープンだね」

「そうだな。じゃ、楽しむか」

「うんっ!!」

水族館デート、スタート!!

従者二人♡アクアリウム part 2

《〜〜水族館ゲートにて〜〜》

あ〜〜…………

あれから、たぶん10分位たったと思う。たぶんだけど

「誠君?どうしたの?」

「ん、いや、ちよつとな」

周りの目がすごいんだよなあ…………

すつげえ恥ずかしい

嬉しいんだけどさ

「はあ、恥つずい……………」

「へえ〜、恥ずかしいんだ〜」ニヤニヤ

「恥ずかしいよ。ホント」

あ〜〜!!

早く開かないかな〜〜!!

《sideチエンジ〜side早坂愛〜》

なかなか開かないな〜

なにか話題〜〜…………

あつ、あつた!!

「あ、そうそう。誠君つてさ、柏木さんの事どう思う?」

「ん?なんだよ急に。そうだなあ……………」

どう思ってるんだろう

私は、頼りになる恋愛の先輩?で仲良くなれそうな印象だったけど

誘惑されてたからなあ…………

もし、色っぽいとか言われるとちよつと妬いちやうなあ

「一言で言うなら、怖い、かな」

「怖い?」

「おう。なんというか、言葉には言い表せないけど。怖いんだよな。

あと、時折すごい危険だ、って思うときがある」

危険、か…………

「それって、どういう危険?」

「なんだろうな。でも、惚れるとは思わないな。あ、後、愛とは相性いいと思うぜ?」

「そっか……………」

得体の知れない危険でつことか

私と相性がいい、か……………」

それってつまり、私が危険つてこと?

「誠君、私を危険視してるんですか」

「んあ?あ、いや、そういう所が相性が良いんじゃないやなくて……………。えつと、なんて言うんだ?なんというか、確証はないけど、悪い意味じゃないってのはわかって欲しい」

まあ、誠君が言うなら信じるけど

あ、開いたみたい

「開いたみたいだし行こうか」

「うん。楽しみだね」

「そうだな」

それじゃ、楽しもう!!

《従者二人、水族館に入り、side 崇宮誠》

いやあ〜、山ほどいるな〜、当たり前だけど

愛は、どんな魚が気になってるんだろ?

「誠君、いっぱい魚いるね」

「そうだな」

「綺麗だね」

「そうだな。すっごい綺麗だな」

見惚れてるなあ……………」

こりや、魚の種類覚えなくても大丈夫だったかもな
なんだかんだ、どうにかなりそうだな

「さ、他の所見に行こ!!」

「へいへい。そんなに急がなくても魚は逃げねえよ」

ん?なんか視線感じるな

ん〜、誰もいないな

気のせいかな、それとも

「知り合いか？いや、いるはずないか」

さして、見失わないうちに愛を追うか

《〜崇宮君が移動して〜》

「よし、行ったな」

「会長」

「なんだ？石上」

「時々思うんですけど。先輩ってホントにただの人間なんですか？」

「あいつは普通じゃない部分もあるが人間だぞ？確かに、異常な程に勘が鋭かったりはするがな」

「いや、鋭いにも限度つてもものがあるでしょ。なんで500m近く後方の僕らの視線に気付けるんですか」

「そんなことは今はいいだろ。それより、誠を追うぞ。石上」
「了解です」

《白銀石上コンビも来ていたのでした》

《一方、崇宮君たちは…………》

「誠君、誠君!!きれいだね!!」

「おう、そうだな」

愛、すつげえ楽しそうだな

最初はちよつとご機嫌斜めだったが、なんかあつたんかね？

タイミングがあれば聞いてみるか

「誠君は楽しい？」

「ん？楽しいけど？」

「どこか見たいところある？」

ふくむ、見たいところ…………ねえ

あ、そうだそうだ

「んじや、ペンギン見に行きたい」

「よし、じゃあ行こっか」

「いいのか？」

「何が？」

いや、何がつて…………

「あく、そういうこと。大丈夫だよ。私は見たところはだいたい見れたから」

「そっか。んじゃ、頼むわ」

「うんーさ、ペンギン♪ペンギン♪」

ノリノリだな

まあ、つまらなさそうに居るより100倍ましか

……………んくと、あれで隠れてるつもりなんか？

はあ、全く、尾行するならもつとましな方法があると思うけど

……………

「まあ、指摘するのも面倒だし。愛が気づいたらにするか」

「どうしたの〜？」

「ん？いや、何でもねえよ。悪い、さつきと行こうか」

「ペンギン♪ペンギン〜♪」

愛の奴、ホントはどこでもいいんじゃねえの？

楽しそうだから別にいいけど

さてと、御行、ちゃんと見てろよ？

どこにどのペンギンがいるとかな

かぐや嬢と行くときにミスらないように、な

《〜崇宮君&早坂さん移動中〜》

《一方、白銀石上ペアはというと……………》

「会長、男二人でも中々楽しいですね」

「そうだな……………」

誠の奴、どうしてペンギンなんだ？

別に興味があるってこともないだろうに……………

まさか、俺のために？

「どうしたんすか？会長」

「いや、なんでもないぞ。石上」

「そうですか。じゃあ、早く先輩たち追いかけてみましょうか」

「そうだな。バレないように注意しながらな」

「わかってますよ。さつき、あの人の勘の鋭さは恐ろしかったんで注意しますよ」

いやいや、まさかな

これだけ注意してるんだ

気づかれてることはないだろ、さすがに

《案外、水族館を楽しみながら尾行しているのです》

「わあ〜!!誠君見て見て!!赤ちゃんいる〜!!」

「おおっ!!ホントだ。かわいいな」

「ホントかわいいい〜!!モフモフしたい」

そうだな

かわいいなく、モフモフしたいなく

「っ!」ゾクッ

「どうしたの?急に身震いして、何かあった?」

「いや、なんか急に寒気が……………」

なんだ急に、風邪か?

それとも、猫たちの嫉妬か?

う〜む、後者っぽいな

ごめんよ、愛しの猫たち

お前らを裏切ったりしないから安心してくれ

「ホントに大丈夫?風邪だったりしない?」

「いや、最近風邪気味だったわけでもないし、ホントに心配しなくて大

丈夫だよ。さ、そろそろ時間だし、お昼にするか」

「そうだね。じゃ、フードコーナー行こっか」

「おう」

《一方、いまだ尾行中の二人はというと…………》

「会長」

「なんだ?石上」

「もう止めませんか?これ」

「どうしてだ?」

急にどうしたんだ?石上の奴

お前も結構ノリノリで尾行してたのに

「なんですかね。僕自身は、先輩と結構仲良いと思ってるんですよ

「ほう」

まあ、確かに誠はあまり遊びに行くとか、そういう関係になるのを避けてるからな

本人曰く『あまり深く関わるといつもの仮面が剥がれるんですよ。だから、あまり他人と学校の外で関わるような関係になりたくないんですよ』って言ってるが、あれは素の自分が他人に受け入れられないのが怖いんだろうな

「ほら、僕と先輩ってゲームで仲良くなったんですよ。だから、結構実際に会ってゲームとかも、わりとやってるんですよ」

「そうだな。二人からはその手の話題は結構聞くな」

「それで、今の先輩の顔って。一緒にゲームしてるときとか、生徒会活動してるときと同じかそれ以上に楽しそうなんですよ」

そうだな

確かに、今の誠は楽しそうだな

「そうだな」

「なんか、変なんスけど、ああいう先輩を見たら満足しちゃって。もういいかってなつたんです」

「そうか」

そうだな

よくよく考えれば、早坂さんと四宮は別人

あの二人のデートから何か見いだせるかと思っただが、やはり本人じゃなきやダメだな

「なんか、言葉足らずですいません。でも、僕はこう思っただんで、失礼します」

「まあ待て石上」

「なんです?」

ありがとうな、石上

「今日付き合ってくれた礼がしたい。昼飯、奢らせてくれよ」
「え、いいんすか」

「構わんさ。近くに良いラーメン屋があるんだが、どうだ?ラーメン、いけるか?」

お陰で大切な事がわかったよ

「ゴチになりまーす」

「それじゃ、行くか」

「あ、そうそう、お前は頼れる良い後輩だよ」

「ん？どうかしたか」

「今日、結構楽しかったですよ。男同士で行くのも、悪くないですね、水族館」

「……………石上、そういうのあんまり言わないほうが良いぞ？」

「あれ、どうかしたんですか？会長」

「ん、ああいやなに、ラーメンどれにしようか考えてたんだ」

「あ、それ聞きたいです。会長のおすすめは何なんですか？」

「俺のおすすめは……………」

「まあでも、楽しそうで良かった良かった」

「はあ、俺もああいう青春がしたいな、全く……………」

「早く告白してこないものか、四宮は」

《という様な一幕があり、尾行を終了したのでした》

《さて、フードコーナーに着いた二人は……………》

「混んでるな」

「うん、混んでるね」

「しまった、もう昼時か」

「まずったなく、これを見越して早めにお昼にする予定だったのに」

「どうする？別の場所っていう手もあるにはあるぞ？」

「此処でいいんじゃない？今から行った所でどこも混んでるだろうし」

「それもそうか」

「すまん。時間、気付かなくて」

「気にしなくていいよ。それ、私にも当てはまるし」

「そうか。じゃあ気にしねえけど」

「さて、そろそろ聞いてみるか」

「あのさ」

「うわ、被った」

「そつちからどうぞ」

またかよ

話が進まねえなおい

「愛、先に話せよ。俺はたいした用事じゃないから後でいいよ」

「私こそ、完全に私情だから。誠君がどうぞ」

ふくむ、これ、両方絶対に引かない感じだな

じゃあ、お言葉に甘えて、俺から言わしてもらおうか

「そうか？ じゃあお言葉に甘えて」

「うん、どうしたの？」

「今日の朝、かぐや嬢となんかあったんか？」

「え？ どうして？」

どうしてつったって……………

「いや、朝ちよつとご機嫌斜めだったからさ。なんかあったんかなくて」

「あはは……。なんでもお見通しだね」

「なんでもは見通す自身はねえよ。ただ、好きな女の事は、見通せるようになりたいんだよ。だから、ちよつとでもいつもと様子が違ったら、今みたいに聞くからな」

彼女一人ぐらいなら見通せるようにならないとダメだろ

でない、本当にデカイ事抱えてるときに、一緒に背負えないからな

もう、愛にあんな辛い顔させたくないしな

「そつか……。えへへ、なんだか嬉しいね」

「そうか？」

「うん！ じゃあ、話すね。実は——」

《……早坂さん説明中……》

《詳しくは part1の前半をご覧ください》

「——つてことなの」

「そういうことね」

なるほどなるほど

まあ、愛の意見がごもつともだよなあ……………

正直、かぐや嬢はフラれて今の関係が崩れるのが嫌なんだろうな、多分だけど

「どうしよう。このままかぐやと喧嘩別れになっちゃったら。折角、親友になれたのに……………」

「まあでも、」

「うん？」

「良いことなんじゃね？」

「なにが？私、これでも結構真剣に悩んでるんだけど」

俺も結構真剣に考えて思ったこと言ったんだけどなく

まあ、これは俺の説明不足か

「だってさ。喧嘩したってことは言い合っただろう？」

「うん」

「それって、従者の関係じゃできないことだろ」

「あつ」

「つまり、そういうのでぶつかると、友達だからこそなんじゃねえの？」

「確かに…………。で、でも、もし、かぐやが本気で怒ってたら？」

本気で怒ってたなら、ね…………

「それで、もう関わらないなんて言われたらどうすればいいの？」

もう関わらない、か…………

「言っちゃ悪いが、そんな一時の感情に任せて、どうにかするんだったら、ガキの頃からずっとなんて居られないと思うけど？」

「そっか……………」

「気になるんなりや、帰って謝ればいいんだよ。友達なんだから、な」

「謝る…………。うん、そうするよ!!ありがとう、誠君」

なんて事ないよ

愛には笑ってて欲しいっていう俺のわがままでもあるんだから

「さ、飯、決めようか」

「そうだね」

《こうして、二人は注文を決め、席について食べ始めました》

「んで、愛の話したいことは？」

「私の話したいことはかぐやとの事。だから、もうなくなっちゃった」
「そっか。じゃあ、昼からはどうする？」

「このまま、此処で魚達を見てよう？」

「そうだな。それじゃ、お昼からはゆっくり見ようか」

「うん」

こうして、午後も俺と愛はデートを終えた

お互い、すっげえ楽しそうにしていたと思う

少なくとも、俺から見た愛の顔は楽しそうだったから

あのあと、愛の心配は杞憂だったようで、翌日には二人とも仲良くしてたよ

従者二人は診させたくない

《ある日、四宮かぐやの私室にて》

「かぐや、ホントになにやってるの？」

「な、何がですか……………」

「いや、何がとかじゃなくて…………、ねえ？誠君」

「そうだな」

「どうして、御行（会長）を体育倉庫に連れ込んでキスしそうになつて、怖くなって伊井野（さん）にしがみついたんです？」

「そ、それは…………、そのう…………」

あゝあゝ、全く……………

体育祭の備品整理に二人で行ったと思つたら、そこでキスしようとして、怖くなってタイミング良く入ってきた伊井野にしがみつくなつて……………

そんなの

「流石に傷つくだろ」

「えっ……………」

「あゝあ、めんどくさい事になつちやつた」

え、俺なんかやつちやつた？

めんどくさい事つて……………

「だ、だって、仕方ないじゃない!!私からしてみれば、ここまで想定してなかつたのよ!!」

「は、はあ……………」

「あゝ、私知らない」

ええ……………

私知らないって、そんな冷たい事言うなよ

「そもそも、普段は億劫な会長が急に分かりやすいアタックを仕掛けて来るなんて予想外で気が動転していたんです」

「でも、事故なんだろう？」

「それは、まあ……………。でも——」ゴニヨゴニヨ

御行の奴、かわいいそうに

御愁傷様だな

御行に聞いてやるか

『御行、今日伊井野からすごい目で見られてたけど、なんかあったんか？』

『いや、まあ、な。四宮とちよつとな………』

『お前は気にしてるのか？』

『気にはしてるが、四宮とはできるだけ何事もなくていいとは思ってる』

『ふくん。まあ、もし仮に険悪になったら出来るだけの事はするからな』

『ああ。頼む』

さて、かぐや嬢にちよつとアドバイスするか

「かぐや嬢？」

「何ですか？」

「まあ、只の事故だったんだよな？」

「え、ええ、そうよ」

「じゃあさ、何て事なかった様に謝って、何時も通りに接する方がいいと思うぞ」

「そうかしら……？」

「そうじゃないと、変に拗れるととんでもない事になるからな」

それに、学校生活だってそう長くはないんだから

このまま拗れると最悪そのまま卒業になりかねないもんなあ
ないだろうけど

「そう、ね。そうしようかしら」

「そうするべきだと思うぞ。さて、もう寝る時間ですよ」

「あら、もう？」

「そうだよ。さあ、寝ましようね」

「ええ、わかったわ。二人ともありがとうね。お陰で落ち着いたわ」

「「いえいえ。それでは、おやすみなさいかぐや（嬢）」」

「はい、おやすみなさい」

《〈〈徒者二人、移動中にて〉〉》

「誠君、どう思う?」

「どうって?」

「かぐやと会長の事、このまま普段通りにできると思う?」

「どうだろうねえ〜」

「御行の方は普段通りにするって言ってたから問題ないだろうけど、かぐや嬢は数日は微妙だな。ちよつとはおかしな感じになるとは思う」

「会長は普段通りにするって言ってたんだ、良かった……………。じゃあ、かぐやもすぐ戻るか」

「たぶんな」

かぐや嬢次第だな

……………嫌な予感がするな

数日間は気を更に張つとくか

「愛」

「な、なに?急に真面目な顔して」

「こつから数日間はいつもより気を張っておいて欲しい」

「……………どうしてですか」

「嫌な予感がするからな」

「わかりました。かぐや周辺の警戒を少しきつめにしますね」

「悪いな」

普段のかぐや嬢周りの事は俺より、愛の方ができるからホント申し訳ないな

「申し訳ない事ないよ」

「え?」

「だって、生徒会の時は誠君がしてくれてるから」

「いや、でも……………」

「でももだつてもありません。はい!!この話終わり!!」

……………

「そんな申し訳ない顔しないで、ね?」

「……………わかったよ」

「うんうん。で、何の話してたっけ?」

「柏木さんと翼君がどうこうっていう」
「そうそう!!それで渚がね——」

《そうこうしている内に玄関に着き》

「もう玄関か。それじゃあね、誠君」

「ああ。本当に助かるよ、愛」

「大丈夫だよ」

「それじゃ」

「うん」

さて、今日は帰ってゲームせずに寝るか!!

《数日後、生徒会室にて》

かぐや嬢、ほほほほ通常運行に戻りつつはあるけど

まだちよつと、つて感じだな

あと2、3日で戻るか

「ん……」

「どうかしたか?」

「いや、四宮」

「どうしました?会長」

「髪に糸屑ついてるぞ」

「え………。どこですか」

かぐや嬢、らしくねえな……

「ほら、ここに」ついつ

「あら………。本当に」

なんか、おかしいな……

「こんなものにも気づかないなんて私ったらなんだか最近、少し、調子が……」フラツ

っ!?

「かぐや嬢!!あぶねえ!」ガシツ

「うう………。胸が……」

こりや、ちよつとまずいかもな

「御行!!救急車!!」

「もうやってる!!」

「優は陸部だったよな!! 医務室で先生呼んでこい!!」

「は、はい!!」ダッ

「か、かぐやさん?」

「し、四宮副会長?」

息はしっかりしてる、脈が早いな

詳しいことは一切わからんが、とりあえず、ソファで寝かすか

それと、身体を締め付けているものは、してないな

あとは二人だな

「二人ともしっかりしろ!!」

「で、ですが……」

「で、でも……」

「お前らがそんなんだとかぐや嬢に悪い!! ダチなら語りかけてやれ!!
いいな!!」

「は、はい!!」

っし、大丈夫だな

「かぐやさん、頑張つて下さい!! 私、まだお別れなんて嫌です」

「副会長、私もまだ、あなたの事もっと知りたいです。だから頑張つて

下さい」

「先輩!! 呼んで、来ました」ハア…ハア…

「何があつたの!?!」

ささて、後は、医務室の先生に任すか

《〜〜少しして〜》

ピーポーピーポー

「ん、来たか」

「誠……」

「どうした?」

「お前は、行くのか?」

「ああ、お前らよりは冷静だからな。事情を説明してくる」

「頼むっ……!!」

頼むつつてもなあ……

「後は、医者の仕事だ。俺にはどうにもならんし、絶対に無事と言い切

る事もできない」

「っ!!」

「だがな、もし何かあったら。それは対処して、指示を出した俺の責任だ。お前らが責任を感じる必要はない」

「そんなこと……」

こう言っても、責任感じるだろうけどな

今は、何も無いことを祈るだけだな

「それじゃ、行ってくるわ」

「ああ……」

さて、つと、愛から電話か

『誠君、かぐやはどう?』

「今はなんとも、そっちは?」

『私は、今救急車に乗せてもらったところ、そっちは?』

「今、かぐや嬢と向かってる。そろそろ着く」

『あ、見えた』ピッ

思ったより冷静だな

………違うな、気を張って泣かないようにしてるんだろうな

自分が泣けばかぐや嬢が不安になるから

「あなたも同行するんですね?」

「はい。お願いします」

「わかりました。それでは、出ます」

かぐや嬢、なんともないといいんだがな………

元々、あまり身体が良くなかったみたいだからな

大丈夫だろうか

「誠君、かぐやはどうだった?」

「突然、フラッと倒れたよ」

「そうなんだ……」

「ああ……」

愛………

かなり参ってるな

どうすれば良いんだ………?

「かぐや、大丈夫かな…?」

「正直わからん。でも、俺達は信じるしかない」

「そう、だね……」

「ん、うん……」

「っ!?かぐや(嬢)!!」

「愛さんに、誠……?」

「病院に着きました!!お二人も着いてきて下さい」

「はいっ!!」

《~~~~処置室にて~~~~》

かぐや嬢、だいぶ落ち着いてきたように見えるな

「かぐや嬢、大丈夫か?」

「わかりません。今から検査してみてもしょう」

「そうだな」

「お待たせしました」

田沼正造さんか

この人なら、安心して見てもらえるな

小児心臓バイパス手術の第一人者として知られるゴツドハンドだからな

「どういった症状なのでしょう?」

「不整脈というのでしょうか。突然心臓が激しく鳴り出し、時折、死んでしまうのではないかと思う程胸が痛くなって……」

「ほう……」

「やはり……。何かの病なのでしょう?……」

「ふむ……」

どうだ……?」

「お話を伺い、大体の所はわかりました。四宮さん、いいですか。慌てずに聞いてください」

「はい……」

「それは恋の病でしょう」

……うん?」

ちよつと待って?」

「…………それは、何かそう呼ばれている心臓病などがあるのでしょうか?」

「いや、普通に好きな人にドキドキする感情の事です」

「――」

「お医者様でもご冗談を仰るのですね」

「冗談ではないのです」

「でしたらなんですか!? 私は恋のドキドキで倒れて救急車に運ばれたと!?」ぐわっ

……………

「はい。私も医者をして30年やって初めての出来事に少し動揺しています」

「馬鹿を仰らないでください! 私は恋される事はあっても、恋に落ちるなんて無様な真似をする筈ありません!」

「天邪鬼な子だな」

「最近はずんデレって言うんです」

「ちよ、ちよっ」 「お話を整理しましょう」

チヨットマテェ!!

「学校の活動で特定の人物の事を考えると鼓動が速くなると」

「はいそうです」

「それで、今日髪に付いていたゴミを彼が取ってくれて、頬に少し手が触れたタイミングで、胸に突然キュンキュンとした痛みが走り……………。息も出来なくなると」

「だからそう言ってるじゃないですか!?」ぐわっ

この問答地獄すぎない?

あ、愛さんはどうなのでしょう? これ

「……………っ／／」

あ、ダメそう

「愛、大丈夫か?」コソコソ

「もうやだ……………。誠君、一緒に外で待とう?」コソコソ

「ん、わかった」コソコソ

「愛さんも何か言っ…………愛さん!?」

「私と誠君は外で待ってますので終わったら、呼んでください」
「うううううううう」

「ま、誠……?」

いや、そこで俺にふられても……

「これは仕方ないわな。諦めてくれ」

「もう耐えきれない……。私だってこの病院使ってるのに、もう来れないですよ。マジ最悪……」
「はあああああああ」

「な、何だつて言うのよ二人とも」

何だつて言うのよつて言われましても……

認めたくない事実を突き付けられてるのを見るの辛いんですよ

それに、それが病院で尚且つ救急搬送ですよ?

ちよつと考えればわかるでしょう……

「とにかく!もつとちゃんと調べてください」

《そうして、検査室へと移動し》

「これは、ウチでも一番新しい測定装置です。先端医療ですので、医療費は相当高くなりますが宜しいのですね?」
「ウイイイイイン」

「自分の命と比べれば安い出費です」

『計測終わりました』

「どう?」

『とても綺麗で健康な心臓してます』

「そんな筈ない!!穴の一つや二つ空いてる筈です!!」

「だったらもう死んでるかな」

……もうやだ

「じゃあなんですか!私は顔を触られた位で倒れる程ドキドキしたつて言うんですか!」

もう認めようよお……

「確かに多少は嬉しかったですが、それで倒れるなんて私は会長の事が死ぬ程好きって事になるじゃない!」

「因みに向こうの彼かな?」

「何を仰ってるんですか？彼は別にかっこ良くないです」

《その頃、見ている側は》

『彼は別にかっこ良くないです』

ぐふっ、う、うっせえやい!!

なんでそんなこと言われないとダメなんだよ!!

自分かっこいいと思ってる訳じゃないけどさ!!

「もうやだ……。俺外居る」

「誠君大丈夫、誠君はかっこいいよ。だからここで一緒に居よ？」ダ
キッ

「……………」

「ほら、ね？誠君、もうすぐ終わるから。ね？このままでもいいからさ
？」

「……………うん。このままで」

「うん、いいよ」

はあ~~~~、癒される~~~~

《崇宮君はリタイアにて、早坂さんに》

「すいません。イチヤイチャしているところ悪いのですが。患者さ
ん、お似合いと言われて心拍数が200オーバーです。凄いバクバク
言ってます」

「もうやめてもらえませんか？最新技術を使って、主人の気持ちを暴
くの」

「申し訳ありませんが、本人のご希望なので」

「はあ……………」

仕方ないか、この人も仕事だし

それにしても

かぐやとはあとでちよつとお話かな？

「最近なんか心境が変わる心当たりとかありませんか？」

「心当たりですか……………」

あ、そういえば

「この子こないだ彼とキス寸前までいって。それ以来凄く意識し
ちやってるんです」

『あー、そういうことか』

『ちよつと愛さん！今その事は関係ないでしょ!!』

「いや、100%それですから」

『だいたいあれは純粹な恐怖で——』

はあ……………

まだ言ってるの？もういい加減認めたほうが楽ですよ

それに、認めないと恥ですよ

看護婦さん、顔赤くなってるじゃないですか

「すいません。私の主人が、本当にすいません」

「いえ、これも仕事ですから／＼／＼それにしても、すごく個性的な人です
すね」

「ええ……………。まあ、色々あるんだと思います。彼女の中で」

「詳しくはお聞きしません。まあ、でも、病気ではなくてよかったです
ね」

「そうですね。良かったです」

あれはもう病気の域だと思っただけだね

《そうして、検査が終わり四宮別邸にて》

「あの医者はヤブよ!!」

「世界の名医だよ。何て事を言うの？」

「こうなったら別の病院に——」ガシッ

「大丈夫だよ。座って？」

これ以上、恥をばらまくのはやめてもらわないと

それに

「あ、愛さん？顔が怖いですよ？」

「今日、誠君凄い傷付いてたんだ」

「え？」

「だから、お話ししようか。かぐや」ゴゴゴゴゴゴゴ

「え、あ、はい」

《その後、四宮さんは崇宮君に謝罪、生徒会全員に無事を報告したが會長に、完治してないことも、あなたが原因ですとも言えないのでした》

従者二人の体育祭 part 1

「というわけで、みんなも待ちに待っていたであろう。体育祭の出場、その他諸々決めていくぞ」

「「イエーイ!!」」

来たぞ!! 体育祭!!

今年は去年より楽しむぞ!!

さて、なに参加しようかな

「じゃあ、二人三脚出たい奴いるか?」

「はい」

へー、愛が二人三脚出るんだ

愛が!?

「早坂か。じゃあ相手は、崇宮だな。他にいないか?」

「え、ちよつ、ちよつと待つてください!!」

「ん、どうした崇宮。早坂とペアなことが不満か?」

「そうなの? 誠君」

「いや、そういう訳じゃなくて」

話が急に進みすぎて理解が追い付かん!!

そうだ。他にやりたい奴いるだろ絶対

「ほ、他にやりたい子がいるんじゃないですか? ねえ、皆さん?」 チラッ

なんだお前らニヤニヤして

「早坂と崇宮が二人三脚するのに異論ある奴いるか?」

「異論ありません!!」

お前らマジ恨むからな!!

「はあく、わかりました。愛さん、やりましょう。二人三脚」

「やった!! ありがと、誠君!!」

ただし

「やるからには勝ちますよ、絶対に」

「もちろん、当たり前だよ」

それじゃ、頑張りますか

《くくそうして、放課後くく》

「誠君、大丈夫？」

「何がですか？」

「いや、なんか無理やり決めちゃったし。それに、いいの？リレーにも出ちゃって」

「こういうのは楽しんだほうがいいんですから、問題ありませんよ」

まあ、流石に応援団もやるから多少心配になるのはわかるけど……

「なら良いんだけど。無理だけはしないでね？」

「ご安心を。自分の限界は理解しているつもりですから。そんなことよりも、愛さんのお母様は来られそうなんですか？」

「うん………。正直、あんまり期待はしてないんだよね。ママ、忙しいから……」

確かに、奈緒さん多忙な立場だもんなあ……

「あ、でもあれだよ？来てくれたら嬉しいな」ピロンツ

「ん？どうかしましたか？」

「やった〜!!ママ来てくれるって〜!!」

おお〜!!良かったじゃねえか

これは俄然やる気が出てきたな

「良かったですね？それでは、私は応援団の決起集会があるので、これで」

「うん!!楽しみだなあ。あ!!応援団、頑張ってるね。楽しみにしてる」

「ご期待以上のものを用意してみせますよ。」

「じゃあ、またね〜」

ふう、それじゃ気合い入れて行くか!!

《くく決起集会くく》

「失礼します……」

「諸君、我々は必ず優勝しなければならぬ!!」

「!!然り!!然り!!然り!!」

んあ?ナンダコレハ……

「む？ 諸君!! 新たな同士が来たぞ!!」

「はい？」

「オオオオオオ!!」

え!? なになになになに!?

「わかりましたから。皆さん、少し落ち着いてください」

「君に問おう」

「はい？ 何でしょうか。」

「この白団に、勝利はあると思うかね」

「は、はあ……………」

この白団に、勝利ねえ……………」

「チラッ

これだけやる気と活気、それに勝ち気に溢れてるんだからな

答えは一つだろ

「これだけ元気が有り余ってるんですよ？ 負けるはずがないのでは？」

そもそも、負ける気で体育祭やるバカがどこにいるよ

愛のためにも、そして俺のためにも全力で叩き潰すに決まってる
ろ

「素晴らしいッッ!!」

「うるさっ!!」

この人声でつか!?

どっからこんな声出してんだよ

「それでは、よろしくな。崇宮」

「ええ。よろしくお願ひします。 団長殿？」

「む？ 俺は団長ではないが？」

はっ。

「え、まだ決まっていなかったのですか？」

「もちろんだ。まだ団員が揃っていなかったからな」

「なるほど……………」

あれ？ 揃っていなかった？

ってことは…………

「もしや、私待ちだったんですか？」

「当たり前だろう。流石に団員が揃ってすらいないのに団長を決めるのは、俺の気がすまん」

「そういうものですか」

申し訳ねえな

まあ、俺は団長はもう決めただけだな

「で、だ。君は誰を団長に選ぶのかね？」

「皆さんの投票状況はどの程度かお聞きしても？」

「うむ。崇宮と俺で二分されているという状況だ」

「私ですか？」

何で俺なんか選ぶんだ？

特に団長をやれるようなりリーダーシップはみせてないはずなんだがな？

「そうだ。俺ももちろんだが、皆も選挙の際の君に心打たれたようだな」

「なるほど……………」

あく確かにそんなことあったな

正直、あの選挙の結果で団長に推されたような気がしなくもないな……………

それでも、俺はもう決めてるけどな

「そうですね。私は……………」

「「ゴクリ……………」」

「あなたを推しますね。瀬藤先輩？」

「俺、か……………」

「ええ、あなた以外に瀬藤さんはいませんか？」

「そ、そうか。謹んでお受けしよう」

「それでは改めてよろしく願います。団長殿」

「うむ。皆も至らんかも知れんが、俺についてきてくれ!!」

「オオオオオ!!」

これだけ周りを巻き込んで引つ張り上げる力があるんだから、この人が適任だろ

俺はここまで人の心を惹く力は持ち合わせがねえからな
それよりも……………

「この狂喜乱舞をどうにかしないとイケませんね……………」

「団、長!! 団、長! 団、長!!」

「お前たち、全員俺についてこい!!」

「オオオオオオ!!」

こういう空気は嫌いじゃないんだけどなく

いかんせん気が入りすぎだろ、これ

さて、そろそろ止めるか

「団長?」

「どうした? 崇宮」

「今日は決起集会ですが、何をやるおつもりで?」

「そうだな。今日は団長を決めることしか考えてたいないぞ?」

「なるほど……………」

それはもう終わったもんな

そうだな……………

「それでは、皆さん部活もあることですし、今日はグループを作って解散しては如何ですか?」

「それもそうだな。今日が本番であるわけではないしな」

「それに、ここで力を出されすぎても困りますからね」

「ガッハツハ!! 確かにそうだな!! よし!!」

さて、これで解散ですね

「お前たち!! 今日グループを作って解散とする!! 次の集合日はまた連絡する!!」

「オオオオオオ!!」

ふう、これで今日のところはなんとかこのエネルギーを不発で終わらせることができたな

こりややる気の調整が必要だな

じやなきや、途中で破裂しそうだな

《〜それから無事にグループ作成し解散〜》

ふい〜、疲れた〜

お、優じゃん

「おや？優、何をしているのですか？」

「あ、先輩……………」

おや？なんだか疲れたような、喜んでいるような
なんかよくわかんねえ表情してんな

「どうかしたんですか？」

「いや、なんとというか……………。僕、応援団に入ったんですよ」

「おや！それは良いことじゃないですか。それで、久々の人だかりに
辟易して疲れてしまったのですか？」

なるほどお〜

あの優が自分から行動するとはね〜

先輩として鼻が高いよ〜

「いや、まあ、それもあるんですけどもつと別というか」

「まあ？詳しい話はそこらの喫茶店で聞きますよ」

「あ、え、いや、そういうんじゃないよ……………」

「まあまあ、先輩がこう言ってるんですから、存分に甘えなさい。さ、
行きますよ〜」

これぐらい強く行かなきゃ、優はどっちつかずでフラフラして逃げ
るからなく

ま、話聞いてほしそудし無理やりでも連れてくのが正解だろうな

〜

「え、ちよ、先輩!?!はあ、わかりましたよ」

「それでいいんです。さ、行きましようか」

《〜石上君&崇宮君、移動中〜》

さ、優の話を聞くか!!

「それで？何があったんです？」

「それが……………。色々あって女装することになったんすよ」

「へえ〜……………。はい？」

何がどうなると女装に繋がるんだ？

まあ、高校生のなんかよくわからないノリに巻き込まれたんだろ
優はそういうの嫌ってそうだけど

「いや、もうこの際、ノリが気に入らないとかナシ寄りのナシだろとか
そんなのはどうでもいいんですけど、なんとというか俺場違い何じやな
いかなって……」

「……………」
なるほどなあ……………」

「僕、正直まだ怖いんすよ……。あんなことがあって……。でも、いつ
までも逃げてちゃダメだと思っんです。それに……………」

「優、もう良いですよ」

「えっ……………」

はあ~~~~、全くどうしてこうも俺の周りは色々抱えている人が
多いのかね？

まあ、世話焼きな性格の俺が見過ごせるわけもないし、当然っちゃ
当然か

とりあえず……………」

「まず、逃げるということの何が悪いのですか？」

「いや、逃げるのはダメでしょ」

「言い方を変えましょうか。私の人生にとって逃げるなんて言うもの
はどんな行動を取ろうが存在しません」

「え？でも、先p……………」

全く、後輩としてまだまだだぜ？優君や

先輩のお話はもうちよつと聞くもんだぜ？

とりあえず、そのお口はチャックだぜ？

「ここから、もう少し黙っていなさい？ここからがポイントなんです
よ」

「は、はあ……………」

「まず、逃げるなんていう言い方をするからダメなんです。そもそも
ね、人生で逃げるなんてないですよ。なんでも経験、たとえ逃げた
としてもそこには尊いものが転がっているんですよ」

「先輩……………」

全く、世話の焼ける後輩だなあ……………

「そもそも、御行は知らんけどな？俺はここまでの人生で何度か優が言うところの逃げをしてるんだぜ？」

「でも、逃げずに向かった方が、良いに決まってるじゃないですか」

「そんなアホな考え捨ててちまえバーカ」

「え？」

「あつ」

やべ、つい言っちゃった

まあ、ここから立て直すか

「人生別に逃げてても良いんだよ。向こう見ずに相手に向かうからこそ潰れてエライことになる奴が跡を絶たないんだよ」

「それは……………、そうですけど……………」

「まあ、なんだ。ちよつと話はそれたけどよ。逃げようが脇道にそれようが、立ち止まろうが、後退ろうが本人から見れば前に進んでるんだから気にするなよってことだよ」

「そう……………、ですかね……………」

思うところはあるけど、まくだなんかひつかかっている感じだな

こればかりはどうしようもねえな

「そんなもんだよ。難しいかもしれないけどねけど人生割とどうとでもなるからな。つと、そろそろ帰るか」

「そうツスね…………。先輩、今日はありがとうございました。ちよつと気が楽になりました」

「それなら良かったよ」

《～～優君&崇宮君、解散後～～》

さて、これは解決まで時間がかかりそうな問題だな

応援団に参加したのはいい兆候と見ればいいのかねえ？

「ただ、そうか。優からは俺は逃げてないように見えるのか……………」

全然そんなことはないんだけどなあ

でも、悪い気はしないよなあ

へへッ、それはそれとして……………

「優、きつとここがお前にとっての正念場だぞ」

従者二人の体育祭 part 2

今日は待ちに待った体育祭だ〜!!

よし、今日は楽しむぞ〜!!

「……んで!!」

ん? 愛の声だ

どこだ……つと校舎裏か

「愛さん〜? そろそろ2人3脚が……」

「来るって言ってたじゃない!! いつもそう!! 守れない約束なんてしないですよ!!」

ん? 誰かと電話か

電話の内容的に相手はたぶん奈緒さんか

忙しくて来れなくなつたとかだろうな

うちの親も今日そんな連絡が入ってきてたし

「………本当は私の事なんてどうでもいいんでしょ」

いや、あの人の限ってそんなことはないと思うけど

あ、かぐや嬢

「誠、あれ、大丈夫かしら……?」

「大丈夫でしょう。彼女、ああ見えて切り替えは早いですから」

「いえ、そうじゃなくて、あれ、浮気とかじゃないの?」

「え?」

そんなわけねえだろ

自分で言うのはこつ恥ずかしいけど、俺めちやくちや愛されてるし

「ママの嘘つき……」

やっぱり奈緒さんだったじゃねえか

ちよつと動揺するからそんなこと言わないでほしいね、全く……

かぐや嬢も（あ、マザコン……）みたいな顔してるし

「ああいう事ですよ。それにしても大変ですね? 会長と同じ団になれなくて」

「そ、そんなことありませんよ? あら、電話が終わったようなので私は失礼しますね」

あ、逃げた

まあ、かぐや嬢は平常運転っぽそうだし大丈夫だろ

問題は愛の方だな

「っ!!誰ですか、そこにいるのは」

「あらら、バレちゃいました?愛さん、そろそろ競技の集合時間なので呼びにきましたよ」

「なんだ、誠君かく。びっくりさせないでよね。で、どこから盗み聞きしてたの?」

盗み聞きとは人聞きの悪い

たまたま聞いちまったただけだっつーの

「大体、来るって言ってたじゃない?辺りからですかね」

「ほぼ全部じゃん。別にいいけどさ」

「すみません。盗み聞きの形になってしまつて」

「いいよ、謝らないで。私も不注意だったから」

それはそれとして、ちよつと妬けるなあ

愛には俺がいるんだけどなく

でも、母親には来てほしいっていう気持ちもよくわかるからな

……

ああ!!なんかよく分からねえけどむず痒い!!

「ふふっ」

「ん?どうして笑うんですか?」

「いや、誠君がヤキモチ妬いてるなかつて」

なっ……!!

「そ、そんなことはありませんよ?／＼／＼」

「顔真っ赤にしても説得力ないよ?」

う、うるせえ!!

あ、くっそ!!

「愛さん?」

「なに、んんんんん?!」

暴れんなよ

唇、離れちまうだろうが

「つぶはあ!!」

「つぶはあ、流石に苦しいな」

「な、何!?急に／＼／」

何って、そりやお前

「からかわれた仕返し、ですかね?」

「ううう、誠君のいじわる……………／＼／」

うるせえ、俺も恥ずかしいんだよ

でも、なんか、やりたくなつたんだよ

「いじわるで結構。そんな拗ねた表情されると辛いんだよ」

「でも、ママに会えるの、楽しみにしてたもん……………」

ふくん……………

ママに会うのが楽しみだった、ねえくく

「それは確かに残念だったな。けど、何もそれだけが体育祭の楽しみじゃねえだろ?」

「それは……………」

「それに、奈緒さんはいないかもしれない。でも、お前にはかぐや嬢がいて、みんながいて、俺がいるだろ」

「っ!!」

よし、いい表情になつてきたな

あと一押し、だな

「折角の体育祭なんだ。いつもと違う、かつこいい彼氏様の姿に集中してほしいもんだな」

「ふふ、あはははははは!!」

え……………

全然、笑うところじゃないんですけど……………

「なんで笑うんだ?」

「だ、だって、珍しい言い回しばっかりしてるなって、頑張つて励ましてくれるんだなって思ってたらさ」

「おん」

「本音は俺を見てほしいなんだよ。なんか、おかしくなっちゃって」
ヒーツヒーツ

う、うるせえ!!／／

折角こういうイベントなんだし、好きな人にちゃんと見てもらいたいじゃん!!

来れない人のことじゃなくて、今いる人に集中してほしいじゃん!!
あゝゝ!!もうっ!!

「ほら、もう二人三脚の集合時間です。行きますよ」

「あゝ、待って待って。へそ曲げないでよ、誠君」

「へそなんか曲げてませんよ?すぐ行かないと間に合わなさそうなので、急いでるだけです」

「そっか。でもさ」

「なんだよ、急に近づいてきて……」

「私の目には誠君しか写ってないし、今日は誠君しか写すつもりないから大丈夫だよ?」

「ツツツ!!／／」

そういうこと、耳元で囁くのずるくないっすかね……

なんか、ゾクゾクしてして、他のこと、どうでもよくなっちゃう

……

「フフツ、さ、誠君。行こっか」

「んえ?あ、ああ、行きましようか」

《ゝゝ従者カップル移動中ゝゝ》

ん、だいぶ意識がはつきりしてきたな

さつきはマジでヤバかった

しばらく本気でなにも考えられなかったからな

「愛さん?」

「なあに?誠君」

「さっきのあれ、どこで覚えたんです?」

「ああ、あれね。あれは渚ちゃんが教えてくれたんだよ」

渚……

あっ!!あの女かゝゝゝ

全く、なんつうこと教えてんだよ

あいつ、もしかして俺たちで遊んでるんじゃないのか?

「心臓に悪いので、あまりしないでくださいね？」
「さあ？どくしよつかなく」

「全く……………」

自重する気一切ねえな

なんとか耐えられる様に慣れるしかないな

「とりあえず、二人三脚頑張りましょうか」

「そうだね。負けるのは嫌だからね？」

「当然です。必ず勝ちますよ」

『それでは、第一走者の方たちは並んでくださーい』

よし、時間だな

ん？愛からアイコンタクト？

「(誠君、二人三脚どうする？千切る?)」

「(一旦は様子見で行こう。あんまり差をつけても面白くないからな)」

「(了解)」

間延びしてだらけそうだったら無理やり動いて他を千切り捨てる
つもりだけだな

「さて、頑張りましょうか」

「もちろん」

『それでは、位置についてヨーイ』

『ドンツ!!』

「(いっち、に、いっち、に)」

「よし、誠君行き……っひゃあ!?!」

「愛!?!あぶねえ」

引き寄せる……………は間に合わねえ

なら、愛の足を掬うようにして無理やりこっちに倒れ込ませる!!

「おらっ!!」ダキッ

「きゃっ!!」

「(キヤアアアアアアアアアアアアアアア!!)」

外野がうるせえ

「あ、ありが「話は後だ」ふえ?」

「ぶっ千切る」

「……わかった。任せて」

ふう、それじゃあ

「(せーのっ!!)」 「ドンッ」

「「え、はっや……………」」

歩幅も体格も俺のほうが上、だったら愛に合わせれば!!

「「いっち、に、いっっ速っ!?!」」

「お先に失礼」

走ることだってできる!!

前は後2組、ゴールまではまだある

捉えられるかは、やってみるしかねえ!!

「愛さん(誠君)!!絶対に勝っ!!」

前は、え?優!?

エントリーしてなかったよな?

ってか速すぎだろ!!

まずい!!

『赤団。今ゴールイン!!』

「くそっ、ハアツ、ギリギリ、ハアツ、届かなかった」

「そう、ハアツ、だね……………」

くそっ……………」

あと数歩だったのに……………」

「先輩……………」

「優か……………。強いですね、あなたも、先輩も。ですが」

「そうッスね。だから」

「次は(も)負けませんから」

言うじゃねえか

まあ、負けたのは事実だしな、ここは素直に受け止めるしかないな

……………」 次は絶対俺が勝っ……………」!!

「ごめんね、誠君。私のせいで」

「ん?気にすることはありませんよ。勝負は時の運で決まります。一

発勝負なんですからこういうこともありますよ」

あんまり気にしてほしくないけど
気にするよな……

「安心してください。次は負けませんから」

「誠君がそう言うなら、それでいいけど……」

さて、こつからはしばらくは応援に専念しますか

《くくそれからしばらくくく》

いや、見てるのも楽しいもんだな

それにしても、御行のソーラン節、なかなか様になってたな

あいつあんなに踊れたっけ？そうじゃなかったと思うんだけど
なあ………

それよりも

「ジーツ

「愛さん？どうかしましたか？」

「んにやっ!?な、何でもないよ!」

さつきからチラチラ見たりジーツとこつちを見たりどうしたんだ
?

「誠君は気付いてない。彼も気付かなきゃ、問題はないよね？」

なんかボソボソと言ってるし

この騒がしさじや流石に聞こえねえな

「何かあつたら気軽に言ってくださいね？」

「う、うん。わかった」

んで、次の競技は………

あ、赤の応援合戦か

さてさて、後輩の雄姿を見るとしますか

「優、張り切ってますね」

「そうだなわっ!」

「ねえねえ、崇宮君。崇宮君」

ん、ああ同じクラスの………

愛を押しどけて来るほど知りたいことでもあるのか？

とりあえず、愛をこつちに引き寄せてつと

「どうかしましたか？」

「崇宮君って、石上？だっけ。生徒会の会計と仲良いよね？どうして？」

「どうして、と言われましても……………」

「だってあの子、崇宮君と比べて根暗っぽいじゃん？だから、なんでだろうなって」

根暗っぽい、ね……………」

まあ、高校からしかあいつを知らないから無理もない、か

「あ、気を悪くしたらごめんね？別に彼を悪く言うつもりはないの。でも、なんか毛色が違うなーって」

「別に構いませんよ。そうですね。確かに彼は、根暗っぽく見えるかもしれないですね。実際そういう節もあります。ですが、話してみると意外にそうじゃないですよ？彼、面白いですし」

「へえ、そうなんだ。なんか意外」

根暗っぽいというか、自分に自信がないだけなんだけどな

まあ、人間誰しもそういう部分はある

優の場合あんなこともあったから、そういう部分が余計に前面に出てるんだろうな

わかんねえけど

「まあ、何にせよ。石上優は私の誇れる後輩であり親友ですよ」

「なんかいいなく。そういう関係、ま、なんとなくわかったから。じゃね」

「はい、それでは」

優、結構卑屈だけど意外と注目集めてるんだな……………」

いや、当たり前か

あの生徒会に居たら否が応でも目立つな

「優、あなたはしっかり進んでいますよ」

ん？優の動きが一瞬止まった？

「誠君、どうかした？難しい顔してるけど」

「少し、気になることがあるので行ってきます」

「……………うん、わかった。待ってるね」

「頼む」

あれから動きがぎこちないな
俺たちが居た方と真逆……………

観客席になにかあるのか？

ん、そろそろ見えるな

「彼女は……………」

ああ、そういう……………

そりゃ、ぎこちなくもなるわな

あんなことがあつたからな

崇宮誠と石上優くくside崇宮誠くく

当時の俺にとって石上優とは同じ学校に居る1個下の後輩、ただそれだけだった

初めて優とゲームをしたのは中学2年のとき、オンラインゲームのチャット上だった

元々俺がゲームが好きだったこともあり、チャット上とはいえ直ぐに打ち解けることができた。

程なくして、ボイスチャットでゲームをするようになった。

そして、それから半年ほど経ったある日

『お前って何歳なの?』

『僕ですか?中1ですけど』

『あ、1個したなのか。嫌じゃなければ中学どことか言えたりするかな?』

『別に構わないですよ。秀知院学園つす』

その時は(あ、やばっ)って思ったよ。

ただ、それと同時にこいつなら誰にも話さねえだろとも感じたんだよな

『へく、俺も秀知院なんだよな』

『そうなんすねく……………えっ!?!』

『いやあく、意外と世間は狭いな』

『こ、こんなにゲーム好きな人とかあの学園に居るんだ……………。さ、差し支えなければ名前とかは…………?』

例えば、これが優と本格的に絡みだした始まりなんだよな

『ん?別にいいぜ。俺は崇宮誠。秀知院のもうすぐ3年になるな』

『それ、マジで言ってます?』

『ん、マジマジ』

『は、はは…………。先輩みたいな人もゲームするんすね』

ここの言われるのも無理ないな

当時の俺は、とりあえずガワだけでも優等生っぽく見せてたんだからな

なかなか、理解が追いつかないのもわかる

『で、そっちは?』

『石上優、って言っても先輩は知らないでしょうけど』

『当時の俺は石上優は足がそれなりに速いくらいのことしか分からなかった』

『いや、足が速いってことぐらいなら俺でも知ってるよ』

『僕、そんな有名じゃないんですけど……』

『まあまあ、そうだ。同じ学校だしLINE交換しとくか』

『あ、僕やってないんすよね』

『マジか。じゃあ、メールアドレス交換にするか』

『今まで通りで良くないツスか?』

『これも何かの縁なんだからよ。良いだろ?』

『はあ……、まあ良いですけど……』

今考えたら、この時連絡手段を今まで通りにしてたらまた違った結果になったのかもしれないんだよな……

それから、1週間のうち最低でも2日は優とゲームをする日々が続いた。

それで、趣味や好きなゲームなんかの話で意気投合したんだよなあ

……

『そうだ。先輩今度、学外で会えませんか?』

『構わねえけど、なんで学外なんだ?』

『いや、おすすめのゲーム貸したくて』

『ああ、前言ってた奴ね。了解了解、いつにする?』

『じゃあ、今週の土曜日で』

『了解』

そんなことがあって、ゲームを貸してもらったこともあった
でも、なかなか校内で話しかけて来なかったんだよなあ

そんなこんなでいつの間にか卒業シーズンになって、俺は高等部へ
上がった

それから頻度は減ったがゲームをするのは変わらなかった
そうしていくうち、

突·然·石·上·優·は·ゲ·ー·ム·を·し·な·く·な·つ·た·

崇宮誠と石上優くく side 石上優くく

当時の僕から見た先輩は雲の上の存在というのが正しかった
成績優秀で誰に対しても丁寧に接することができる

そんな完璧超人居てたまるかと、僕はある種嫌悪していた

そんなある日、オンラインゲームのチャット上で気の合う人と知り
合った。

好きなゲームの傾向も似ていたこともあって、ボイスチャットでや
り取りするまでにそう時間は掛からなかった

だからこそ、その相手がまさかあの雲の上の存在だなんて思っても
みなかった。

ただ、今思い返すと完璧な人間なんていないという言葉通りなんだ
なって感じる

それはそれとして素と学校であれだけの差があるのではないと思う
そうして話していくうちに、先輩も先輩で苦労していることを知っ
た

また、なんでゲーム好きなのかを聞くと先輩曰く「孤独を紛らわす
ことができるからな」だそう

正直、想定外な答えが帰ってきて驚いた
詳しく聞くと

「当時成り上がり真っ最中だったため親が居てほしいときに居なかつ
たこと」

「かまってちゃんな自分が嫌いでもんな自分をあまり見せたくないこ
と」

「そのことから、世間はあまり自分自身を見ることをしていないこと」
とか色々闇の深そうな話題がでてきた

そして最後に「だからこそ、こうやって素を出せる場とそれを話せ
る友達が居るこの空間が俺は好きなんだ」と言われた

そんなことを言われて僕は嬉しかった
当然だろう？

あの雲の上の存在の本音を知る数少ない一人なんですよ？

そういったやり取りもあってメールアドレスを交換した
好きなゲームを貸したりもした

でも、そんな関係になっても僕は学校で先輩に話しかける勇気が出
せないでいた

当たり前だ。あの人は1つ上の先輩だし、何より僕は学校では浮い
ていたから

そんな僕が話しかけたら先輩の迷惑になると思ったから

今思えば全然先輩を理解できてないなと我ながら辟易するよ

そうこうしている間に先輩は高等部へ上がっていった

相変わらずゲームはしていたけど、その頻度は少し減った

相変わらず僕はクラスでは浮いたままだった

それはそうだ。自分からなにか行動した訳ではないのだから

でも、そんな僕にも一人気さくに話しかけてくれるクラスメイトが
いた

名前は大友京子

別に恋をしていた訳でもなく、只のクラスメイトだった

抱いた印象というのもただただ良い人それ以上でも以下でもな
かった

でも、あぶれ者であった自分に話しかけてくれたからどこことなく救わ
れた気になって

そのアホ丸出しの笑顔がどうか曇らないことを願っていた

ある時、その大友に彼女ができた

忘れもしない

名前は荻野コウ

全国常連の演劇部の部長で人気者、僕とは正反対のタイプだった

ただ、カップルを無条件で呪う僕が珍しく幸せを願っているカップ
ルだった

あの日までは……

ある日、僕はいつも通りぼっち飯を決め込んでいた
すると、階段の上から声が聞こえる

「わかってるって、部屋取つといたからさ。だいだって」

荻野の声だ

僕は好奇心で話しかけてしまった
放っておけばよかったのに

「彼女？」

「うおっ?!居たの!?!」

ああ……………よく見る顔だ……………

「ははっ、聞かれてた?はるかしー。そう、彼女の女とね……………」
嘘を吐きなれてるやつ、嘘を吐く顔だ

当時の僕は、なんの漫画かゲーム、どつかの眩しい先輩に影響され
たのかは分からないが、過剰な正義感を抱えていた

良い人が傷付くことが許せなかったのだ

もし、恋心故の行動だったならこれから起こることはもつとシンプ
ルだったのだろう

正義感を抱えていた僕はその事を荻野に突きつけた

余計な事をした

「バレないようにしてたんだけどなあ……………。どうする?チクる?」
「もうこんなことは止めろ」

ただ大友に傷ついて欲しくない。それだけだった
なのにあいつは……………

「んー、困ったな…………。あ、そうだ。もっといい和解案があるんだ」
あろうことか……………

「お前京子のこと好きなんだろう?」

「は?」

「今日家こいよ」

その彼女を交渉材料に出してきた

こういう悪人はまま居る

ただ、当時の僕には初めて目にした存在だった
頭の中が真っ白になった

ただ、一つあいつに質問した

「お前は、大友を何だと思っている」

そこからはあまり覚えていない

気がつけば、荻野にマウントポジションで殴りかかっていた
周りには人だかりもできていた

その場で奴は大きな声で言い出した

僕がやっていることはストーカーだと

初めは何を馬鹿なことを、そう思った

だから僕はこいつはダメだ。大友にそう言った

ただ、今思えばどちらを信じるかなんて明白だ

殴っているのはクラスのあぶれ者

殴られているのはクラスの人気者

彼女も、そして野次馬たちも、どちらの言葉を信じるか
そう

おかしなのは、僕だった

そして、その大友京子が今

「随分楽しそうにしてるね」

この体育祭に来て、僕の目の前にいる

崇宮誠は閉じさせない part 1

優と一切の連絡がを取れなくなっただけから1ヶ月が過ぎた
いくらなんでもおかしい…………

ゲームをしないならまだわかる

秀知院の授業に追いつけねえとかもあるからな

ただ、メールすら返信がないのはあまりにも不自然だ

今までは新生生徒会スタートのゴタゴタで手が回らなかったが様子を見に行くか…………

「白銀会長、中等部への資料なんですけど。自分が持つて行っても良いでしょうか？」

「構わないが、何かあるのか？」

「ちよつと後輩の様子を見に行こうと思ひまして」

「わかった。こっちも資料整理がままならないからな。よろしく頼む」

「任せてください」

よし、じゃあ様子を見に行くか…………

《〜崇宮君、移動中〜》

さて、資料の届けはこれで終わりだな

それにしても、久し振りだなこの校舎も

「優は確かこのクラスですね」

昼休みだし全員いると思うんだが

さて、クラスでも浮いてるって言ってたが

大丈夫だと良いんだが

「失礼します。高等部の崇宮です。石上くんはいらっしゃるでしょうか」

「……………」

「…………!!」ガタッ

……………空気が変わったな、何か後ろめたいことがあるんだろうな
それに、こいつらの目

よく見る目だ、自分は正しいことをしていると錯覚して、貶してい

た奴が大きな力を持つてることに気づいて怯える目だ……………

「石上に何かかようですか？あいつだったたら停学中になつてそつから学校に来てませんよwwww」

「へえ……………」

停学してそのまま来てない、ね……………

あいつがそうなる程の何かがあったのは間違いなさそうだな

「もしよかったら、僕が「結構です」……………え？」

「個人的な用なので結構です。教室の雰囲気悪くして申し訳ありません。それでは」

あれは、やってるなイジメかそれに近いものを

そして、教師サイドも放置している臭いな……………

とりあえず、ロッカーに借りてたゲームは入れとくか

「優のロッカーはここですね」ガチャツ　ベチヨツ

なんだ？これは？

「あ？」

あいつら……………こんな陰湿なことやってんのか……………

舐めやがって……………

「ふざけんじゃねえぞツ!!」

バギヨンツ!

「何々々。え、やば」

……………ロッカー、壊れちまったな

片付けに行くか。このロッカー、付け外しできるタイプで良かった

な

《〜崇宮君、移動中〜》

「何あれ……………。ヒツ、ロッカー持つてる」

ちよつと重いな

それに視線が鬱陶しいな

まあ、今はんなことどうでもいい

とりあえず、早くロッカー交換しねえと

「よつこらせ」ガシヤンツ

さて、入るか

「失礼します。ちょっとロッカーを破壊しちゃったんで交換したいのですが、予備ってどこにあるでしょう?」

「な、何でそうなる!!それにそのロッカーは誰のだ!!」

「ああ?ああ……こいつ優のこの担任か……」

「石上優のロッカーです」

「ああ……あいつのか。じゃあ、置いておいて構わない。問題にはしないから」

「ああ!?」ブチッ

「てめえ、停学開けても来ねえ奴のロッカーだからって舐めたこと抜かしやがって!!」

「……まれよ」

「ん、何だ?早く退室しなさい」

「お前それでも教師かよツ!!」

「な、何だね!」

「何だねじゃねえだろうが!」

「自分の担当生徒のロッカー破壊されてそのままにしておけつてどういうことですか!」

「何だよ!?今の声!!」

「誰が騒いでるの?」

「外野がうるせえ」

「外野!!うるさいっ!!」

「……………ヒツ!!は、はい!!」

「はあ……………ここで言っても仕方がないな……………」

「もういいです。とりあえず、ロッカーは交換して帰ります」

「お、おい君」

「あなたの意見は聞きません。自分は自分のしたいことをさせていただきます。失礼しました」

「こうなったら、状況やここまでへの流れ含めて、徹底的に調べてやる」

「優、連絡もつかなければゲームもしてねえからわからねえが、遅くとも卒業までにはなんとかしてみせる」

だから、待っててくれ

《〜崇宮君、移動中〜》

「誠、ごk……何だその服は!？」

「崇宮さん!?!何で服がそんなに汚れてるんですか!?!」

ん? ああ、あの泥やらでだいぶ制服が汚れてるな、もう帰るだけだしどうとでもなるだろ

「今はそれは置いておいてください。会長少しお話があります」

「あ、ああ。で、どうした?」

「忙しいことは承知の上ですが、少し生徒会に来る回数を減らしても良いでしょうか?」

「……………どうしてだ?」

話すしかないか

「友達を救う為です」

「ええ!?! 一体何があったんですか!?!」

「崇宮君、ちゃんと説明しなければわかりませんよ?」

「わかりました……………」

説明するか

《〜崇宮君、説明中〜》

「そんなことが……………」

「正直、優……………いえ、石上優がそんな人間だと自分は感じていません。それに」

「それに?」

「どんな理由があろうとも、加害者をイジメていい理由にはなりません」

これは俺の中で譲れない部分だ

絶対に何があってもそんなこと許されない

「なるほど、崇宮君は知り合いだったのですね」

「四宮、知っているのか?」

「はい、噂程度ですが」

「だから、申し訳ありませんが、しばらく不定期に参加する形にします。それでh「ちよつと待て」……………何でしょう……………」

早く調べ上げたいんだがな……………

「藤原書紀」

「はくい!!ちよつと詳しい後輩にその辺の話聞いてきます!!」

「……………は??」

何で、藤原がそんなことを……………

「いえ、会長これは私情です。ですから…………」

「そうか。なら俺たちも私情だ」

ああ……………そうか……………

「そうですよ!!こういうときは頭数が大事なんです。ね、かぐやさん」

「そうですね。私も出来る限り協力します」

この人たちは、そういうお人好しだった……………

忘れてたな……………

「では、よろしくお願いします!!」

「「おう(ええ)!!」」

《それからしばらくして……………side石上優》

あれから僕は一ヶ月の停学となった

当然だ。殴ってこちらに比があることは明白だったから

罰はその停学と反省文だけだった

当時は軽いなど、率直にそう感じた

ただ、そこから正しく停学が罰であると思ひ知らされた

毎日普通に通えば数倍は楽であろう課題をこなし

毎晩親父には怒鳴られ

毎週末の課題提出時には教師に小言を言われる

それでも、反省文だけは書けなかった

僕自身、全く間違った行いをしていないという自負があったからだ

だから、僕は停学が開けても学校に通うことが出来なかった

そうして、親父はついに僕に手を上げ始めた

当然だ。中学生にもなった息子がごめんなさいの一言も書けない

のだから

先輩からもメールやゲームでも連絡が大量に届いていた

ただ、怖かった、先輩も荻野の言うことを信じていたらどうしよう

……

そんなことが頭をよぎってメールを見ることが出来なかった
そうしたある時

あの教師からこんなことを言われた

「荻野も謝れば許してくれるんだから、いいやつじゃないか」

目の前が真っ暗になった

何を言っているんだあいつは

全部告発してやる

そう思い何度も告発分を書いてやろうとした

そうして、世間ではクリスマスだ年明けだなんだと言っている間に
僕が書けた文章は

ただ媚びるように謝罪だけを述べた文章とも言えない言葉の羅列だ
った

ああ……誰か……

僕を助けてくれ消してくれ

崇宮誠は閉じさせない part 2

あれから2週間が経った

「とりあえず、調べる事のできる範囲で調べてみたが」

「やはり」

「ああそうだ」

「あまりに不自然な点が多い」

「なんで優は沈黙を貫き通しているのか」

正しい行いをしたはずの荻野とかいう生徒がビクビク怯えているのか

とにかく謎な点が多すぎる

「ですが、これらはすべて一つの仮説を基に成り立っていますから、確固たる信頼は得られないでしょうね」

「そうだ。俺たちから言わせてもらえばその石上優という生徒が誠の言う通りの生徒ならばという話になってくるからな」

「それはメールのやりとりを見せて理解していただけたと思っていました。信じていただけませんか？自分を」

そこばかりは、御行やみんなにはわからない部分になってくるからな

俺から見た石上優を信じてもらうしかないな

「崇宮さんの言う通りですよ。かぐやさんはともかく、会長は私より長い付き合いなんですから信じましょうよ!!」

ナイス!!藤原!!

「それはそうなんだがな……………」

「校内での情報だけを精査すれば、荻野さんという生徒に部があるように見えますね」

まあ、そうだろうな

片や学校の人気者、片やあぶれ者だ

何を考えているかわからねえのは後者だもんなあ

「ですが……………」

「ええ。ですから、私もツテを使ってしっかり調べてみました」

「副会長……………」

この件については完全に私情だからあんまり別邸で聞かなかつたんだよな

まさか動いてくれるとは……………

流石、頼れる御行関連以外では頼れるご主人様だな

「どうだった、四宮」

「結論から言うと、尻尾は出しませんでした。ですが、そういった輩との交流は確かにあったようです」

「つてことは!!」

こりや、ほぼほぼクロだな

それにしてもあつたようですか……………

もしかして、早坂に調べさせたのか!?

まあ、大丈夫だろうけどさ、あんまり危険なことはしてほしくねえなあ

「ああ、ただそうなつてくるとこの件は慎重に動かざるを得ないな」

「そうですね」

「ええっ?! 崇宮さんまでなんでえ!？」

そりや、だつて

「もし仮に大友という生徒を守るために沈黙していたなら、リベンジポルノの可能性があるからです（な）」

「っ!!なるほど、そういうことですね!!」 ビシッ

こつちに指さしてくんな

で、だ

「とりあえず、年内に1度は優の家に行きたいですね」

「そうだな。その辺は俺から学園側に取り合ってみよう」

「私、ここからできることあります〜?」

藤原、ここまで本当に助かった
でも

「いえ、ここからは自分のやる仕事です。藤原さんには色々調べていただいたので、ゆっくりしてください」

「では、私もゆっくりさせていただきますね?」

「ああ、二人ともここここまでご苦労だった。あとは俺たちに任せてくれ
さして、優待つててくれ

絶対に悪いようにはしないからな……!!

《〜それからしばらくして〜》

色々と時間がかかっちゃまって冬休みになっちゃったな

さして

「誠、準備はいいか？」

「ああ、開けてくれ」

「それじゃあ……………行くぞ」ピンポン

優、待たせたな

「は〜い」

「すみません。秀知院学園高等部の生徒会長白銀御行と」

「同じく生徒会総務の崇宮誠です」

「本日はご子息の石上優くんにお話があり、お伺いしました。中に入
れて頂いてもよろしいですか？」

「は、はあ……………。どうぞ、中へ」

意外とすんなり中に入れるもんなんだな

にしても、優の母親ずいぶんと疲弊してるな

そりゃそうか。自分の息子が不登校になって挙げ句復学できて
ねえもんな……………

「あなた、秀知院学園の生徒会の方々ですって」

「生徒会？なんでまたそんな奴らが来るんだ」

「なんでも優に話があるそうで」

なんとというか、感じの悪い父親だな

まあ、気持ちにはわからんでもないけどな

「で、一体どのようなご要件で？」

「ご子息の石上優さんの復学についてです」

「そんなことなら一人で良かったのでは？もう一人はなんのためにこ
こに来たのかな？」

「自分は優と仲良くさせてもらっています、少し様子が気になった
ので補佐という形でここに居ます」

実際は、強行突破も視野に入れてるからついて来ただけなんだけど
な

まあ、とりあえず表向きは補佐ってことにしとくか

「それで、優さんの復学についてですが……………」

「ああ、それには及びませんよ。なんせあいつがどう考えても悪いの
ですから」

ほくん……………」

「失礼ですがお父様、息子さんから話を聞きましたか？」

「ええ聞きましたとも。あの年になって謝罪の一つも出来ないとは、
情けない限りです」

あ、あ？

「今日はその件でお伺いしました」

「いえいえ、お気になさらずこれは我が家の問題ですから」

……………なんだコイツ、鬱陶しいな……………」

「失礼。お母様、優の部屋はどこでしょうか？」

「あの子の部屋は……………」「待ちなさい」

「何でしょうか」

「なぜ、あれの部屋を聞くのかな？」

はあく、もうまどろっこしいな!!

「誠、待て」

「俺はあんたと話に来たんじゃないからだよ!!」

「な、なんだと!？」

「じゃ、そういうわけだから、御行悪いがあととはよろしく」

さて、間取りはわかってるんだ

なら、一人部屋に出来そうな場所に行くだけだな

「待ちなさい!!」

《その頃 side 石上優》

なんか、下が騒がしいな

まあ、そんなこと、僕には関係ないか……………」

「……………なさい!!」

「……………るせえ!!」

ん、なんか近づいてきてる……………?

「……………のしていることがわかっていいるのかね!？」

「……………ましい!!自分の子どもを信じられねえ親が講釈垂れんな!!」

この声、先輩……………?

いやまさかそんな……………

「しつっこいんだよ!!俺は優の友達だ!!あいつを信じてるからここに来た。一体それの何が悪いってんだ!!ああ!？」

「あいつが悪いことは状況的にも明らかだろう!信じてどうなる?」

父さん……………

まあ、そうだろうな客観的に見れば悪いのは100%僕だ……………

「……………!!それが父親の言う事か!?もういい!!優、入るからな!!」

「待ちなs」まあまあ石上くんのお父さん、下で僕と話しましょう。まだ話の途中ですし、何より息子さんについて少しお話ししたいこともありますから」な、何だね君は、あ、ちよ、待ちなさい!!」

なんで……………

「ふう、助かったぜ御行。さて優、開けてくれ」

なんで……………

「お〜い、優?いる……………よな?鍵閉まってるし」

「なんでいるんですか……………先輩……………」

《視点は戻つて〜side 崇宮誠〜》

なんでいるんですかって……………

「俺はお前の友達だからな」

「……………つ!!」ガチャッ

ん、開けてくれたな

よし、じゃあ入るか

「失礼しまーす、と」

だいぶ荒れて拗れた跡があるな……………

全く、親なら子どもの言うことを少しは信用しろっての頭ごなしに叱ることに価値なんて存在しねえんだからよ

「さて、じゃあ事情の説明から入ろうか」

「はい……………」

《くく崇宮君、過去編説明中くく》

「以上が、俺たち生徒会の見解だ」

「はい……………」ポロポロ

え、泣いてる!?

え、えーつとこういうときはどうすれば……………

あれ、なんか違ったのか……………?

「ゆ、優? なにか、こう、おかしな点があったか?」

「い、いえ、ただ、信じてくれる人が、いると、思わなくて……………つ

!!」

「そうか、辛かったな。よく耐えたな」

「うわあああああ」

全く、こんなになるまで一人で抱えるんじゃねえよ

世話の焼ける後輩だな全く……………

「で、だ。落ち着いたか?」

「なんとか」

「それじゃ、事の顛末を話していくぞ。大丈夫か?」

「大丈夫ツス」

よし、じゃあ話すか

「まず、大友という生徒についてだがな」

「どうなりましたか?」

「喜べ、一切手は出されていない」

「つ!! そうツスカ……………」

だいぶ元気が戻ってきたな

これならあと一押しで復学についてまで話しても問題なさそうだな

「で、だ。問題の荻野とかいうカスについてだが」

「あいつは何してるんですか!!」

「ビクビクしながら過ごしてるよ」

「え、どうして……………」

どうしてって、そりやお前

誰だって怖いだろ

「自分が陥れた相手が課題だけ出してずっと復学しないんだぞ？怖いに決まってるだろ」

「まあ、そうですね」

それに、

「面白かったぞ。お前の教室で話題に出したときのあいつの反応」

「え、ちよつと待ってください。先輩、僕の教室に行つたんですか？」

え、そんな反応する？

なんで目え見開いてんだ？

「いや、行くだろ。音信不通だつたんだから」

「あ、はい。それはわかりました。で、荻野の奴どんな反応でした」

「目に見えて動揺してたよ。うっわ、俺敵に回す相手間違えたかも、みたいな顔してたぜ」ケラケラ

「ぷつ、笑いながら言うことつすか？」

笑いながら言うだろ

アホ面晒してたんだからな

「で、だ。まあ、結果的にお前は最善の選択肢を取り続けてた訳だな。

誇つていいぞ」

「そうですね………。ありがとうございます、先輩」

と、いうわけで

「お前が、反省文に書く言葉は決まってるんだよ」

「え、形だけでも謝罪するんスか？」

そんなわけねえだろ

謝罪の必要がない以上謝罪することは悪手だからな

だから、書くことは一つ!!

うるせえバーカ!!

「この一言でいいんだよ。お疲れ様、優」

「本当に、ありがとうございます。先輩っ!!」ボロボロ

泣くなよ

先輩として、友人としてできることをやっただけなんだから

「さて、ここからは復学について話そうか」

「さて、ここからは復学について話そうか」

「できるんですか？」

「大丈夫だよ。ただ、復学は高等部が上がってからになる」

「なんでですか？」

そりゃ、お前

荻野を消してから復学させるためだよ

あの、えーつぐい秀知院VIP勢にかぐや嬢が洗いざらい話してるころだろうし、間違いなくあの学園にはいられねえよ

……………こんなことは、言うべきじゃないな……………

「簡単だ。それまで俺たち生徒会メンバーでお前に必要知識を叩き込むためだ」

「休学中の、つてことですよね？」

「ん、ああそれもあるな」

「それ以外になにかあるんすか？」

あ、言っってなかったな

「お前を生徒会会計にスカウトしたい」

「え、どうしてですか」

「噂や起きたことを完全に葬りさせることは出来ない。だから、せめて居場所を持ってほしいって、ウチのトップの申し出なんだよ」

「お人好しですね。白銀御行会長は」

「ホントだよ……………」

眩しいほどにお人好しだよ、あいつは